
時の支配者

こんこん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の支配者

【Nコード】

N1912F

【作者名】

こんこん

【あらすじ】

「紫煙の門」の続編となります。あれから三ヶ月、季節も変わり、一見落ち着いていたように見えたが、主人公、海の周りでは護門徒候補者争いが始まっていた。それに巻き込まれた海は次々と襲い掛かる難題を乗り越えることに・・・神徒協会、八鬼も巻き込んで、世界の終焉の戦いが始まる。

1話

夏も終わり、秋が深まってきた。

空を見上げるとすっかり秋の雲で、鱗雲が目の前に広がっていた。

真っ赤な季節になりつつある、辺りの風情を少し楽しみながら、俺は一人公園にいた。

あれから三ヶ月。

夏休みの間に起きたあの出来事は俺の人生観を変えた。

それもいんな意味でだ。

クラスメイトの真希や京の死…そして狂っておかしな肉体になった同級生の悠斗。

それらを全て操っていた織斗。

異世界からきた青い目の少女みゆ。

どれもこれも現実離れしていて、俺には馴染みの無い世界だった。

しかしそれでもここにいた。

あれから事後処理として神徒協会が警察機関に掛け合い、それらの全てを闇に葬った。

真希は強盗殺人の被害者。

京と悠斗は転校という形で世間の目を欺くことにした。

真実を知っているのは、俺と幼馴染の朱里だけだった。

神徒協会の使者からは、護門徒としての後継者にするかどうかは別として、

これまで通りの生活をするように言われた。

俺自身も良く分からなかった。

いきなり見たこともない連中が押し寄せて、聞いたことのない話を次々にしていくのだから。

しかし分かったことは二つあった。

一つは護門徒の席は現在空席で、俺が父親の跡を継ぐとは限らないこと。

もう一つは、神徒協会の枠組みに沿って行動しなくてはならないこと。

もしも無視した行動をするなら、神徒協会の敵に回るようになるとはつきり言われた。

その時には強制的に排除、つまり死を持って償うということが分かる。

そして俺の父親もその存在だと言われた。

父親が姿を消して三年。

はつきりとした護門徒の後継者は見つからなかったらしい。

それなりの能力者が仮の役割を果たしていたらしいが、それも上手くまとまらず揉めに揉めたらしい。

それだけ、護門徒という役割は競争率が激しく、過酷な業務だということが分かった。

だからこそ織斗の一件が起こった時には後手に回っていた。

仮の護門徒は俺たちと織斗が出会う前に、実は殺されていたのだ。

だから、織斗はその後釜になったような形の俺の事を正式な護門徒だと勘違いしたのかもしれない。

話を戻すが、結果をそれなりに残したので、神斗協会も俺の事を無視することはできなかった。

父親の息子ということで高く評価されたこともあったのだろう。

だから、今は有力候補の一人としてここにいる。

そこで気付かされたことは、父親はとても有能な護門徒だということだ。

そうでなければ、競争率の高いこの役職に皆が納得して選ばない。

しかし何だって、逃げるように俺の前から姿を消したんだ？

それだけが気がかりだった。

俺はあの戦いから自分の未熟さを認識して、一人で自分の能力を鍛え上げることに没頭した。

俺の能力は一瞬だけ未来を垣間見ることができるとは、
今までは中途半端な力の使い方のせいで上手く使いこなしていなかった。

自らの肉体を鍛えなければ、それを生かすことができなかった。

だから簡単な基礎トレーニングをして、集中力を高める特訓を日々行うことにした。

それでも、まだまだ朱里の実力には及ばなかった。

守護人として俺を守ってくれるのは助かるが、そんなのはいつまでも続ける訳にはいかない。

俺がもっと強くならなくては…

そんなことを悶々と考えながらベンチに腰掛けていた。

すると、一人の男が目が付いた。

誰だ？見慣れない顔の男だ。

年は俺と同じぐらいか…それに、赤い髪が不気味だな…

その男は赤い長髪で目の色は青かった。まるで外人だが、顔の作りは東洋人そのものだった。

そして背は俺よりも少し小さかった。

俺の身長は178センチなので、170センチちょっとというところか…

しかしどことなく怪しげな雰囲気を漂わせている。

俺は相手を一度見ただけで、目を逸らしたが、そいつはあるところか、どンドン迫ってきた。

何だ？喧嘩でも売ろうつてのか？

俺はドキドキしながら、近寄る男の方を見た。

「お前か…護門徒の候補者って奴は…なんだあー、頼りなさそうだなー」

そいつはとんでもないことを口にした。

「お前…何故それを知っている？」

俺は慌てて聞き返したが、そいつはまるで取り合ってくれなかった。

「まあ、今日は挨拶だけに来たわけだから、後でゆっくりと話して

もしよう…

お前とはこれからも縁があるさ」

そのままどこかに行ってしまった。

「何なんだ？あいつ…」

勝手に話して勝手に帰っていったあいつが理解できなかった。

俺はベンチから立ち上がったまま、何もできなかった。

そしてしばらくすると、そこに朱里が姿を現した。

「何してるの？そんな所で…」

冬服の制服に身を包んだ幼馴染がそこにいた。

俺はあっけに取られていたので、朱里の言葉で現実に戻された。

「あ、ああ…そうだ、赤髪の奴見なかったか？さっきまでここにいたんだけど…」

身振り手振りで説明したが、朱里はいまいち、ぴんとこなかった。

「え？そんな人すれ違わなかったけど」

お互いの温度差を感じた俺はあっさりと身を引いた。

「ああ…そうか…まあ、いいや…」

そのままなかつたことにしようとしたが、朱里は食い下がらなかつた。

「誰？気になった人でもいた？なあ、答えるよ！」

「ちょっと目立った奴がいたから気になったただけだよ……」

「本当？かわいい人でもいたんじゃないの？」

「どことなく冷たい視線で俺の方を見ていた。そんな……やましい」とをしたわけじゃないのに。

「茶化すなよ……それよりも俺はバイトに行くからな」

少し怒りながら俺は朱里をその場に残して公園から出て行った。

2話

夜中の工事は未だに慣れない。

俺はどちらかというとき夜更かし人間ではないから。

しかし日々の生活のためには必要なことなのだ。ここで弱音なんか吐けるか。

その意気で剥がしたアスファルトを運んでいく。

秋に入ったとは言え、こんだけ動けば汗もかく。

気温十度以下の今晚も長袖Tシャツ一枚で十分だ。

テンポよく一輪車に乗せてどんどん運ぶ。

その姿を見て、純は俺に話しかけた。

「おい。何かあったのか？」

仕事中に話しかけるとは…そう思いながら、俺は動きを止めた。

「どうしてそう思うんですか？」

「いやー…いつもと感じが違うからさ。まさか、喧嘩でもした？朱里ちゃんど…」

「ば…馬鹿なこと言わないでください。そんなことないですよ」

少し動揺しながら目的の場所までアスファルトを運んでいった。

うーん、腰にくるな、この作業は…

そう思っていると、休憩時間に入ることになった。

適当に空いている所に腰を下ろすと、再び純がやってきた。

この人は…そう思いながらも黙って様子を伺った。

「おーい。海くん。どうかしたのかな？」

「いえ…どうも shouldn't ですよ」

「妙に苛立っているじゃない？元氣出そうぜ。振られたからって…」

「何で、そこまで話が飛んでいるんですか！そんなんじゃないですよ」

「いいねえー悩め若人！そして前に進め！」

「何かのパクリですか？」

「いや、俺の言葉」

「ありきたりですね…」

その言葉を聞くなり、純は子どものように駄々をこねた。

「うわーん。海がいじめたあー」

この人は…扱いつらいことこの上ない。

「はいはい…話変えますけど、今日、赤い髪で目の青い同じ年くらいの奴見かけたんですよ。

純さんそんな目立つ奴心当たりありますか？」

「何で俺にそんなこと聞くの？」

「だって…ファンキーな者同士で通じ合っつていうか…族の頭やっていたなら知ってるのかなって…」

「あのね、海くん…僕はもう、そんなお子様の遊びは卒業したんだよ。

それに同じ者同士だなんて偏見もいいところじゃないか！

赤い長髪で青い目を持つ奴？そんなの心当たりがないよ…ははははははー」

「いきなり自分を僕だ何て呼ばないで下さいよ。

気持ち悪さ丸出しですから…それに、俺は長髪だなんて一言も言っつてませんよ。

知ってるんですよ。早く教えてください」

「鋭いねえー君は！まさか、名探偵か！」

「はいはい…」

こころ変わるキャラクターについていけない。

「数日前だったかな…ここの側にある大きな西洋風の屋敷に引越す車を見つけたんだ。」

俺も何かなーって覗いたらそこにそんな奴がいたな。

でも、あんなでかい屋敷に一人で暮らすって何だろうつて俺も気になったよ」

「一人だったんですか？」

「ああ…親らしい人物はどこにもいなかった。」

だから一人だろ？あんな屋敷に一人で暮らすなら俺も一緒に住みたいなーうん。」

寝食共にしてもいいくらい…」

「あの…そつち系の趣味もあるんですか？」

嫌味のつもりで話したが、俺のその言葉に純は呆れた顔をしていた。

何かまずいことでも言っただかな？

「はぁーお前本当に分かってないね。まあ、いいさ…もしお前が知り合ったら俺にも紹介してね」

意味も分からないまま、休憩時間を終えて再び仕事に掛かった。

そしてバイトは深夜の二時まで続いた。

翌日、寝不足のまま学校に行くと、クラスは騒がしかった。

みんなが話している内容を聞くと、どうやら転校生がやってくるらしい。

しかも俺はそんなことどうでも良かった。

昨夜の疲れが残っていたので、着いてから席につくとそのまま夢の中にいた。

何時間経ったのだろうか。

久しぶりに起きることなく昼まで寝てしまった。

ゆっくりと目を覚ますと、みんなで学食に走る姿が見えた。

やべ…寝すぎた。

慌てて起きてから、すぐに教室から出ようと思った時に、クラスメイトに呼び止められた。

「海くん…さっき転校生の子に伝えておいてくれて言われたんだけど、

屋上で待ってるから来いだって」

「え？俺？」

「何でも知り合いだから、だって…」

そう言えば俺は転校生の姿かたちを見ていなかった。

俺を名指しで呼んで、知り合いとは…そんな奴いたか？

思い当たる節はなかったが、無視する訳にもいかず、分かったと返事をして屋上に向かうことにした。

3話

屋上にはほんの数分で着いた。

早くしないと昼食のパンが売切れてしまうので、用件は手短に願いたいものだ。

そんなことを思いながら、ドアノブを回すと、いつものように軋むような耳障りな音が響いた。

ドアを開けるとそこには悠長に街を眺めている一人の人物がいた。

「ん…」

女か？

数メートル先にいたそいつはスカートをはいていた。紛れもなく女だ。

俺の女の知り合いは数えるほどしかいないが、誰なんだよ？

ゆっくりと近づくと、そいつはこちらに気付き振り向いた。

その瞬間、言葉を失った。

「あっ…あああ…お前…」

言葉にならないとはこのことだ。

俺は間違いに気付かされたのと同時に昨夜純が言った言葉の意味が分かった。

ここまで言えば分かると思うが、そこにいたのは、昨日公園で会った、あの赤髪の奴だ。

俺はてつきり男とばかり勘違いをしていたが、スカートをはいているのを見て、根本的な間違いを正すことを余儀なくされた。

「遅いな…お前、時間も守れないのか？」

嫌味の先制攻撃を受けた。

「いや…その…」

「何をそんなに驚いているんだよ。お前は。私がここに引っ越してきてもおかしくないだろ、もうすぐ護門徒の後継者争いが始まるのだからな」

「え？何のことだ？」

「お前…そんなことも知らないのか？」

「ああ…その前にお前が何者で、どうしてそういついきさつになったのか説明してくれないか？」

俺にはさっぱりだから」

「面倒くさい奴だな。神徒協会から何も知らされてないのか…ま、いいだろう。」

少しなら説明してやるよ。そうだ、まずは自己紹介か。全く…お前が起きていればこんな二度手間ないのにな」

悪かったな、寝てばかりいて。

「私は柴木立花。神徒協会の一員で中国から派遣された。とりあえず聞いておくが、お前は神徒協会についてどこまで知ってる？」

「全然…だって、つい三ヶ月前に俺の元に使者が来て、護門徒にするかどうかは協議してから決めるとそれっきりだ…」

まあ、生活の縛りはある程度受けたがな」

「む…」

今、立花の表情が少し曇ったかのように思えた。しかしすぐに気を取り直して話した。

「なら、大まかに教えてやるよ。

この世界には七つの門と七人の護門徒が存在する。それらを統括するのは神徒協会だ。

それ位は知ってるよな」

「ああ」

「設立は千年前で、当時設立者のメンバーは門の中が何かを知っているらしく、

それが完全に開くことを必死に阻止したらしい。

特異な能力でな…それが起源らしいが、門の中の詳細はトップシークレットになっている。

だから誰も知らない。そして、神徒協会にはその秘密を知る三賢人がいる…

位で分けるなら、三賢人がトップで、次に評議会メンバー数人、そして護門徒がきて、

最後は私たちのような護門徒候補生と神徒協会信者だ」

「おいおい…信者と同格かよ…」

「実力主義だからな。」

それで、協会自体は世界規模で運営されていて、国の権力の縛りを受けない形になっている…

門はそれだけ重要な危険物。それを取り締まるのは我々だけだから当然の結果だ」

「あれは本当に軍事力ではどうにもならないのか？」

「門自体が空間に深く干渉している。それを物理攻撃で消滅させようなど無理だ。」

だから人間の持ち得ない能力を持つ者の力が必要なのだ」

「そういうものか…それで、護門徒はそもそも何をするんだ？その目的もよく分からない」

「あのなあ、お前何も親父から聞いてないのか？」

立花が頭をかきながら、知識の無い俺に苛立ちを見せ始めた。

「ああ、親父は放任主義だったし、俺に護門徒にはなってほしくなかったらしい…」

「そうか…それでか、お前がそこまで護門徒に執着しない訳も」

「執着？意味が分からないな」

「護門徒は言うならば、一國を仕切れる位に力のある人間なんだ。だって、門の開放を止められる唯一の存在だからな。」

それは法律に縛られることのない力を持つてことなんだ。

それを魅力的な存在と言わないで何と云う？誰も逆らえないし、裁くこともできない。

「真正正銘の自由を得た人間だ」

その発言には俺はどうも納得できなかった。だから反論した。

「そうか？所詮は神徒協会の枠組みの中に捕らわれているんだからおかしくないか」

「うるさい、揚げ足を取るな。魅力の一例を挙げただけだ。」

話を戻すぞ…えっと、職務の話だったな。

簡単なことだ…主に門の出現区域に滞在して、万が一開くようなことがあれば、それを未然に防ぐ。それだけ…」

内容が大雑把過ぎて俺には理解できなかった。どうやって向こう側から開いた門を閉じるのかも、そもそもどういった経緯で門が現れたのかも分からない。

「おいおい…それだとまるで意味が分からない。俺は何も知らないんだ。」

もっと詳しく説明してくれ」

その言葉が、今まで我慢していた立花の癪に障ったのか、態度が

急変した。

「お前…いい加減にしろよ。」

護門徒の候補者つてのは、幼少から血反吐を吐くような修行を積まされたんだ。

修練、修練、その毎日だ。

そんな私たちからすれば、何も知らないお前はム力つく存在以外の何者でもない！

のほほんど生活をして、才能や親の力だけで、後釜を継ごうとしているんだからな。

しかもそれをどうでもいいと思っていやがる」

「いや…そんな気はない。正直に父親から何も聞かされなかったんだ。」

だから俺にはまだ理解できていない部分が多すぎる…」

「分かったよ。やっぱり体で分からせる方が手っ取り早かったな…最初からそうしていれば良かった。顔見せして宣戦布告で終わるうなんて虫が良すぎるよな…」

くく…」

何の話だ？話がどんどん違う方向に進んでいる。

「おい…何をやる気だ？」

俺は殺気を感じていた。

立花が俺に放つ殺気は本気のものだった。それは試すとかそんなものではない。

「ここで殺せば、一人候補者が減るからな」

4話

本気だ…

どうする？武器らしいものが俺には無い。

それに相手の実力など全然分からない。力を見誤ればその時点で死んでしまつかもしれない。

戦いとはそういうものだ。相手に自らの手の内を知らせる前に殺してしまえば方がつくのだ。

「本気か？」

「くく…どう捉えてもらっても結構だ。ただ、私はお前の事がとても嫌いになったがな」

そこまで言つと立花の姿が消えた。

「何！」

消えるように動いたのではない。本当に姿を消したのだ。

しかし俺は立花の姿を自らの能力で感じ取った。

未来の立花の姿をそこに見たのだ。

俺の真後ろ…

そう思い、いや、感じて、背中に襲い掛かる殺気から逃れるように前に向かって大きく飛び跳ねた。

しゅん！

鋭利な刃物が空を切る音が背後から聞こえていた。

すぐさま振り返ってそこを見ると、やはりそこには立花がいた。しかも手には短剣を握っていた。

おいおい…学校に刃物はまずいだろ。

「貴様…かわしたのか」

かわされた立花はそんなはずはないといった表情をしていた。

そしてまた、立花は姿を消した。

またか！

俺は再び先読みをすることになったが、今度は俺の左側に立花の姿が見えた。

なるほど、首を確実に狙って殺す気か。

消えると同時に脳裏に焼きつく数秒後の世界。

立花が俺の首筋に短剣を突きたてようとしている。

それなら俺はそれを利用する。

立花が現れたのを見計らってその手を掴み、足を払うと地面に転がせた。

そしてすぐさま馬乗りになると、掴んだ手の剣をそのまま相手の首筋に当てた。

「あ…」

瞬時の出来事で立花は反応できなかった。まさか自分の能力を読む奴がいるなど思わなかったのだらう。

だから無様に天を仰いでいる自分の姿が想像できなかった。

「お前の負けだ…」

俺は相手を傷つけることはしたくなかったので、そこまでにしておいた。

しかし相手は一筋縄ではいかなかった。

「ふざけんな。お前、自分が殺されかかっていたのにそいつを助けるのか？」

その目は真剣そのものだった。

まるで覚悟を決めた目だった。

「ここで殺さなくていいのか？」

「いや…その…俺にはそれはできない」

立花は呆れた顔でため息を一つついた。

「何でこんな無気力で軟弱な奴が有力な候補者なんだよ…」

そのことを言われると反論の余地がない。

「知識はない。覚悟も無い。忠誠心すらないだろうが！
上辺だけの正義感なんて必要ないんだがな…」

「うるさい！俺は、護門徒になりたくないなど一言も言っていない
！」

思わず頭に血が上って大きな声を出してしまった。しかし立花は
それを見て、表情を緩めた。

「そうかい…それなら、いいさ。お前の覚悟つてのも分かった。さ
あ、どうする？」

「このまま殺してもいいんだぜ。
っていつかお前の肘がさつきから胸に当たってくすぐりたいんだ
がな…」

視線を肘に移すと、そこには軟らかい感触と共に押しつぶされた
立花の胸が…

…

俺は思わず赤面しながら飛び上がってしまった。

「やれやれ……」

立花は体が自由になるとゆっくり立ち上がった。

「うぶだな……くく……」

俺を見ながら笑っていた。

「う……うるさい……」

立花はスカートを叩いてホコリを払い、入り口の方に歩いていった。そしてドアの前まで行くと、

「あのさ……今日は私の負けだけど、いつか殺してやるから……忘れるなよ」

そんな恐ろしいことを話して下に下りていった。

俺は何がなんだか分からないまま、一人で呆然としていた。

おいおい……

これから同級生に命を狙われるのかよ……

5話

次の日から、俺は立花のことを避けるように下校をしていた。

授業中は流石に殺気を放つことはなかった。

しかしあいつのあの口ぶりだと、いつ闇討ちをしてくるか分からないからな。

警戒は怠らないようにしないと…

ぶつぶつ独り言のように玄関先でうろつろしているとき、朱里が後ろから声をかけてきた。

「おい！海！」

心臓が飛び出そうになった。

「うわぁ！何だよ！お前か」

「何だよはないだろうが、ねえ、たまには一緒に帰ろう。聞きたいこともあるし…」

「ん？ああ…そうか…分かったよ」

朱里と帰るのは久しぶりだった。

世間話程度はしていたが、この三ヶ月間、ゆっくりと話したことはなかった。

二人並んで夕焼けを背に歩く姿はどこか絵になっていた。

「海…生活の方は落ち着いた？」

「ああ…生徒協会の連中もあれ以来顔を出さなくなっただけだから。これからどうするのも良く分からない。報告を待ての一言だったから。」

「そういや、お前の家には来たのか？」

「うん。事後報告とこの先の動き方について少しね…」

朱里はどこか寂しそうな顔をしていた。

「この先の動き？」

「海が正式な護門徒に選ばれなかった場合の話…」

「そういうことか。」

「別に気にするな…俺が護門徒にならなくても、お前はお前の使命を果たせばいい」

「でも…その…護門徒の継承者争いの話は知ってる？」

それは数日前に初めて凶悪な同級生から聞いていた。

「ああ…何人が候補者がいて争うんだろ？」

「それで…最悪の場合は殺し合いになるかもしれないの…」

朱里はそこを心配していたらしい。

しかし俺は強気の態度のまま話を続けた。

「そうはさせない。俺は何もせずに死ぬ気はない。だから心配するな」

それは以前の俺には有り得ない発言だったが、能力が自信に変わってもいるので、迷いはなかった。

その言葉を聞くと朱里は安心した。

いつもよような明るい表情に戻ると不意を突くかのように俺の腕にくっついた。

「おい……」

俺は思わず取り乱したが、朱里は全然気にしなかった。

「海もすっかり頼もしくなったな」

「あのな…俺はお前の弟か……」

俺は腕にくっつく朱里を無碍に振り払うことも出来ず、そのまま歩いていた。

朱里はというと、ずっとここにこじっばなしだった。

やれやれ…しょうがない。

そのまま寂しい帰り道を一人で歩くことにした。

目立った動きも無く、学園生活は続けられていた。

あの、目の上のたんこぶのような存在である柴木立花は相変わらず大人しい。

その大人しさが逆に不気味だ。

いつ仕掛けてくる？

そんな思いばかりが日々募っていく。

そしてあいつと出会って一週間後に、動きが見られた。

それは放課後の事だった。

いつものように一人で帰ろうとすると、あいつが俺のことを呼び止めた。

「おい…ちょっと顔貸せよ…」

不良の定番の台詞がここのでくるとは…

俺は悩みながらも嫌だと言つことも出来ず、ついていくことにし

た。

これで俺のつかの間の休息も終わりか。

後は修羅道まっしぐらといったところか。

そんなことを考えつつ、人気のない空き地へと連れてこられた。

ここで殺し合いが始まるのか？

そう思っただけで全身に力が入る。

護門徒の継承者争いで死人が出ててもそれは法的に裁くことはできないらしい。

だから心置きなく殺しができるのだ。

しかし俺はそんなのは嫌だった。

「やて…」

立花が俺を見るなり何かを企んでいた。

不意を突いての攻撃か？

いろいろな想定をしながら、あらゆる状況に対応できるようにした。

俺はどんどん五感を研ぎ澄ましていく。

武器は持っていないかったが、体術はだいぶ上達したからそれとかなるだろう。

来るならきやがれ！

「海…だったよな…」

今更名前を言ってもらっても困るが、俺は体勢を崩さない。

「ああ…俺とやり合っただろ？」

「エロいことを言うな！」

「どこがエロいんだよ！それよりも何だ。こんな回りくどいやりかたをして…」

「分かった…なら簡潔に話すか」

「その方がいい…」

互いに緊張感が走り、いよいよかと思われたそのとき、

俺の積み上げてきた様々な努力を一掃する言葉がこれから飛び出した。

「私に勉強を教えろ！」

「え？」

これまでの会話の流れと全く関係のないキーワードが出てきた。

俺もそのことに戸惑ったし、どこかで以前聞いたことのあるような言葉だ。

6話

「その…恥ずかしい話、この国の勉強が全く分からない…」

どんな環境でも適応できない者は護門徒としても相応しくないと私の師匠に口を酸っぱく言われているから…その…困るんだ」

そんな心配をしているのか…

「なら、護門徒を諦めればいだろうが。無理してやるな！馬鹿！」

俺はここぞとばかりに言葉の攻撃をしてやった。

だが、相手は怯まない。

「なら…この学校の奴らを皆殺しにでもしてやるよ。テストもろともな…」

「お前な…そんな理由で関係のない人殺すなよ。」

しかも大量に…そんならクラスの女に頼めばいいだろ？

それになんで俺が勉強できるってことになるんだよ！」

俺はその理由が知りたかった。

「クラスの女子とはそこまで仲良くない。それに好みがない…」

「好みだ？」

「いや…それと、お前が勉強が出来るのは、報告書にそう書いてあったからだ。頭脳明晰とな…」

「どの誰がそう判断して俺のプロフィールを書きやがったんだよ！
理解できない事実がたくさんありすぎて、俺は混乱していた。」

「根本的な問題で、お前：わざわざ学校に来なくてもいいだろうが。
護門徒になりたいなら、フリーターにでもなって襲い掛かって来
いよ」

「それは駄目だ。これは試されているんだ。」

「私がいかなる状況でもそこに対応できるかとな…
恐らく他の候補者も違う形で試されているはずだ」

「まどろっこしいんだな…一箇所に集めて決めればいいのにな…」

「知らない土地に行ってもそこで適応できるかを見るのがそこに隠
されているんだ」

「なら、一人でやれよ。俺がお前の手助けをする理由はない…」

「なら、私は逆切れを起こして、あの学校にいる奴らを皆殺しにす
るかもな…」

物騒なことを口にした。

「お前：卑怯な奴だな。そんな浅はかな行動したら護門徒にはなれ
ないだろうが…」

「お前と継承者争いをして巻き込まれたとも言えれば何とでもなる」

「無理があるだろうが！」

「私を非情な人間にさせないでくれ……」

「お前が言つな！」

どうしたらいい……

こんな厄介な荷物をしよいこんで、しかも自分の命まで狙われたら俺はよっぼどのお人よしだ。

どうしようか悩んでいると、そこに朱里が血相を変えて飛び込んできた。

俺が戦っているだけでも思い、後をつけてきたのだろう。

しかしそんなことも起こってはおらず、きよとんとした顔をして朱里のことを立花が見ていた。

「朱里……」

俺は朱里の姿を見た瞬間にぴんと良い考えが浮かんだ。

「そつだ、朱里に教えてもらえ！女同士でやりやすいだろう？」

「え？」

朱里は何の話をしていたのかも分からず、俺と立花を見た。

「彼女なら、十分お前の希望を満たしてくれるはずだ……」

悪い…朱里。そんな気持ちを抱きつつも朱里を薦めた。

しかし朱里が立花のことを見ていてくれれば、動きが取りやすいという理由もあった。

「ちょっと…何のこと？私にはさっぱりんだけど…」

それもそうだ。しかしそんなことも言ってもらえない。

「すまない…あいつに勉強を教えてくださいませんか？さもないとんでもない暴挙にでそうなんだ…」

さすがの気持ちで朱里にお願いした。しかし朱里には未だに理解できなかった。

「そもそもあいつ…護門徒候補者でしょ！そんなのんきなことしていいいの？」

「まあ、そうなんだけど、あいつ…支離滅裂なんだ…目的を見失っているっていうか。」

このまま野放しにしておく危険だから、面倒をみてくれないか？」

「そんな…」

「頼む…勉強だけ教えてくれればそれで、納得する…」

いたって普通のことを頼むのに何でこんなに力がはいるんだろう。

それというのも、あそこにいる無差別殺人兵器のせいだ。

「おい…立花だったか。こいつに勉強を教えてもらってくれ…それで勘弁してくれないか？」

「その子…まさか守護人の子か？」

流石にこついうことには耳が早いな。

「ああ…そつだ」

「ふーん」

じろじろと朱里のことをまるで舐めるように見回した。

その雰囲気には俺はどこか違和感を感じた。

「スタイルもいいし…強そつだな」

おいおい…何てことを言ってるんだ？お前、女だろ？

朱里も気味悪がっている様子だった。

「いいさ、こいつに教えてもらうよ。私好みだしな…ふふ…」

立花がぺろりと舌を出した気がした。

「は？」

朱里と声がハモってしまった。

「お…おま…お前…」

嫌な予感の中した。

俺の脳内は有り得ない速さで妄想を繰り広げていた。

それは…その…えっと…女が女を…それはまずいだろ！

「ふふふ…」

相変わらずこちらを見ながら不適な笑みを浮かべていやがる。

それらを含めて、俺が導き出した結果は一つだった。

「やっぱり俺が教えるわ…」

それしかなかった。

ちくしょう…そうでもしなきゃ、朱里の身を守ることができない。

こんな殺し屋のような奴に勉強を教えるのは危険だが、こいつと朱里を二人きりにするほうがもっと危険だ。

「そうか…まあ、お前が教えてくれるなら、それでもいい」

「ならこつちからも条件がある」

「条件？」

「ああ…テスト終了期間までは休戦にしてくれ。それと、情報をもらおうか…そうだな、神徒協会の詳しい情報と、俺の父親についてだ…」

最低でもそれぐらいの見返りがなければ俺も納得はしない。

ここで一戦交えても良い覚悟だ。

しかし相手はそれを始めから容認するつもりでいたのか、少しも驚かなかった。

「ふーん。言うじゃないか。

確かにフェアじゃないから、それは当然教えるさ…それに候補者の情報もおまけする。

お前には一回負けたようなものだからな、もっと時間を掛けるさ…」

蛇のような奴だな。

しかし俺にも魅力的な交換条件ができた訳だから、それでお互いに納得することにした。

「そうだ…」

話も終わり朱里と共にその場を立ち去ろうとした時に立花は俺を呼び止めた。

「もう一つ条件を付け加えてもいいぞ」

「何？」

「その守護人が駄目なら、お前が相手でもいいぞ…」

「は？何の？」

「いや…別に…」

何のことを言っているのか理解できなかったので、そのまま流すことにした。

しかし去り際に、

「よく見れば、お前も好みだからさ…」

小さい声で呟いた気がした。

それを俺が聞き取ることにも出来ずに無視する形になったが、背筋がぞくぞくした感じはした。

こいつ…本当に危ない奴だ。

7話

勉強会はテスト前の一週間から行われた。

場所はあの噂の大豪邸、立花の家だ。

正直俺の家でも良かったが、こいつに奇襲でもかけられたら嫌なので、それだけは避けておくことにした。

そこには、立花の家の中の構造を見ておけば、

今後ここで戦うことがあってもやりやすい状況を作るという配慮があった。

立花の家の敷地内に案内されてまず驚いたのは庭の広さだ。

芝生が敷き詰められていて、ミニサッカーが出来るぐらいのスペースがあった。

「おいおい…こんなに広いのか？」

「そうか？海外ではこれぐらい珍しいものじゃないけどな…」

「今まで誰が使ってたんだ？」

「誰も…五年前に建てられたらしいけど、私の親戚が日本を訪れるためのホテル代わりにしか使われてない」

「贅沢な奴だな…」

「ひがむな、貧乏人」

ばかでかい玄関のドアを開けると、目の前にはでかいシャンデリアとむき出しの上り階段、

訳のわからない彫刻、大理石の床が広がっていた。

「おお…」

人が入っていないとはいえ、手入れはきちんとされていた。ホコリが落ちていないのが良い例だ。

「さあ、早く入れ」

立花は入り口で唾然としている俺を急かせた。

「ああ…」

そして魔の館へと足を踏み入れた。

俺は案内されながら部屋を見て回った。

一階は大広間、ゲストルーム、トイレ、洗面所、風呂場、キッチン、その一つ一つがなかなかの広さだ。

海外の家の造りだけあって、日本の部屋の二倍の広さだ。

そして2階には、立花の部屋と使っていない部屋が三部屋、洗面所とトイレがあった。

すごいな…

感心しながらもしたたかに逃げ場や、戦うのに最適な場所を探した。

大体の家の構造を把握して、立花の部屋へ案内されると、早速勉強を始めることにした。

まずは、立花がどの分野が苦手かを知る必要があった。

簡単な質問をしてその答えを導き出した。

英語、数学は大体できていたが、流石に文化圏の違う分野の日本史、古典、現代国語が苦手ということが判明。

しかし暗記すれば大丈夫な科目だから、俺はどんどん問題を出して、答えを覚える方法を取った。

語学が堪能なだけでもあって、覚えることには問題はなかった。

そうか……こいつは教科書が読めなかったのか。それに時代背景やら、予備知識もない。

だから教える人が必要なんだ。

それを理解しつつ俺は知識をどんどん詰め込んでいった。

毎日二時間程度だが、立花はその一つ一つを確実に吸収していた。

「少し休憩するか…」

「ああ…」

ぶっ続けで二時間はかなりのものだ。

立花は腰を上げると、お茶でもいれてきてやると言って部屋を出た。

その間、俺は部屋を見渡した。

そこは女とは思えないぐらい殺風景な部屋で、ベッドと小さなテーブル、クローゼットだけだった。

引っ越して間もないとはいえ、こんなに物が無いのも珍しい。

しかし気になるのは窓際に置いてある写真立て…伏せておいてあるが、何も無い部屋であれだけ目立つ。

俺はこっそり見てみようかとも思い手を伸ばしたが、寸前で止めた。

すると立花がお茶を持って部屋に入ってきた。

危なかった。

「何してる」

「いや…殺風景な部屋だと思ってな…」

立花はがちゃがちゃとお茶をテーブルの上に置いた。

「緑茶かよ…普通、この家の雰囲気なら紅茶かコーヒーだろ」

「決め付けんな。それに嫌なら飲むな」

俺は毒でも入っているんじゃないかと少し警戒したが、約束もあるから大丈夫だろう。

そう思ってお茶を飲んだ。

「なあ…聞いていいか？」

「あ？」

「護門徒後継者って奴は、お前以外にたくさんいるのか？」

「何だよ急に。それはテスト終わってからの話だろ…」

成功報酬を先に受け取る気か？

まあ、いい…その位は教えてやるよ。

今のところ私とお前を入れて三人つてとこだ」

「あと一人いるってことか…」

「あいつは厄介な奴だ。」

神徒協会の秘蔵っ子とでもいうのか？お前と同様に底が見えなくて不気味だよ」

そんな奴が控えてるのかよ…聞かなきゃ良かった。

「ま、二人とも私がさくつと殺すけどな」

こいつはこいつで危険だ。

「さ…続きを教えろ」

休憩時間も終えて勉強を再開した。

8話

試験は無事に終了した。

俺は一人で屋上に上がり考え事をしていた。

それは当然試験の事ではない。立花から教えてもらったことについてだ。

勉強の合い間に立花は少しずつ俺に話してくれた。門と神徒協会の関係、内部関係についてなど。

その一つ一つが信じられないものだったが、俺はそれを受け止めなければならぬ。

護門徒になるなら知っていて当たり前のことなのだからな。

そこで頭の中を整理しようと思々と考え続けていたのだが、立花から聞いた話をここで分かりやすく説明しておこう。

あの門は元々は存在しないものだったらしい。

今から千年前に世界に同時に七つの門が現れたという話だ。

その存在を知ったのは、神徒協会設立者の三賢人と呼ばれる人物たちだが、どんな人物かは分からない。

しかし設立当初から生きているという話らしいので、化け物だということとは分かる。

その三賢人は拠点を北欧に置き、世界各国の門を調べて開放された時に起こる状況を細かく分析したらしい。

そして開放されないように見張り役として護門徒という門番を作った。

彼らはみんな神徒協会の血を引くものらしく、特異な能力を持っていた。

そして門を不用意に開けようとする輩、向こう側から開いた時の対処をし続けてきた。

だから今から三ヶ月前に織斗の起こした一件は、前例のないぐらいに門が開放したらしいので、一歩間違えれば危なかったのだ。

評議会なるメンバーは全部で八人いるらしいが、彼らもまた謎が多いらしい。

しかし三賢人を影で支える役割として、護門徒の選出、そして彼らが係わる事件の尻拭いを率先して行っている。

だから同じ組織内同士で大量殺人が起きても、何事も無く片付けられるのだ。

信者と呼ばれるものは一般人で、三賢人を神として崇めている。

それはそうだ。千年の時を生きて、人には持ち得ない能力を持っているとしたらそれは神の領域だ。

そこに何の異論もない。

だが、そこで一つの疑問があった。

彼らは何を望んでいるのかということ。

このまま、ただ世界平和だけを望んでいるのだろうか？

そこに何も望まず、一生の目標を見出したというのなら本当の神だろう。

しかし彼らもまた、能力者とはいえ人間ではあるのだ。

千年も生きながらえている奴らがただ黙ってこのまま先を生きるはずがないとも思っていた。

父親はどうしていなくなったんだろう。

きっと神徒協会と何かがあったに違いない。

勝手な思い込みかもしれないが俺なりに見えない組織の分析をしていた。

そして第三の人類というあの尾上みゆ。

門の向こう側から来た存在なら、きっと神徒協会の連中も黙ってはいないだろう。

あの事件の後に冬香は、独断でみゆを逃していた。

織斗の精神的な縛りが消えたなら問題はないと、自らの組織にもその存在を伏せていたらしい。

彼女にはこの世界に来た目的があった。それが何かは分からなかったが、悪意はなかったらしい。

だからそれを果たさせてやろうという冬香なりの配慮がそこにはあった。

ましてや神徒協会に差し出すなど、胸糞が悪くなるとまで豪語していた。

みゆに話を詳しく聞いたら、門の中と外の関係が分かるかもしれないが、

当の本人の居場所が分からなければそれも叶わない。

しかし俺は今あるこの状況を何とかしなくてはならない。

とりあえず護門徒になれば父親のこと耳に入ってくるかもしれないし、

神徒協会に招かれるかもしれないのだから謎も解けるだろう。

だとすれば、立花ともう一人の候補者を最悪殺さなくてはならないのかもな…

屋上から屋内に戻り、階段を下りようとするところにはあいつがいた。

「立花…」

俺の進路を塞ぐかのように下で仁王立ちをして構えていた。

テストも終わって、すぐ様とは気が早い奴だ。

俺はイラつくこともなく、冷静になっていた。

「おい…ここで始めるのか？」

「今の状況なら私の方がちょっと優位かな。お前の足場は悪いからな…」

立花の言つとおり俺は階段の上だ。

しかしそんな状況も打破してこそ俺の能力だ。

「いや…関係ないさ」

「その前に交渉でもしてみようか。お前、私と組まないか？」

いきなり襲いかかると思ったのに意外だ。

「共闘して残りの候補者の奴を倒すということか？」

「いや…それは私の流儀に反する。お前を私の元に置いておきたいんだよ。部下としてな。」

頭が切れるから、いろいろな事に使える…

それに無駄な戦いを避けたいお前ならその方がいいんじゃないか？」

「何だそれ…そんな馬鹿な話があるかよ」

「そうかい…それならいいさ。とりあえず交渉してみただ。やっぱり欲しい物は自分の力で手に入れないとな…」

そこまで話すと目の前から立花の姿は消えた。

またか！

初めて俺とやりあった時に見せたあの能力。しかし俺にはその姿は見えている。

数秒後に現れる立花の場所が。

頭上か！

どうやって移動したのか分からないが、瞬きをすると彼女はそこにいた。

彼女の手にはあの短剣が握られていた。

本気だ。

無防備の状態ならあっさりと殺されるだろうが、俺には未来を見る能力がある。

そう思いながら、攻撃を逃れるように退路に向かって階段から下りようと足を踏み出した瞬間、

足場に違和感があった。

「何だと！」

足元には大量の油がぶちまけてあった。

そのことまで予測できなかった。

俺は踏みとどまることもできず、体勢を大きく崩して仰向けにひっくり返った。

「ぐわ！」

頭こそ打たなかったものの背中を大きく打ちつけた。

その隙に立花は俺に馬乗りになりながら、短剣を構えていた。

「あ……」

気付くのが遅かった。俺はこんな単純な罠に引っかかってしまったのだ。

どんな大層な能力を持っていても、使うのは能力者本人。

色仕掛けだろうが、寝こみだろうがそいつの隙さえ付ければ実力差があっても勝てるのだ。

殺し合いにおいて卑怯なことなど存在しないのだ。

立花は前回の戦いから学んでいた。

俺が相手の動きを読めるということを予測して、もう一步先に策を用意していた。

くそ…これで終わりか？

そんな諦めの気持ちも頭の中にあっただが、立花は短剣を振り下ろすこともせず、そのまま懐にしまった。

「これで、この前の借りは返した」

「どづいつことだ？」

「私のこと殺さなかっただろ？だから、今は殺さない。

しかしこれで貸し借りなしだということをつからせたかったんだよ」

立花はすつくと立ち上がった。

「お前の能力もネタが明かされればそれなりの対処法はできるさ…まあ、私の能力もばれてしまったがな。とりあえず今日はここまでか…」

立花はそれ以上語ることもなく大人しくそこから去った。

俺はただ黙って立花が立ち去るのを見ているしかできなかった。

ははっ…笑ってしまう。

覚悟を決めといていきなりこの様とは。

殺し合いの何たるかを未だに分かっていなかった。

偉そうな講釈を話しても実戦では無意味なのだ。

今一度自分のことを見つめ直して、技に磨きをかけなくては…

ああ、ここから先は本当に長いな。

9話

私は迷っていた。

山の中をもつ、かれこれ三日は歩き続けている。

見渡すな所はどこも同じで、ぐるぐる回っているとしか思えない。

コンパスも地図も用意していない私が悪いのかもしれないが、どうしてこんな所まで来ているんだ？

そんな疑問がまず浮かぶ。

ちくしょう…それというのも、表八鬼が面倒な依頼を受けたからだ。

表、裏八鬼は全部で十五人からなる日本最古の秘密結社だ。

表は、表面上の動乱を未然に防ぎ、裏は毒になりそうな輩をことごとく暗殺していく。

それを平安時代から続けてやっているのだから驚きだ。

年数にして実に千年は経っている。

元々の創始者はたった一人だったらしいが、そこからその子孫が繁栄し、八鬼と言う組織を結成することになる。

つまり、元を正せば、創始者の直系の子孫が我々だということだ。

創始者には不思議な力が宿っていたらしく、その末裔の我々も当然、その遺伝子を引き継いでいるのだ。

しかし長い年数の間に能力の枝分かれはしていた。

私、新城冬香の育った新城家は、空間に関する能力を得意とした。

両親は十歳の頃に亡くなったが、そこから私は新城家の全てを引き継ぐことになった。

しかし私には妹もいた。

本来なら表、裏に血縁を置かなくてはならないしきたりだったが、私はそこを覆すかのように妹の分も引き継いで表、裏の両方に席を置くことにした。

妹はというと、別の家の養女となってどこかで暮らしているはずだ。

最後に会ったのは私が八鬼に入る頃なので、十数年前になってしまっ。

どこで何をしているのか…

あ、そんなことよりも私は迷っている最中だった。

早くしないと爆弾を大量に抱え込んで、大量虐殺を繰り返しているイカレ野郎の餌食になる奴が増える。

まったく…そんなの警察に任せろって。

私だってもう若くないんだよ。

ぶつぶつ文句を垂れていると、急に景色が変わった。

「お…」

ようやく小さな民家の集まりが目の中に飛び込んだ。

はー…良かった。期日ぎりぎりで探すことが出来た。

私はほっとしながら、民家の側まで駆けていった。

しかし民家の付近まで来ると急に足が止まった。

それは周囲の様子がおかしいことに気がついたからだ。

静かすぎる…それに、何だ？この生氣の感じられない雰囲気は…

私はすぐに警戒しながら、周囲の様子を伺った。

民家は全部で十件、住んでいる人間も十数人といった所だ。

ここは、山の中の一角に存在した民家の集合体だが、常にここに人がいるわけではない。

農作業をするための仮の宿舍や、作業場を兼ねている建物が主だった。

だから、どれだけの人間がいるのかは正確にはわからなかったが、人の気配は感じられなかった。

しかし八鬼の情報では、依頼の人物が三日前にここに逃げ込んだという話だが…

私はそつと民家の裏側に回りこんで、近づいたが、変わらずに誰もいない様子だ。

それならば思い切って、一軒一軒確認するしかないか…

そう思って、今度は大胆な行動に出た。次々と家のドアを蹴破っていったのだ。

一件目、二件目と何も見当たらなかった。

しかし三軒目、遂に目的の人物がそこにいた。

いや、いたというよりもあったといった方がいいのだろうか。

ばらばらになってしまった例の人物が、部屋に転がっていた。

「あ…」

遺体は三つに分かれていた。殺されてから分断されたわけではなく、一呼吸で人を三つに切り分けたのだ。

切り口を見れば、その鋭さが見て取れた。

こんなことが出来るのは私にはたった一人しか思い浮かばなかつ

た。

そして私は先を越されたことを理解した。

この殺り方は…

ちっ…あいつ、やっぱり生きていたのか。

どこからこいつの情報を手に入れたのかは知らないが、厄介な奴であることは間違いなかった。

あの織斗ですら彼には勝てなかったのだから…

10話

俺は一人で夜の公園にいた。

バイトの帰りに缶コーヒーを買って、ベンチに座ってくつろいでいた。

肌寒い夜だったので、そんなに長居はしてられない。

しかしこれからのことを考えると、頭が痛くなるのが現実だ。

立花は試験期間終了と同時に襲い掛かってきた。

それを止めるどころか、逆に追い詰められてしまった。

実力差はあったはずなのに、相手にそれを埋められてしまった。

俺にもっと読みきる力があればあんなへまはしないのに…

織斗と戦っていたときはもっと純粹に闘争だけに能力が向いていたのに、あの時は漠然と戦っていた気がした。

何度も思いだされる負けた時の光景。

「ちくしょっ…」

悔しさのあまりに言葉に出てしまった。

ぞっ…

足音が聞こえてきた。底の固いブーツのような音だ。

俺はその音のする方を見た。

暗闇の中に映ったのは、そいつの足だけだった。

誰だ？

そう思うと、そいつは真っ直ぐ俺に近づいてきた。

「あ…」

俺は驚いて固まってしまった。

「久しぶりだな…」

そいつは気さくに声をかけてきたが、以前はそんな人物ではなかった。

それというのも彼女と話したのは過去に一度だけ、しかもこの公園でしかなかった。

そう、初対面は惨劇の場所で会った、あの青い目を持つ第三の人類とまで呼ばれた尾上みゆだった。

あまりに唐突の出会いに俺は頭の中を整理できなかった。

それでもみゆには聞きたいことが山のようにあったので真つ先に浮かんだことを口にした。

「お前：戻ってきたのか？今まで何をしていたんだ？」

みゆは別に出し惜しみするわけでもなく、素直に答えてくれた。

「壊疽者を殺していた：それに武器となる剣も探していた：」

さらっと言つてのけるあの話口調は、初めて公園で話したときと何ら変わりが無い。

「そうか：その：壊疽者つて：あの：お前が俺と最初に会った時に殺した奴だよな。」

人でもないような生物：あれは一体何なんだ？
いい機会だからお前に向こうの世界の話を聞いておきたい…
この世界に大きく係わっている気もするからな」

俺は門の向こう側の世界に興味があつた。

どうして門が生まれたのかも知らないし、この世界に多大な影響を与える理由すらも分からなかつた。

みゆも俺の意見を快く受け入れてくれた。

「ん：そうだな：お前らも十分に巻き込まれている。分かつた。なら、私の世界のことから話そうか…」

「ああ、そうしてもらえると分かりやすい」

「向こう側は、この星によく似ていた。

土の大地に大気、空、海…ただ違う点が、生物というところでも大きく違ったのだ。

私の住む世界には生み出された生物がたくさん存在して、それを作った人間もいた。

しかし彼らは生み出された生物を無作為に生産しすぎて自らの首を絞めたのだ。

本来は完璧な人間を繰り上げるはずが、その工程で欠陥品が出来上がり、膨れ上がった。

それは人とも呼ばれない壊疽した人間として壊疽者と名付けられた。

彼らは脳が無いので見境無しに人を襲った。

それを防ぐために別の世界に彼らを吐き出そうと門の開放が度々行われていたのだ。

あれは、私たちの世界で数十年前に科学者が開発した異界の門らしいが、詳しいことは分からない。

何の目的で作られたのかも…そして完全開放されたことはかつてなかった。

おそらくこの世界の住人の力がそれを阻んだのだろう」

「というと、あの門は向こうの世界の人間が主導権を握っているのだな？

しかも何の目的で作られたことも分からないとは…」

「しかしこの世界からでも、流れ込んだ、壊疽者を生け贄にし、鍵となる金属を使えば開けられることも三ヶ月前に立証された」

「織斗の件か…それで…その…お前は、人間なのか？第三の人類と saying 言っていたが…それは、そのどういう意味だ？」

「さっきの話の流れで分かるかもしれないが、私はその壊疽者の工程を乗り越えた完璧な人間なんだ…」

「つまり、生み出されし人類」

「そういうことだ。」

そして我々は、個別の意思を持つことは禁じられ、与えられた使命にのみ従うように作られた。

肉体も脳も人とはほぼ同じだが、身体能力は特異なものを持っていた。

それは遺伝子操作が原因だとは思うがな…」

「お前…それで何を命じられたんだ？」

「私は壊疽者の排除を命じられていた。」

それ以外の活動制限はなかったが、それを生きがいのようにされてしまったのだ…

だからこの世界に流れ着いてもその要求だけが体を支配していた。だから織斗に操られたとは言え、利害関係が一致している部分もあつたのだ」

「壊疽者を生け贄にして、巨大な魔法陣を作ったことから…確かにそこではお互いの目的が一致するな。」

しかしこの世界に入り込んだ全ての壊疽者を殺さなくてはならないのか？」

「ああ…私には壊疽者を感じる能力が備わっているから、自然と見つけられるのだ。」

しかしこの三ヶ月の間に目的をほとんど果たすことができた…」

「そうか…なら、全ての壊疽者を始末したらどうなる？」

その質問はみゆを大きく悩ませた。

「分からない…でも…その時私は、本当に自由になれるのだと思う…」

「自由…」

この尾上みゆという少女は無機質のような存在に見えた。

しかし目的を果たし、自由になれたらそこから人間になれるのだとも思った。

彼女は何の希望も持たずに、ただ当たり前のように生まれてきたのだ。

何だよそれ…

それって人類なんて言わないだろ。生まれながらに自由もなく、目的のために生きてるなんて…機械と同じだ。

それを第三の人類だなんて、傲慢な考えだ。

しかしこの世界にいれば、みゆも人間と同じ行き方を歩むことができるのかもしれないのだ。

それなら、ここで彼女に自由を与えてあげたい。

11話

「自由になれるといいな……」

「ああ…まだ良く分からないが…今は…それが私の一番の望みかも
しれない」

自分が馬鹿らしくも思えた。

こんなに不自由な奴がいるのに、たかが一回の敗北で悩んでいる
など…

「なあ…お前みたいな奴らが向こうにはたくさんいたのか？」

「向こうの世界は、科学が横暴して取り返しのつかなくなった世界
だった。

青空を見ることのできない黒煙にまみれた灰色の世界。

それは、自分達が出した膿を出すのに新たな科学で解決しようと
すればするほど、

悪循環を繰り返す…そんな中で生まれた私たちは希望でもあった。

しかし成功は十に対して一…つまり、九人の壊疽者が生まれて、

一人の超人類が生まれた」

「それでは…作れば作るほど壊疽者ばかりが増えていく…」

「だから最終目的のためだけに第三の人類を作り上げたらしい…
それが希望の子ども。

ラストチルドレンと呼ばれた私たちで、中でも最も期待された能
力を持ち、唯一の自由を与えられた者が存在したらしい。

それは私と同じ時期に生まれたいが、生まれてすぐに行方知れずになってしまった…」

「希望の子どもね…自分達の都合の良い扱いをしておいてその発言はどうかと思うが…」

そんな環境で、無理に世界を変えようとしたのか…」

「その計画もしばらく経つと打ち切られ、

それからは進化した第二の壊疽者と我々とで近代兵器を用いた戦争が勃発したのだ。

お前もあの門が開ききろうとした時に巨大な腕を見たはずだ」

そうだ、門が開こうとした時に巨大な腕がこの世界に入り込もうとしていた。

しかし未然に防がれたので、腕は引っ込んでしまった。

「あれが進化した壊疽者…体が巨大化したり、脳が無いのに知識を手に入れたり、

個々の能力を手に入れそれぞれ意思を持って一人歩きし始めたのだ…」

今までの膿が臨界点を突破するまでに至ってしまったということだ。

だから、あちら側の世界の崩壊はもう目の前に迫っていた…」

みゆは思い出すように話していた。

「なあ、素朴な疑問だが、昔からそんな世界だった訳ではないんだろ?」

「たぶん…きっと昔はこの世界と同じで、穏やかだったに違いない」
この世界はそんなに穏やかではない気もするが…まあ、みゆの世界に比べたらました。

「なあ、これからどうするんだ？」

「私か？この世界の全ての壊疽者を葬り、それから考えるさ…」

「向こうの世界に帰りたいか？」

その質問にみゆはすぐは答えられなかった。

だから俺はその答えを求めないまま次の質問をした。

「いいさ…答えなくても。それより、今日はどうするんだ？」

「よければ泊めて欲しい…この三日間歩きっぱなしで寝ていない。野宿してもいいのだが、人の目が気になるからな…駄目か？」

「え？あ…その…」

いきなりの先制攻撃にくらくらしてしまった。本当に免疫がないな…俺…

「嫌なら別にいい…近くの大蛇山で寝ることにする」

あっさりと諦めようとするみゆを俺は突き放すことができなかった。

「いや…いいよ。泊まっていけ」

そんな言葉をぼろっと口にしてしまった。

勢いとはいえ、何てことを口にしてしまったんだ…でも…このまま野宿させるのもあんまりだろう。

こんなにいろいろ教えてくれたのに…

「そうか…すまない」

みゆは申し訳なさそうに俺の後をついてきた。

この公園から俺の家までは、ほんの数分で着いてしまう。

俺は自分のアパートにみゆを上げた。

「何か飲むか？」

俺はみゆを居間に座らせると、奥でコーヒーを入れ始めた。

みゆも何でもいいと言ったので、二人分のコーヒーを作ることにした。

小さなテーブルの上に二つのカップを置いた。

みゆはそれを手に取ると、ゆっくりと飲み始めた。

「久しぶりだ…暖かい飲み物は…」

「どこに探しに行つてたんだ？」

「北国の方だ…」

「そこに武器があつたのか？」

「ああ…壊疽者と共にな…草薙の剣も同様だが、あの金属は壊疽者を惹きつける効果があるらしいのだ。

だから私のような壊疽者退治が持たなくてはならないのだ…」

「そういや、あの草薙の剣もあの戦いの後に、神徒協会の連中が持つていつてしまったからな…」

それで、新しい武器は？」

見ればみゆは何も持っていなかった。まさかどこかに隠しているのだろうか？

「ここにある…」

そう言つて懐から古びた鞘に納まつた小刀を出した。

「これは？」

「草薙の剣と同様の金属を用いている小太刀だ…名前を雪姫と言うらしい」

「北国ならではの名前だな…」

「そうだ。これは八甲田の山奥に眠っていた名刀の一つで、草薙の剣の金属を削り取つたものらしい…」

切れ味は、実戦済みだが、最高だな」

一瞬、背中がぞくつとした。

流石みゆ、とでも言うべきか…その小太刀で壞疽者を皆殺しにしたのだろう。

その先を聞かなくても容易に予測がついた。

「わかった…頼むからこの狭い部屋でそれを振り回さないでくれよ」

「なんだ…せつかく切れ味を見せてやろうかと思ったのに…」

「それはいらない！頼むから大人しくしてくれ！」

コーヒーカップをテーブルに置くと、みゆが質問をしてきた。

「海…お前は今は何をしている？」

「今？普通に学校に言ってるけど…」

「そうか…護門徒やらには、まだなっていないのか？」

「その…試験期間みたいなものなんだ。候補者がいて、そいつらの中から選ばれるみたいだ…」

でも…そいつらもかなりの強敵だ。

現に今日も…」

嫌なことを思い出して口に出しそうになったが踏みとどまった。

「ふーん。でも…お前ならなれるさ…今まで見てきた人間の中で、お前が最も優れているからな」

どうしてそう言い切れるのか分からなかった。みゆとは手合わせをしたこともないのに。

しかしお世辞を言うような性格ではなさそうだったので、そのことをありがたく受け止めた。

「明日からはどうする?」

何も言わないで出ていきそうだったので、とりあえずみゆの行動を把握しておきたかった。

「特にない…」

しばらくはこの八坂市に塹でも探して、この世界を堪能してみるのも悪くないかと…」

あの戦闘マシンのような尾上みゆからの言葉とは思えない台詞だったが、

織斗の呪縛から開放されたことを考えれば不思議でもなかった。

普通のそこらにいる女の子なのだ。

だから俺も出来る限り援助をしてあげようと思った。

「そうか…それなら、しばらくはここにいてもいいぞ。いきなり塹を決めるのも難しいだろ?」

「それは…助かる…」

本当に普通の女の子にしか見えない。

照れくさそうに微笑むと、俺から視線を逸らしていた。

「今日はこのくらいにしておいて、明日から街でも案内するよ…」

カップを片付けると、すぐにみゆのための布団を敷いてやった。

流石に距離が近いとまずいので、俺のベッドから大きく離れた。

それでも八畳間では限界がある。離れたといっても数十センチにしか満たない。

まあ、気にしないで寝ておこう。

みゆは全く気にも留めていないようだから。

こうして奇妙な一夜が明けた。

12話

目覚めの悪い朝だった。

みゆが隣で寝ていることが気になり、なかなか寝付けなかった。

俺だってまだ高校生だ。

隣であんな綺麗な女の子に寝ていられれば嫌でも意識はしてしま
う。

当の本人は死んでいるかのように穏やかに眠っていた。

尾上みゆは外見上は普通の人間と変わらない。

きめ細かい白い肌に、青い目、そして黒いロングの髪。

服はどうでも良かったのか、ぼろぼろのジーンズにタンクトップ、
その上に革ジャンを着ていた。

寒くないのか？その疑問だけがそこにあっただ。

いかん、いかん、見とれている場合じゃない。

学校に行かなくては…

こんな状況でも学校に行かなくては、と考えるところ自分の真面
目さが嫌になる。

昨日は昨日で立花に屈辱的な負け方をしたんだ、並みの奴なら登校拒否だ。

でも、俺は逃げない…奴が何度も掛かってくるなら相手してやるさ。

昨日みゆに励まされたことがきっかけとなったのか、心機一転して学校に向かった。

みゆは疲れて寝ていたので、そのまま置いていくことにした。

秋の朝の風は冷たかった。それでも目を覚ますのにはちょうどいい。

歩きながら立花との戦いのことを考えていた。

先読みをするのを逆手に取られたのなら、真っ向からぶつかり合うしかないか…

できるだけ大事に至らないことを考えていたから、昨日は攻撃を避けようとしてあの結果になったんだ。

それなら、全ての攻撃を受け止めればいい。

しかし…俺には武器が無いし、どれもこれもしっくりこないんだよな…

剣を握ろうが、ナイフを握ろうが…扱いに困る。

「おはよー！」

ばん、と背中を大きく叩かれた。

「うわぁ」

不意をつかれたので俺は大声を上げて飛び上がってしまった。

「何よ…そんなに驚かなくても」

朱里が俺の顔を覗き込んだ。

「あのな…お前…誰だって気配消されて後ろから背中叩かれれば驚くだろうが!」

「そういうもの?」

「そういうもの!」

そして二人でそのまま学校を目指して歩くことになった。

「あのさ…立花のことだけど、どうなったの?」

朱里は俺の事を心配していてくれたらしい。

そう言えばテスト期間終了までの間、朱里とは顔を合わせなかったもんな。

「まあ、テストも無事に終わった…」

「それで?」

「いや…その…その後、襲われた」

「え？それって…まさか…海が…立花と…」

顔を赤らめながらどきどきした表情で俺を見ていた。

朱里が勘違いしていることは明白だったので、思い切り訂正した。

「馬鹿！そつちじゃない！候補者争いの方だ！」

「あ…そつちか。あの人…別の意味で危ない人そつちだったから…」

「確かにそうなんだが。実力の方もかなりだ。

俺が見立てたところ、あいつは瞬間移動の能力みたいなものを持っている」

「それって、一瞬で行きたいところまで行けるって能力？」

「範囲はごく僅かに限られると思うが…まあ、そうだな。

俺の目の前で消えたかと思うと背後に回りこまれていたから…あれは高速移動とかそんなものじゃなかった。気配まで消えてた

からな…」

先読みの能力を持ってしても、いきなりそこに現れるとしか見えなかった。

それはつまり、移動しているのではなく空間を渡り歩いている証拠だ。

「それで…勝機はあるの？」

「それを悩んでいたんだよ…実際、あいつは殺す気満々だから…」

相手を殺さずに勝つなど所詮は理想なのだろうか…俺は今、その狭間で悩んでいた。

「でも、やるしかないさ」

そう自分に言い聞かせてみた。

「そっか。でもね、海は…海らしくが一番だよ。

どんな結果になっても私はあなたのことは見捨てたりしないからね」

「はいはい…心強い言葉だ…」

「全然、感情がこもってない！」

朱里は頬を膨らませていたが、俺はありがたく思っていた。

こいつは昔からそういう奴だもんな。

13話

一日は何事も無く終わった。

昨日の今日で、立花もまた襲い掛かってくることはなかった。

それはそれで助かる…俺はバイト先に急いで歩いた。

今日は夕方からのバイトが入っていたのだ。

道路工事の続きだが、重労働には変わりない。

人手も不足しているから、早く行かないとみんなが困る。

学校から直接向かっていたので、制服のままだったがそんなことは気にしなかった。

走ること十分、目的の工事現場に到着した。

すると、作業はもう始まっていた。

アスファルトを剥いで、運ぶ、単純作業だが力はかなりいる。

「そっちに穴開ける！」

「こっちにもダンプ回しておけ！」

現場には男達の声が行ったりきたりを繰り返していた。

この声を聞いていると、バイトに来たという感じがする。

「みゆちゃん！そっちに運んで！」

「ええ…」

え？今聞きなれない言葉が聞こえてこなかったか？

「次は、そっちにお願い」

「いやーいい動きするね。みゆちゃん」

おいおい…

何か変じゃないか？

何故ここにいるはずの無い人間の姿がある。

「今度俺とデートしてよ…」

□説く純の姿が…

「おい！」

見かねて叫んでしまった。

全員の動きが一瞬止まり、俺の方を見た。

「あ…海だ…」

「遅いぞ、馬鹿！」

定時に来ているはずなのに何故か非難された。

「どづいづことですか？」

俺は制服のまま現場の中へずかずかと入っていった。

「何が？」

純はすつとつぼけた顔をしていた。

「あいつですよ！何であいつがここにいるんですか？」

みゆを指差して説明を求めた。

「あ…彼女？今日の昼に海の家に行ったらさ、いたから連れてきちゃった…てへっ」

「てへっ、じゃないでしょ！お前も何で勝手に出歩いているんだよ」

「だって…何もすること無かったから。」

それに海がここで働いてるって聞いたから…手伝おうかと」

「手伝う？」

「黙ってあなたの世話になるのも悪いし、体を動かすことは悪くない…」

「あのな…そう言う問題じゃないだろ。」

こんなところに女の子がいるのもおかしいし、役になんか立たないだろ。ねえ、重さん……」

「いや…別に構わんよ」

重さんに助けをもらうことにしたが、裏切られた。

「それにな、あの子すごいぞ。

お前と比べ者にならないぐらい働uksi、大人三人分くらいの馬力がある……」

見ればそこには俺にも運ぶのがやっと思える剥がされたアスファルトの山があった。

第三の人類は伊達ではない。

いやいやそんなことではない。

「いいから、お前は帰ってるよ。俺の仕事なくなるだろうが……」

場の空気にも普通に溶け込んでしまっているみゆが恐ろしい。

いや…適応能力が備わってきているのだろうか？

「そうか…お前がそう言うなら、帰るが。帰ったら何をすればいい？」

「何もなくていい。黙って待ってる。飯も買って帰るから……」

「分かった…なら、後でな」

みゆはあっさりと俺の言うことを聞いてくれた。

しかしそれを残念がる大川土木の作業員達。

「残念ですね…」

「なかなかの働きっぷりだな。今度飯をおごってやる」

そしてなかなか食い下がらない純。

「えー。もう帰っちゃうのみゆちゃん…」

もっと俺のかっこいい働く姿を見てよーそして惚れて。惚れてよ

「」

純が訳の分からないことを話していた。

「止めてください。変な勧誘は…あいつは普通じゃないんですから。ほらっ、そんなことより仕事の続きしましょうっ！」

俺は、はぐらかすように現場に湯を入れた。

そしてみゆの立ち去る姿も目で追わず、そのまま作業に没頭した。

14話

帰り道、買い物をして一人で歩いていた。

バイトはいつもよりも一時間も早く終わった。

それというのも、みゆが三倍の働きを見せてくれたからだ。

お陰で俺はみゆのことをしつこく聞かれた。

特に純の食いつき方は異常だった。

俺は適当に聞き流してあしらったが、明日からまた同じことを聞かれるのだろう…

面倒だ…

しかしバイトが早く終わったのは、みゆのお陰でもある。

それなら、今日は美味しいものでも食べさせてあげよう。

そう思って俺はいつもよりも高い肉を買ってきた。

それに野菜ときのご類…今日はすき焼きでもやろう。

いつもよりも豪華な夕食にテンションも上がりつつ、軽快にかんかんとアパートの階段を上っていった。

自分の部屋の前まで来ると、中から話し声が聞こえた。

誰だ？

俺はドアをそーっと開けてみた。

するとそこには二人分の女物の靴があった。

なるほど…すぐに状況も分かり、俺は中にずかずかと入っていった。

「朱里か…」

居間に行くところには朱里とみゆの姿があった。

「おう！バイトご苦労さん！」

偉そうだな…こいつ…

「何でここにいるんだよ。しかもみゆと一緒に…」

「それはこっちの台詞だよ。何で、この子がここにいることを隠していたの？」

「う…」

まずい…それもそうだ。俺は朱里に話していなかった。言い訳の一つも浮かばなかった。

「いや…あの…」

どう説明していいのか分からない俺をよそに朱里はあまり気にしていなかった。

「全部聞いたよ。みゆから…」

ああ、そうですね…

「しかし…お前らよく大人しく話せるな。仮にも殺しあつた仲だろ？」

「そんなの織斗に操られていたから仕方ないじゃない。

それにこいつ話していると、悪い奴じゃないみたいだし…」

「みゆ、お前も平気なのか？」

「ああ…私は別に怨みや憎しみで戦っていた訳ではないし、寧ろ朱里には済まないことをしたと思っている。

だから謝りたかった」

見た目と違って本当に律儀な奴だ。

朱里同様にな…

「それで、朱里は聞いたのか？みゆの世界のことを…」

「ええ…信じられない話だけでもね。私たちの世界とみゆの世界

…何か接点があるんでしょうね」

「ああ…それは俺も感じてる。

だから全ての謎の鍵は神徒協会が握っているんだ。

親父の事を知るためにも俺は護門徒にならなくてはならない……」

「そっか……でも、その前に……」

朱里は俺の持っている袋を目にした。

「はいはい……みんなでご飯食べるか？」

「そこなくなかつちゃ」

そしてみんなですき焼きを始めることにした。

久しぶりに大勢で食べる食事だ。

「おい……肉焼きすぎだろ！」

「馬鹿ねー肉はこのぐらいがおいしいのよー！」

「私……肉って食べたことない」

「嘘……」

「みゆ……今まで何を食べてたの？」

「野草とか……そこら辺の魚とか……」

「なら、食べてみる！」

俺は百グラム五百円もする肉を器によそってやった。

みゆはゆっくりとそれを口にした。

「お…おいしいー!」

みゆは目をきらきらとさせて喜んでいた。

「こんな…おいしいものがあつたなんて…」

みゆは、自分で鍋にある肉を器にどんどんよそった。

そして食べる食べる…二百グラムあつた肉は一瞬でなくなった。

「おい…」

鍋の中には野菜と豆腐だけが残った。

「あ…」

みゆは我に返った。そして鍋を見るなり恥かしくなったのか縮こまった。

「はははは…」

俺と朱里は思わず笑ってしまった。

まさか、みゆがこんなことを気にするとは思わなかったからだ。

それに、食べ物にここまで夢中になっている姿も滑稽だった。

見た目とのギャップを感じた俺たちは、あまりにもおかしかった。

しかしみゆは面白くなかった。

「何が、おかしい…」

「いや…お前の意外な一面が見れたからな」

「ふふ…本当…」

「うるさい!」

騒がしくも楽しい夕食がそのまま続くこととなった。

こんな夕食は何年振りだろうか…

騒がしくて、それが嫌でもない。まるで家族のように…

俺はしばらく見せなかつた笑顔を見せて、二人と話をした。

朱里もみゆもどこか気持ちが緩んでいたのか、しばらくこの時間を心から楽しんでいた。

「それじゃあ…」

そして食事が済むと朱里は家に帰った。

残ったのは俺とみゆだけ。

適当に後片付けを済ませると、時刻は十一時を回ろうとしていた。

今夜は月明かりが眩しく、電気を消していても明るかった。

さて…

俺は無言のままベッドに入った。

みゆも同様に背中を向けたまま布団に入っていた。

すぐには寝付けない。昨日同様に浅い眠りが続くのだろう。

そう思っていると、

「海…」

みゆの方から声が聞こえてきた。

「何だ？」

「昨日、あなたが聞いたことだけど…」

「俺が聞いたこと？」

「向こうの世界に帰りたくないのかって質問だ…正直な気持ち、悩んでいた。」

私が帰ったらあの世界は救えるのだろうか。

それともこのまま続けた方がいいのかと…

でも、できることなら…私は…」

苦しそうに吐き出そうとしていた言葉を俺は寸でのところまで止めた。

「今、結論を出さなくてもいいんじゃないか？人の想いは時間と共に変わる。」

お前がはっきりと決めたら、その意思に従えばいいさ」

「そ…そうか？」

「ああ…」

みゆは少し寂しそうに、それ以上何も言わなかった。

本当は話したかったのだろうか…

俺にはみゆの気持ちがいまいち分からなかった。しかし俺はそう思ったのだ。

人の気持ちは、想いは…時として変わってしまう。迷いを抱いているなら尚更だ。

「おやすみ…」

そのまま二人は寝てしまった。

15話

みゆと出会ってから三日目の朝を迎えた。

たった三日とはいえ、この環境に慣れてしまったのだろうか。

みゆがそこにいる存在が当たり前のようになってきた。

遮光カーテンをさっと開けると、よく晴れた天気で眩しいほどの朝の光が部屋の中に入り込んだ。

今日は休みだった。

何もしないでごろごろしていてもいいが、それではつまらない。

せつかくみゆがいるんだ。彼女を誘ってどこかにも行こうか…
そうも考えた。

「なあ…今日はどうする？俺も休みだから、街でも案内するか？」

起きてから一人で身支度を整えていると、みゆは眠たそうに目を擦っていた。

「ん…」

低血圧なのか、みゆは寝起きがあまり良くなかった。

昨日も聞けば昼まで寝ていたそうだ。

夜に活動することが多かったからそのサイクルに体が慣れてしまっただろう。

「眠ければ、俺一人で出掛けるけど…」

無理強いはできないと、妥協もしてみた。

すると、みゆはいきなり飛び起きた。

「いや…私も行く…どこかに連れてってくれ」

「おいおい…いきなり飛び起きて大丈夫なのか？」

「あ…」

そう言った瞬間、立ちくらみがしたのか、みゆはふらっと体を大きく倒した。

「おい！危ない！」

手を出して体を支えた。

しかし片手でみゆの体は支えることが出来ずにそのまま二人で布団の中に倒れた。

「うわー！」

どすんという音と共に俺はみゆに乗りかかる形となって倒れた。

二人の体は密着していた。

どくん...どくん...どくん...

「っ...」

俺とみゆの顔はほんの数センチまでに近づいていた。

ほんの少し動けば唇が触れてしまいそうだ。

みゆは俺の事を瞬きすることも無くじっと見ていた。そして抵抗することもしなかった。

俺はその間を嫌うかのように慌てて立ち上がった。

「い...いやー...お前、朝弱いのか？ふらふらすんなよ」

照れくさそうに、いや、誤魔化すように俺はみゆと目を合わせないで話した。

「行くなら、顔でも洗ってこいよ。朝飯の準備はしておくから...」

そしてそのまま台所へ急いだ。

みゆはその場でしばらく呆けていた。

俺はというと、未だに鳴り止まない胸の鼓動を必死に抑えようとしながら、昨夜の残りの野菜を切っていた。

コンコン…

ドアをノックする音が聞こえた。

誰だ？こんな朝から…

俺は落ち着かない気持ちのままドアを開けるとそこには朱里がいた。

「やつほー…今日休みでしょ。気晴らしに三人でどこかに出掛けない？」

その誘いを断る理由もなかったので、とりあえず俺はみゆにも確認をした。

「おい！朱里も一緒に出掛けたいっていつてるから一緒に行こう」

するとみゆは一瞬曇った表情を見せた。

「あ…ああ…」

その表情の意味は分からなかったが、俺は朱里を家に上げて準備が出来るまで待たせることにした。

「なあ、どこに行く？」

歯を磨きながら朱里に聞いてみた。

「買い物は？みゆの服がぼろぼろじゃない。

だから私が選んであげようと思っっているんだけど、どうかな？」

良い考えだ。俺もぼろぼろの服を着ているみゆに何か買ってやりたいと思っていた。

「いいんじゃないか：なら、郊外のショッピングモールに行こうか：：電車で二駅だったよな」

「うん。私も買いたいものがあるからさ」
そこで行き先は決まった。

俺たちはみゆを連れて、郊外に新しくできた巨大ショッピングモールへと向かうことにした。

そこはまるで野球場のような大きなドームで覆われていた。

その中には小さなパリの街中のようなモダンな風景が広がっていた。

日本ではないような作りで、レンガの床、ランプの外灯、シックな作りのベンチ。

そして店の全てが木を全面に出した作りで暖かい感じがした。

日本人は本当に外国の真似が上手い。

外国に行かなくても外国気分が味わえるなんてな：

感心しながら、俺たちは人ごみの中をうろろろしていた。

どこを目指しているのか分からず、ただ店の様子を見ながら歩い

ていた。

そしてこの建物全体の構造を把握してから、朱里はみゆを連れて、一つの店の中に入っていった。

俺はその店の看板を見た。

そこには『ドール』と書かれていて、いかにも洋服専門の店だった。

朱里は俺に向かってちょっと待っていてと話した。

俺はそのまま店の前のベンチに腰掛けていた。何か変な気分だ。

女の子二人と買い物に出掛けることもそうだし、朱里とみゆが仲が良くなっていくというのも…

変な気持ちを抱きながら俺はただ黙ってそこに座っていた。

そして二十分くらいすると、朱里たちが店の外に出てきた。

そしてみゆの姿を見た瞬間に固まった。

「え…」

白いスカートをはいて、上もそれに合わせたようなかわいらしいフリルのついた洋服を着ていた。

今までの男気あふれるような服装はどこへ行ったのやら女性の服を完璧に着こなしていたのだ。

そこには以前のようなみゆの姿はなかった。

どこにでもいるような普通の女の子だ。

「海…海…」

朱里はぼーっとしている俺に向かって何度も声をかけてきた。

「あ…ああ…」

「驚いたでしょ、まさかここまで変身するなんてね…」

「これ…スースーするな…」

みゆはスカートをはいたことがないので、違和感を感じていた。

そして俺の方を見ると、

「どうだ…似合うか？」

感想を求めてきた。

おいおい…何て言えばいいんだよ。

焦りながらも言葉を搜し、素直に見たままのことを口にした。

「その…似合っている」

すると、みゆは何故か恥ずかしそうに俺から視線を外した。

おい！変なこと言ったか？俺：

「さあ、後はみゆに似合うアクセサリーも探そう！」

「思い切りお前の趣味に走ってないか？」

「いいじゃん。可愛い子を可愛くしてあげるのは女の性というものよ…」

「着せ替え人形じゃあるまいし…」

「男のあんたには分からないのよ」

そうやって揉めていると、前から見覚えのある奴が歩いてきた。

16話

あれは…まさか…

「げ！立花！」

朱里は嫌悪感を丸出しにして、叫んだ。

「あ！」

立花もこちらに気付いて近寄ってきた。

近寄ってくるな、この殺し屋め。

「お前ら何してんだ？」

相変わらずの男口調で偉そうに質問してきた。

「見れば分かるだろ。買い物だよ…」

「ふーん…」

じろじろと俺たちのことを眺めると、みゆに目をつけた。

「その子…見かけない子だな」

目ざとい奴だ。早速睡でもつける気か？

「ああ…俺の知人の女の子だ」

「海の彼女じゃないの？」

「違うわよー！」

何故か朱里が大声でそれを否定した。

「あのさ…立ち話もなんだから、あっちでお茶でもしないか？私が奢ってやる」

「おい、何でお前とお茶しなくちゃならないんだよ」

「まだ、テスト勉強を覚えてもらった報酬を全てあげてないだろ？それにお前ら貧乏だから奢ってやるって言うてんだ」

「喧嘩売ってんのか？それに、お前には情報をもたらしただろうが…」

「まだあげていないものがある」

それは何だ？俺には全く検討もつかなかった。

すると立花は俺にぐいっと近づいてきた。

まさか、不意について先制攻撃を仕掛ける気か？

そう思い、身構えようとしたが立花の伸びた手の方が速かった。

するりと俺の首筋に手を絡めると、甘い声をかけた。

「私の、か・ら・だ・」

その場の空気は一変して気まずいものになった。

朱里は絶叫し、みゆは何を言っているのか理解できず、ただぼつとしていた。

「ええ！」

「おおおおおおお…おい！そんな話して無いだろ！」

慌ててくつつく立花を引き剥がす俺は、情けない姿そのものだ。

そんな俺を見て立花はくすくす笑って喜んでいた。

「冗談だ…それとも欲しかったのか、私のことが…くくく…それはそれでいいがな…」

「それだけは、駄目！」

朱里が真っ向から否定した。

「本当の話はお前の父親についてだが？」

「どうだ、聞く気があるならそのカフェまで付き合いえ。」

別に嫌ならいいがな」

「そういうことなら早く言えよ。それなら付き合い合っ…あ、別にお前は来なくてもいいぞ。」

「適当にそこらをつろついでいてくれ…」

二人を巻き込むわけにもいかないの、そう答えたが、二人は素

直に従わなかった。

「私も行く…海のお父さんの話なら、私も無関係じゃないでしょ。それに…こいつはどこか危険…」

「なら、私も…何か…お前に腹が立つ」

みゆは意味不明なことを口にしていたが、それならそれで仕方ないと思い、二人も同席させた。

オープンテラスのカフェには四人の男女が一つの席に座っていた。

客は数人しかいなかったが、席が密集していなかったので他の客が気にならなかった。

テーブルの上にはホットコーヒーの注がれたカップが四つあった。

「なら、話そうか…」

「ああ、手短かに頼む…お前とはあまり同じ空気を吸っていたくないからな」

「随分な言葉だな…まあ、いいさ。

その前にお前の父親のこと事前に詳しく調べておいた。そこから話すか？」

「そうだな…」

「なら…んつと、月夜灯、四十歳。」

護門徒には歴史上最年少の十八歳でなった人物で能力者ではない全く普通の人間だ」

「普通？海とかみたいの特異な能力は持っていないの？」

「そうらしい。書類だけを見たら、彼の血縁にはそういった者は存在しなかった。」

しかし彼は護門徒になれる素質を持っていたのだ。

それが何かは分からないがな…

事実、護門徒候補者争いの時に能力者五人を圧倒的な力で惨殺してその地位を得ていた」

「惨殺？」

「どつやったのかは知らないが、相手をばらばらにしたらしい…」

嘘だろ…

あんなにやさしかった父親が、そんな残虐なことをやってのけたのか？

俺はショックを隠しきれなかった。

「他にも護門徒の職務以外の依頼も引き受け、悪人の抹殺をしていたらしい…

正義の味方気取りかどうか知らないがな」

「それは、裏八鬼の仕事じゃないの？」

「まあ、そうだな…だからこそ、仕事を横取りされた形の裏八鬼にはよく思われなかったらしい。」

何人が彼とやりあったらしいが、惨敗だったらしいぞ…」

「あの裏八鬼のメンバーでも勝てないって…なら、八鬼最高の実力者、新城冬香でも無理なの？」

その名前が出た瞬間、立花が表情を曇らせ言葉を詰まらせた。

「ん…さあな。それは分からない。」

しかしお前の親父はそれだけ優秀だということだ。

今まで殺し合いにおいて、負けたことはないのだからな…

その血を引いているお前にはさぞかし優れた力が秘めているんだろ…うな」

「しかし…能力を持たない系譜の中で生まれた海だけが、どうして特異な能力を持っているの？」

「能力は時として、遺伝子を遙かに飛び超えるのだ…突発的なものでもある。」

だから、突然変異であつてもおかしくはない」

「それで…どうして親父はいなくなった」

「それは分からない。記録によれば突如姿をくらましたとしか残されていない。」

それが三年前だな…そしてつい最近だが、生きていることが報告された」

「本当か！」

「ああ…最近この国で起きている連続爆破事件。

それがきっかけだ…ことを起こした犯人は、十八歳の未成年の男性。

国のあり方について不満を抱き爆破予告をする。

そして必ず事を実行したそうだ。被害者は全部で三十人を越えた。

無差別テロのような犯行を事前に二件繰り返し、最終的には政治家の家全てに爆弾を送りつけるとまで宣言した。

しかしその前に警察は人物の特定にまでこぎつけた。

後は逃げ回っている居場所を探すだけだが、彼は大量の爆弾を隠し持っていたので用意に近づけないという現状だった。

そこで政府が依頼したのが裏八鬼…隠密行動で犯人を葬ってくれという内容だったが…

どうも先を越されたらしい」

「親父にか？」

「ああ…彼は彼で独自のルートを持っていてその事件の情報を手に入れていたらしい。

そこで先回りをして犯人を殺したそうだ。

以前にも似たような行動をしていたこともあり、そこで神徒協会のメンバーに感づかれた…」

「ということとは…日本にいるんだな」

「報告をもらったのが数日前だから、その可能性が高い…」

「どうして、そんなことを…」

「さあな、神徒協会のメンバーも彼の行動を把握できずに困り果てている始末だ…」

それに、組織を脅かす存在として警戒もしているらしい」

現実離れしている…

それに親父は何をしようとしているんだ…

「つとまあ、ここまでが私が仕入れた情報だが、その見たことのない女は、誰だ？」

みゆのことをじろじろと見回し指差した。

「お前…敵か？」

みゆは既に臨戦態勢に入っていたのか、警戒心を緩めることはなかった。

そして会話もないまま睨み続け、立花がふっと視線を逸らした瞬間、みゆは動いていた。

懐から例の小刀を抜き出すと同時に立花の首筋に向かってその刃先を突きたてようとした。

だが…

そこには立花の姿はなかった。

「う…」

みゆの背後に回りこんで薄ら笑いを浮かべていた。

「いいねえ…お前も…」

みゆはそのまま動かなかった。いや、動けなかったのだろう。

「噂には聞いていたが、あの織斗が飼いならしていたという、向こうの世界から来た異界の者か？」

誰もそうだとは言わなかったが、立花は察していた。

「海…せっかくの楽しい時間もここまでのようだな。」

しかしこれからこんなに可愛い子とお前が私の手に入ると思うと楽しみも倍増だな…」

こいつはそつちのことばかりか…

「気持ちの悪いことを言うな。さっさと行けよ、ここの会計済ませてな」

「何だよ。お前…急に私に対する態度が変わったよな…」

立花は伝票の書かれた紙を持つと、そのまま奥へと消えていった。

「大丈夫か？みゆ…」

俺はみゆの心配をしたが、みゆは気にするなと軽く答えた。

17話

季節は冬に程近い。

しかしこの地域の寒さは草木が眠っているかのように穏やかだった。

雪が降るのにはまだ早い季節ではあったが、

この山奥にはきらきらと光る結晶を持った雪がひらひらと舞っていた。

北欧の山奥に存在する古い城には長い歴史が刻まれていた。

それはいつ建てられたのか誰も知らない。

そしてここにたどり着ける者もいない。

誰にも犯すことの出来ない聖域がまさにそこだった。

そんな神秘的であり、呪術的な城の中には三人の男がいた。

中世の装飾品に囲まれた王広間に向かい合うように座り、紅茶をすすりながら話をしていた。

「さて…計画の進捗具合はどうなっているかな？」

三人の年は同じぐらいだった。特に上下関係は存在せず、三人とも同じ立場だった。

「問題はない。七つの門も安定しているし三ヶ月前のような馬鹿な輩もいないようだ」

「日本にある門の件だな…」

しかしあれは危うかった…八鬼の存在があそこまで驚異的なものになるとは思わなかったな。

未だに向こうは我々に敵対心を抱いているようだが…」

「まあ、元を正せば我々が原因だが、それもいたし方あるまい。世界に散らばる我々の遺伝子は人に進化を与えてしまった」

「起きたことを悔いていても先には進めない。

それよりも我々には成すべきことがある。

目的のためにこんなにも長い時間を待ったのだ。失敗は許されないぞ？」

「ああ…全ての調査は済んでいる…残るは日本の護門徒を決めるだけだ」

情報公開を三人で行い、自らの計画の成功を再確認していた。

しかしその中の一人が険しい表情で話した。

「しかし気がかりなこともある…月夜灯だ」

その名前を聞いた瞬間に残りの二人も持っていたカップを置いた。

「あいつか…唯一の不穏分子だな」

「三年前に姿を消して以来、その消息はつかめなかった。

手がかりの息子は何も知らないようだし、護門徒候補者に選んではあるが、そんなの名目だけだ…

灯ともども葬ってくれる。それで、今あいつは生きているのか？」

「ああ…最近受けた報告では、日本にいる可能性が高い。

元々正義感の強い奴だからな、誰かの手助けでもしているんだろ

う」

「最強の暗殺者と呼ばれたあいつがか？」

「育て方を間違えたのかもな…所詮はただの人間だ。

我々とは違う…イレギュラーも存在する」

「だが、障害は早めに処理するのに限る。だから…」

「柊か？」

「そうだな…彼を護門徒候補者として日本に送り込む手はずは整えている。

彼が不穏分子を抹殺してくれるさ…」

「うん。八鬼と月夜親子…こいつらは早めに処理した方がいいな…」

三人は安心したかのように話をまとめると、そのまま茶会を楽しんだ。

立花と出会って一ヶ月が経とうとした。

もう景色も冬に変わろうとしてきた。

吹き込む風は肌を突き刺すように痛くなっていた。

立花の襲撃は未だに本格的なものではなかったが、いずれはやりあう存在だ。

警戒するのにこしたことはなかったので、俺は常に警戒を緩めなかった。

しかしその行為自体が疲れる。

今までの俺の生活を考えれば、こんな殺し屋みたいな生活を送ったこともないので当然である。

しかし避けられない道というのはあるわけで、そんな運命に背くことのできない事態は不測に起こるものなのだ。

いつものように帰り道を一人で歩いていると、後をつけられていた。

相手も分かりやすく俺に向かって殺気を放っていた。ここまで露骨だと分かりやすい。

俺もそれを察して、自ら戦いやすい場所を選ぶことにした。

そうでもしなければ、罪の無い人たちを巻き添えにしてしまう可能性大だ。

身近な場所ですういった場所を探すと…
そうだ、この先に建設中に頓挫してしまたビルがあることを思い出した。

なら、そこで決着をつけるか。

俺も自らの気持ちを奮い立たせ、この先のことを想定しながら目的地まで歩いた。

そして建設中のビルの敷地内に無断で入ると、誰もいないことを確認して立ち止まった。

「なあ、もういいだろ？やるならここで決着をつけよう」

俺は殺気を放っている主に分かりやすく声をかけてみた。

すると物陰からそいつは姿を現した。

全く…手間を掛けさせる。さっさと出て来いってんだ…立花の奴め…

そう思いながら現れた人物を見て驚いた。

「な…誰だ…お前！」

そこにいたのは、立花ではなかった。

全く違う人物で、見たこともない男がいた。

背丈は俺とあまり変わらず、痩せ型で少年のような顔立ちだった。

眼鏡を掛けていてこちらをにこにここと笑いながら見ていた。

「アレ…何だ。僕に気付いていると思ったけど…その様子だと違うんだね」

そいつは立花とは違う雰囲気を出していた。

しかも相当やばい…

「君の能力は報告済みだよ。未来が見えるんだってね…」

それは凄いのよ。でもさ…自らに逃げ道のない未来が見えたらどうするの?。」

「どつという意味だ?。」

「さあ…それは今後のお楽しみっていうことで…」

「それよりもお前は何者だ?俺の事を知っているようだが…」

「ああ…ごめん、ごめん。まだ自己紹介もしていなかったね。」

これは大変失礼を…

僕は、柊リオ。ヒイラギでもリオでもどつちでも構わない…年は十七歳…なのかな?まあ、そんなところだよ。

日本には今回が初めてなんだけど、ここは思ったよりも暖かい所なんだね」

こいつ…外人なのか?しかし柊という苗字があるなら日本人の可能性だってある。

「お前…まさか…神徒協会の秘蔵っこという奴か?。」

以前に立花から話は聞いていたので、思い当たる人物といえはそれしかなかった。

すると、リオはあっさりと答えた。

「そうだよ。お堅い三人からここの制圧を命じられた、神徒協会直属の希望の子どもだよ」

「希望の子ども?。」

どこかで聞いた言葉だ。

「ま…僕以上の人間はこの世界に存在しないと思うけど…どうする？
それでもやりあってみる？護門徒の後継者争いを賭けて」

こいつの自信がどこから出てくるかは分からなかった。しかしそれが嘘ではないのも分かる。

神徒協会の名を口に出し、自らを最強と名乗ること自体が怪しすぎる。

俺は迂闊に手が出せなかった。

相手には俺の能力が丸分かりだ。その状態で一線交えることになればこちらの分が悪い。

「やっぱり怖い？僕のこと…うん、それが素直な反応だよ」

「どつという意味だ？」

「それは…話しても分からないよ。だから、僕と殺しあえば分かるわ…」

嫌なことを平気で口にする。

俺はそんな素振りを違和感なくこなしてしまうこの男に不気味さを感じるだけだった。

どつする…ここでやりあうのか、それとも逃げるのか…俺は迷っ

ていた。

殺し合いにおいて迷いは禁物だ。

俺のそんな様子を見計らったかのように、リオは動いていた。

「ばいばい…」

そんな言葉を口にしたかと思うと、俺の脳裏には未来が見えていた。

それは四方八方から襲い掛かる刃のような衝撃波の嵐だ。

これでは逃げ道が無い…

そうか、そういうことか…

いくら未来が見えたとしても逃げ道を完全に塞ぐ攻撃を仕掛ければそんなものは何の役にも立たない。

コンマ数秒後に自らの体をばらばらにするだろう衝撃に俺は体が反応しなかった。

だが、飛び込んできた人物によって唯一の退路が作り出された。

振るった剣の衝撃で、取り囲む衝撃波の一部に穴を開けた。

今しかない！

俺はそのまま前に向かって走り出し、無傷のままリオの攻撃範囲から抜け出すことができた。

そして俺のさっきまでいた場所には、轟音と共に破壊音が響き渡っていた。

判断が遅かったら俺の体は確実に細切れになっていた。

「大丈夫？海…」

リオの攻撃を未然に防いだ張本人が俺の事を心配そうに見ていた。

また、助けられた。

「ああ…しかし何でここに俺がいるって分かったんだ？朱里…」

朱里は右手にいつもの剣を手にして、笑っていた。

「さあね。あんたのことは昔から分かるからさ…」

こいつには敵わないいな。俺も自然と笑みがこぼれた。

「あれ？君は…守護人じゃないのかい？」

リオは朱里を見てすぐに気がついた。そして腑に落ちない顔をして話した。

「あれれ？それって違反行為じゃないかなー」

だってさ、君は護門徒を守る立場なんだよ。

それなのにまだ、護門徒ではない彼を守るのはどうかと思っけど…」

「う…」

正論だった。俺を守るといふ行為は、守護人の任務を逸脱した行動だ。

だから俺は何も言うことができなかった。

しかし朱里は違った。自らの行為に恥じた様子も無く堂々と答えた。

「さあ…私は護門徒がこの人しかいないと思っっているから。それ以外の人の守護人になる気はないわ」

「へえ…それって神徒協会の戒律に反するよ。それも覚悟の上のことかい？」

「ええ…構わないわ。私が協力したとしても海が護門徒になれば結果は同じことですよ」

その目に迷いはなかった。

「ははっ…面白い子だな」

リオは朱里のことが気に入ったようだった。

俺にすぐに追撃をすることもせず、そのまま無防備に立っていた。

「ま…今日のところは挨拶程度でいいか。

海…君は確実に殺すからそのつもりでいてくれよ。

それは君の運命であり定められたことなんだ。僕を怨まないでく

れ…」

「ちっ…」

「それと、朱里…僕が正式に護門徒になったら是非、僕の守護人になつてもらいたい」

リオは嫌味でもなく、素直な気持ちを朱里に話した。

こいつはどこまで余裕を持っているのだろうか。

強者たる者の振る舞いを恥ずかしげも無くやってのける彼はある意味凄い存在だと思った。

リオはそのまま俺たちの前から消えた。

「次から次と…化け物ばかりだな」

俺は護門徒後継者争いが、予想以上に難題だということを教えられた。

このままでは、絶対にあいつらには勝てないかもしれない…

そんなことすら思ったが、それ以上考えるのは止めた。

朱里は俺を家まで送ってくれた。

家にはいつものようにみゆが待っていた。

「どうした…その格好？」

みゆは俺の服が土埃で汚れているを見て、そう言った。

「みゆ…後は、お願いね」

朱里はそのまま俺を置いてばいばいと帰ってしまった。

そのまま部屋の中に入ると、早速先ほどの出来事をみゆに話した。

「そんなに強い奴がいたのか？」

「ああ…武器らしいものは持っていなかったのに、体をばらばらにしそうなくらいの鋭い攻撃をされた。あのまま何も出来なかつたら確実に死んでいたな。それにあいつ…人間なのか？どうも…人のよくな気がしない。失礼かもしれないが、お前のような感じだ」

「え？」

「無機質…そう表現した方がいいのか。」

そんな感じだよ…でも、お前とは、その…全く同じって訳でなく、性格とかは違うわけで」

俺はみゆのことを悪く言ってしまったことを気にして言い直そうとした。

しかし、みゆは全く気にしていなかった。

「お前がそう感じたなら、その可能性は高い。ありがとうな…私の事を気にしてくれて」

その言葉はどこか俺を救ってくれた。

「興味はある…そいつと一線交えることがあるのなら、私も参加したい」

そんな、野球に飛び入り参加みたいな感覚で話されても…

「お前と行動を共にしていれば出会えるかもな…ふふ、楽しみだ…」

「みゆ…お前は戦いが好きなのか？」

俺は笑みを浮かべたみゆを見て、咄嗟にそんな質問をした。

「ああ…そういう風に作られたからな」

作られた…その言葉が引っかかる。

見た目はこんなにも普通の人間と変わりがないのに。

でも、それを悩んでもいないみゆは、自分の運命って奴を受け止めているんだろう。

俺には到底真似できない。

「そうか…」

俺は表情を曇らせながら、言葉に詰まった。

くそっ…

何かを期待した俺が間違いだっただか…そうも考えていた。

「だけど…その…上手く言葉では表現できないんだが、こんな何もない日常も楽しいかなって思ったりもする…」

みゆは、俺の事を気遣って話したのもかもしれないが、その言葉は俺にはとても嬉しいものだった。

「そうか…ふふっ…」

俺は思わず笑ってしまった。

さっきまでの出来事が霞んでしまっぐらいに…

「変な奴だな…正直に自分の気持ちを話したまでだ…」

「いや…お前らしくていいよ…」

そのまま気分を変えるように夕食の準備をした。

月明かりが部屋の中を照らしていた。

一人の女は窓際に立って思い耽るように写真を眺めていた。

「出会える日は近い…そんな気がする」

そんなことを呟きながら、何も無い部屋で自分の過去を思い出していた。

そこに自らの望んだものはあったのだろうか？

いや…これから見出すのだろう。

自問自答を繰り返して、これから自らに課せられる使命を果たそうと決意していた。

自分は思っているよりも弱い…

しかしそんなことを話せる相手もないのだ。

それなら自分で乗り越えるだけだ。

その女はそうやって自分の道を自分で決めると前だけを向くことを決意した。

今年の初雪は今日降ることになった。

年末残りわずかとなった今頃になって、いつもよりも数日早い雪が俺の目の前に降り注ぐ。

みゆはそれを見て喜ぶことはなかった。

まるで自分を見ているようだと。

「そうか？俺はそうは思わないけどな…みゆの肌は雪に似ているけど…」

「それ、褒めているのか？」

「ああ、そうだよ」

俺はそのまま学校へと急いだ。

そしてみゆは、少し出掛けてくると言って俺とは反対方向に歩いた。

20話

俺は朱里と一緒に屋上で昼食を食べていた。

すると、会いたくない例の人物が数日振りに俺たちの前に現れた。

クラス内では同じでも話などはしていなかった。

それは、あの休みの日から四日は経っていた。

「よっ…」

立花は何食わぬ顔をして俺らの前に歩いてきた。

「何か用か？」

「ああ…そろそろいいかと思ってな…」

そろそろいいだと？何の話だ？

俺は警戒心を多少緩めていたせいか、その言葉の意味が分からなかった。

だが、次の瞬間にそれを嫌でも思い知らされた。

ザン！

俺の持っていた食べかけのサンドイッチが真っ二つにされた。

「う……」

その目の前の光景を把握し、

自分が次に行わなくてはいけないことを判断するまでにそう時間には掛からなかった。

体の血液は下がることなく一気に上昇していた。

だからかもしれない、今までとは違いすぐに体が反応していた。

その場から大きく離れると、立花の姿を捉えた。

「朱里、下がってる！」

俺は朱里が援護をするのではないかと思い、念のために釘を刺した。

これは俺の戦いだ……

もう、朱里に守られたりはしない。

だから……全力でやりあう！

俺は固いコンクリートを蹴り上げて、一箇所に留まらないように動いた。

立花の姿はさっきまでの場所にはなかった。

例の能力のせいだろう、空間を移動し、どこからか現れる。

右だ！

立花は俺の右側に突如現れると、両手に握っていたナイフを振るった。

これが立花の本気の証か…

俺は左右に切り裂く斬撃を見極め、体を最小限に動かしてかわした。

そしてその動きを止めようと、攻撃の合い間を縫って前進したが、そこに立花の姿はなかった。

再び瞬間移動をしていた。

今度は…後ろか！

振り向いてすぐに立花の攻撃を対処しなくてはなかった。だから、くるりと回りながらしゃがんでその攻撃を回避する。

ブン…

立花の攻撃は空振りで終わる。

俺はそれと同時に体を伸び上がらせて起き上がると、掌底をあとに突き上げるようにぶつけた。

「ぐ…」

掌に骨の当たる硬い感触がすると、立花の体は少し浮き上がっていた。

このまま倒れるか…そうも思ったが、再び立花の姿は消えた。

これで三度目…

しかし俺には立花の姿は見えている。今までと同じことだ…

足元か…だが、違和感を感じるこれは何だ？

もう一つ先の未来が見える…

爆発？

炎と煙が屋上に立ち上がっている。

まさか…

俺はその時に悟った。立花は俺を確実に殺すために既にこの場所にトラップを仕掛けていたのだ。

俺は知らず知らずに屋上の隅にまで移動させられていた。

だとすれば俺はこのまま後退してはまずい。

結論を出すよりも先に立花は足元に現れた。

俺は自分の本能に従い、飛び上がって前に飛び込むような形での攻撃をかわした。

しかし立花は飛び上がった俺に反応していた。だから、空中で俺のわき腹をナイフでかすめた。

「くっ…」

衣服は切れたもののかすり傷程度だった。

俺はどうにか着地をして、立花を睨んだ。

来るか…四度目の瞬間移動が…

殺気を見に纏いながら俺は自身の集中力をどんどん高めた。

立花はやはり目の前にはいなかった。

しかし今となつては、立花がどこに移動しようとするのか見えて
いる。

だから俺の体は自然に動いていた。

空間転移をした立花が襲い掛かるその前に腕を捕まえた。

「何だと！」

今まで反応できなかったはずの俺を見て驚いた様子だった。

俺はそのまま手首をひねり、足を払って立花をひっくり返した。

重心を少しずらしてやれば、そんなに力を入れなくても人は動かせるのだ。

バランスを崩した立花はそのまま地面に背中を打ちつけた。

その拍子に片方のナイフを落とした。

俺はそれをすかさず掴み取ると、立花に向けた。

「う……」

丸腰だった俺にも武器ができた。これで対等かそれ以上だ。

もう、立花の瞬間移動は見切った。その上で俺が攻撃をしたら結果は見えている。

それが分からない奴ではなかったので、大人しく敗北を認めた。

「私の…負けだ…」

21話

右手に握っていた武器を下に落とした。そして覚悟を決めていた。

「さあ…好きにしろ」

立花の表情は真剣そのものだった。

自らの能力を完膚なきまでに叩きのめされ、そこには敗北感しかなかった。

そんな自分が生きていることは恥ずかしいとでも思ったのだろうか…

俺に介錯を求める感じにも受けて取れた。

しかし俺はそんなこと望んでいない。

「俺はお前の命まで奪う気はない。それに…負けたって思うなら、今後俺に構わないでくれるか？」

「何だよそれ…お前、私の事馬鹿にしてるのか？」

「あ？」

「護門徒の後継者争いは例外なく、殺し合いの結果成り立つものなんだ…」

私だってそれを知った上で覚悟も決めていた。

それなのに敵に情けをかけるだと？ふざけるにも程があるだろう。

お前は…私を侮辱する気が？」

「おいおい…過去がどうあったか知らないけどな。

俺は誰も殺したくないんだよ。別に殺さなくても実力で後継者と認めさせればいいだけの話だ。

悪いが…お前は敵かもしれないけど、俺は殺したくないんだ。それをやってしまったら俺が俺でなくなってしまう」

俺は真っ直ぐな目で立花に訴えかけた。そこには嘘偽りはない。

俺の本心だった。

「そんなきれいごとを…」

お前の父親は確実に後継者争いの対象者を殺しているんだぞ？」

「関係ない。親父は親父だ…」

もし、立花が納得いかないならまた襲い掛かってくればいいぞ。

そして俺は、その度に同じ答えを出すがな」

「くっ…」

立花は奥歯をかみ締めた。

俺の甘い性格に嫌気が差したのかもしれないが、

それよりも先にそんなことを言わせている自分の力の無さに怒りを露にしたのかもしれない。

「私には…もう、何も言えないな…」

それに、お前にはもう勝てる気はしないことも分かっている。

私の能力を完璧に読まれ、攻撃態勢の整う前に攻撃されたのだから

ら手の打ちようがない……」

立花は完璧な敗北宣言をしてしまった。

「まさか…甘さの塊のようなお前に私が敗れるとはな…」

未だに俺だつて理解できていない。

自らの能力が戦いの中で成長したことが勝因になったのだから。

「ほらよ」

俺は持っていたナイフを立花に返した。

「それで、お前はこれからどうするんだ？」

とりあえず聞いてみたが、

立花は今までのような緊迫感を取り除き、以前のようなふざけた
感じで話した。

「そうだな。目的が失われたから、人生計画第二段に移すか…」

「何だよ、それ…」

「知りたいか？」

勿体つけている立花に妙に肌が立つが、聞いてみたい気持ちが強
かった。

「そこまで言われると気になる…」

「くく…ネバーランドだ。
私の家を理想郷として、私の気に入った男女がずっと寝食を共にする…」

無駄な欲を脱ぎ捨て、私だけのことを考えていればそれだけで幸せになれる…」

「どうだ？正に神の境地だ！」

力説していて悪いが中身がまるつきりないし、

それはアメリカの名高いミュージシャンが同じことをしてなかったか？

「お前も、あそこの朱里も、みゆだったけか？あいつも候補者に入っている…」

立花は乗りのりだったが、俺と朱里は冷めていた。

「いや…その…無理だから…俺らノーマルなんで…」

「丁重にお断りしたが立花は納得しなかった。」

「お前、私のこと馬鹿にしてるのか！」

「お金も掛からない。好きなもの同士が一生同じ場所で過ごせるんだぞ？」

「それは理想郷以外の何でもないだろうが！それを断る理由がどこにある？」

「だから…全てにおいてだ！」

「お前の性癖も含めてな…俺の範疇をすっ飛ばしている。」

「ロケット並みの考えに自転車の俺は追いつけないっての…」

「ふん。いいさ、今は理解できなくてもいざねは理解できるようにさせてやる…」

本当に立花の精神の強さには感心させられる。俺はここに立花の強さを見た気がした。

しかし悩みの種は一つ減った。

いや…違う意味で増えたのか？

まあ、いろいろ。

22話

私、新城冬香は自らの属する組織、八鬼の本部へと足を運んでいった。

八鬼の本部は飛騨山脈の中に存在した。

人が容易に入れない領域ではあったが、八鬼の者たちはそれを難なく突破していた。

日本の中心的な場所でもあり神聖な場所でもある八鬼の本部は長い歴史を持っていた。

創始者は平安時代の末期に活躍した退魔師の唐津草十郎で、彼は特異な能力を持つ異能者だった。

日本の国土における不可思議な現象に対する知恵を持ち、さらにその解決を一人で行っていた。

だが、無理もあった。自らの力で行えることには限りがある。

それを悟り、自分と同じような仲間を八人集めて組織を結成することにした。

日本には何人かの異能者が影を潜めて暮らしていた。

だから八鬼という組織を立ち上げることで同じ境遇同士目的意識を持つことができたのだ。

そしてこの国を守るために誓い合い、さらに裏の組織も作った。

それが裏八鬼だ。

互いに切磋琢磨を繰り返して国の事だけを考えていたのだ。

それが、いきなり数百年前に神徒協会とやらがああ門に大して全ての権限を我々が持つと言い始めたのだ。

当時の表、裏八鬼のメンバーは激怒したらしい。

真っ向から対立して、自らの国は自分達で守ると話したのに向こうはそれを聞き入れなかった。

あくまでこれは自分達の物だと主張し、管理を全て請け負うと話したのだ。

しかもお前らは小さい犯罪でも取り締まっているというのが本音だったらしい。

だから数人は反対して戦いを挑んだらしいが、護門徒と名乗る奴にこてんぱんに叩きのめされた。

そこまで実力差を見せられてはこちらも返す言葉が見つからず、了解はしなかったが、無言の許可を与えてしまったのだ。

だから、神徒協会は未だに私たちの目の上のたんこぶ的存在だ。

全くこの国にろくに足も運ばなくせに護門徒任せで終わりなのだから…

私もいつか機会があったら、あいつらをぼこぼこにしてやりたい。

「それで？冬香：我々の依頼の件はどうなったんだ？」

頭目である唐津紅蓮は私を現実に呼び戻してくれた。

「あ……」

私はこの組織の説明に夢中になっていたらしいな。すっかり当初の目的を忘れていた。

「依頼の内容通りに動きましたが、それよりも先に邪魔が入りました……」

「邪魔だと？」

「ええ……あなたも良くご存知だと思いますがね……」

すると紅蓮は考えた。

「俺にゆかりのある人物か？ふーん……」

どうやらそれだけで分かったらしい。それ以上のことは聞かなかつた。

「まあいい……その問題は置いておこう。神徒協会の動きはどうなっている？」

護門徒の後継者争いが始まったことは俺の耳にも入っているが……それ以外のことは未だに掴めていない。

それに織斗が凶行に走ったあの事件の尻拭いもされたとなつてはなあ……」

紅蓮は面白くない様子で、頭をぼりぼりとかいていた。

「俺は過去に神徒協会の関係者にあつたことがあるんだが……あいつらおかしいよ。国を守るとかそういう使命感で動いている感じがしない。」

三賢人と呼ばれるトップの人間のためにしか動いているように思えないんだ……

信者にしてもそうだ。三賢人を崇拜して一生行動を共にしようとしている。

姿を人目に曝け出さない人物にな……

「気味が悪いっいたらありやしないが、大きくなった組織つてのはそういうものなのか？」

「私に聞かないで下さいよ。この組織だつて大きくなればそうなるんじゃないんですか？」

「一緒にするな。民を大事に、フレンドリーをモットーにしている俺たちなら、

平気でみんなの前に顔を出せる」

「あのねえー。変な横文字ばかり使わないで下さいよ。それにみんなの前に顔を出してたら隠密行動も上手くいかないでしょうが！」

「そうか……すまない。裏八鬼のことを忘れてた。なら、表のメンバーだけで……」

「そう言う問題じゃないでしょ。」

我々は元々、民に異能力者として…鬼と恐れられて、この組織を結成したんです。

なら、人目にあまり触れない方が得策です」

「俺の代からは、それを変えたいんだよ。グローバルな付き合い。そしてラブアンドピースだ」

とても表、裏八鬼をまとめる頭目とは思えない人物の発言だ。

私もあまり常人とは違う行動を取るが、このイカレ野郎よりはましだ。

「ま…その話は当分置いていて、今の目的は護門徒の後継者争いだ。そこよからぬ動きが見えていることは明白だ。」

神徒協会の切り札のような男が出て、その上あいつの息子も絡んでる…

それを見張ることは、今後の展開を知る上で大事だろう？

だから、お前は再び月夜海に会いに行け…

あいつ以外に面白い奴も絡んでいるかもしれないからな」

何かを知っている口ぶりで紅蓮は笑っていた。

本当に隠し事が好きな奴だ。

頭目でなければ殺しているかもしれない。

「尾上みゆは、お前も知っているだろう？」

「ええ…一度、戦いましたから」

「彼女も海の元にいるらしい。お前も気になるだろう?」

「それを知っていて…」

「ああ、興味がなければお前も動かないだろう?」

「だから、ここまで材料が揃った今ならお前に任せられるって訳さ…」

「餌で釣らないで下さい。しかし…気になるのも事実ですから断りはしませんが」

「そう言うと思った…」

「こいつは私を平気で駒のように動かす。」

「しかし実力も私を上回るのは事実なので、従うしかない。」

「所で…三条家は?」

「ああ…悪いがついこの前、根絶やしにしたよ。」

「流石に三條織斗の凶行を償わせるにはその行為しかなかったからな。」

「それでもしなければ他の者にも示しがつかないからな…」

「頭目一人?」

「ああ…ざっと数十人。」

「まあ、全てを探し出すまで二ヶ月は掛かったけど…ばっちりだ」

大量殺人をブイサインで表現されても笑えない。

しかしそれだけのことを織斗はしたのだ。報いは当然だとも思っ
た。

「さて…飯でも食うか？」

さつき散歩した時に突然現れた森の熊さんの鍋でよければあるが
な…」

紅蓮は囲炉裏に掛かっている鍋を指差して話した。

「あの…私は鼻歌交じりで、軽く熊を殺すほど冷酷ではないので遠
慮しておきます」

私は正直引いていた。

「大食いのお前がか？」

「そりゃ！あれを見れば食べる気も失せるでしょうが！

頭が飛び出てるんですよ！

普通に考えたら頭は除外すべきでしょうが…それをそのまま入れ
るなんて…」

鍋を見るとそこにははみ出した熊の頭がこつちを見ていた。

有り得ない…本来入らない部分が入っているのだから…

「だって、お前も普通は嫌いだろ？新たなものに挑戦するのも手だ
と思っただけ…」

「限度があるって言うの！飯にも私は女だ。

これを見て、キヤー嬉しい。美味しそうだわ。

ってキャラが定着していたら話の内容が変わってしまっただろうが
「！」

「そついつものか？」

「そついつものだ！」

頭目だろつが関係ない。私は腹が立っていたから真つ向から否定
した。

「つまらない奴だ…そんならとつと行つてしまえ！これは俺一人
で食つ」「

食つのかよ。

私は少し気分を悪くしながら何も言わずに出ていった。

唐津紅蓮…恐るべし。

23話

「おい…何でお前がここにいるんだよ」

俺は朝から頭を悩ませていた。

どうしてこいつがここにいるのか理解できなかったからだ。

寝起きの俺の目にはそいつが少しぼやけて見える。

しかもみゆはそいつに向かってすでに刃を向けていた。

「みゆ…だったか…私はもう敵じゃない。だから、そいつを下ろせ」

みゆと対峙していたのは柴木立花だった。

俺との戦いに敗れて翌日には何故か不法侵入を余儀なくされていた。

しかしみゆという最強のセキュリティがなければ俺は寝首をかかれていたかもしれない。

「お前は…信用ならない。海に何の用だ」

ここまで敵対心をむき出しにするみゆにも驚いたが、まずはこいつの非常識さをどうにかさせよう。

「全くだ…お前な…何しに来たんだよ。まさか、暗殺でもしにきたのか？」

「いやー…急にお前の生活を覗きたくなっとな。

こういうのは、いきなり訪問した方が本当の姿を見ることができ
るだろう？」

だから、寝起きどっきりのな？」

冗談ぽく話す立花に大してみゆの視線は相変わらず冷たかった。

「一度死んでみるか？」

みゆは小刀を首筋に突きつけて殺気を緩めなかった。

以前、背後を取られたことが気に入らなかったのだろう。明らかに敵対心をむき出しだった。

「お前の技はもう見切った。出せるものなら出してみる」

立花を煽るだけ煽っていた。

おいおい…このままでは、ここが戦場になってしまう。

「だから…もう、海には手を出さないって言ってるだろう？しつこいと…嫌われるぞっ！」

立花が瞬間移動の能力を使いみゆの目の前から消えた。

俺には立花の移動先が既に見えていた。しかしみゆはどうするの
だろうか…

そう思って黙っていると、みゆは俺が読んだ先に手を伸ばして姿

を現した立花を当たり前のように捕まえた。

「何だと！」

立花はそのまま床に転がされた。

そしてみゆは持っていた小刀を再び喉元に突きつけた。

「お前の能力はもう見切った。

冷静になればお前の気配は見えなくなっても感じる事ができる」

嘘だろ…

空間に隠れた立花の気配を探るのは無理だ。俺だって多少なりに人の気配を感じることはできる。

しかし立花が姿を消した時は無理だった。

だから、未来を見る力に頼らざるを得なかった。

みゆは、空間に隠れた人物の気配までも察知できるのか？

俺はみゆの底知れない力にただ驚くだけだった。

「初見ではそこまで判断できなかったからな。これですつきりした」

一方のみゆは、借りを返せた様子で満足だった。

「そうか…なら、どいてくれよ。私は殺し合いをする気はない。

そんなことよりも柊リオのことについてだが…」

耳が早いことで、立花は奴の情報を集めていたらしい。

俺もみゆにすぐにどくように話して、立花は自由になった。

「本気で俺に協力する気なのか？」

「ああ…そう言ったろ。だから柊リオのことも分かる範囲で教えてやるさ。」

それには護門徒になるだけが目的じゃないからな…

お前の周りにいれば私の会いたい人物に会えるかもしれないからな」

「会いたい人物だ？お前みたいな奴が会いだなんて。どんな貴重な人間だよ」

「しかし十年以上会っていないから、向こうは忘れてるかもな…」

「あの一…人を餌のように扱うなよな」

俺も半ば呆れていたが、

立花が嘘を話している訳ではなかったのをそのことを自然に受け入れていた。

24話

学校での昼休み。

俺と朱里、そして立花は屋上で食事を取っていた。

「なあ、朱里…私にもその弁当をよこせ」

立花は朱里が作ってきた弁当を見てそう話したが、朱里は丁重にお断りしていた。

「嫌よ…あなたお金持ちなんですよ。それならコックにでも何でも作らせればいいじゃない。」

「何で購買で売ってるパンを食べてるのよ」

「そんなの雇うの面倒くさいし、そこらで何でも買えるからな…」

「なら、それでいいじゃない。何個でも買って食べたらいい…」

「あのなー私は朱里の料理が食べたいんだよ。お前は本当に私の気持ちに分かってないな」

「分かりたくもない…」

本当にこいつは自由奔放だな。

しかも性別お構い無しに好きになりやがる。

「海にはあげてるくせに…なあ、お前からできてるのか？とっくに済

ませた？」

俺は飲んでいたお茶を吹き出した。

「お…お前、ななな何言ってるんだよ！」

「そ…そうよ！」

俺ら二人は取り乱して立花を非難したが、当の本人はへらへらと笑っていた。

「お前ら分かりやすいなーその様子だとまだのようだ。
それなら私にもチャンスありつてことか…ふふふ！」

気持ちの悪い奴だ。俺は背中に悪寒を感じた。

「そんなことよりも、朝話していた柊リオのことについてだが…」
話題を切り替え、気分を変えたかった。

「朝？」

朝という単語に朱里がどうやら引っかけたようだ。

「朝って…まさか、こいつ海の家に行ったの？」

朱里が今度は会話を遮ってしまった。

「いや…その…」

俺が説明しようとするよりも早く立花の卑劣な企みが横槍を入れた。

「いやー…今朝寝こみを襲おうと思ったらさ、みゆって子がいてね。あいつも含めていろいろなこと揉めちゃったな…」

誤解を招くような発言を朱里に浴びせ、ぺろっと舌を出して挑発した。

「う…嘘だ！そりゃあ、こいつはみゆとは揉めたけど俺は全く関係ない！」

「立花…」

朱里は既に自らの我慢の限界を超えていたのかもしれない。

知らない間に彼女の武器である、鍊玉の剣を手に入っていた。

どっから持ってきたんだ！

「おい…落ち着け朱里。あいつお前をからかってるんだって…それに嘘だから…」

俺は必死になだめようとしたが、朱里の耳には届いていなかった。

朱里は動いていた。

高速で動くその剣速を捕らえることは俺にはできなかった。

本気で殺しかねない…そう思っていたが、相手はその上をいって

いた。

朱里の剣を往なすと背後に回って両腕で押さえつけた。

「うわぁ…」

予想外の行動に朱里は冷静さを失った。

「このまま…どうしてやるのかな？」

立花がおかしなことを口走り、このままこの学校の中で描写できないことをしようとしたので、

俺は歯止めをかけた。

「そこまでだ！」

立花の襟首を捕まえて後ろに引っ張った。

「うわー！」

立花は朱里から無理やり引き剥がされる形となり大きく体勢を崩した。

「お前な…そういうのもいい加減にしろよな！」

「まったく…こいつは捉え所がなくて困る。」

俺はイラついていた。

「はは…悪い悪い…調子に乗りすぎたか？」

「ああ…かなりな」

「なら、話を元に戻すか？」

「そう願いたいものだ…」

立花も少しは反省したらしい、俺に掴まれて乱れた服を正すと一息ついてから話を始めた。

「柊リオ…年齢は不明。出身も不明。

能力もその…不明らしいが、唯一分かっていること。

それは…甘い物に目が無いだそうだ…」

空気が固まった。

その話の内容では、敵が甘党だということが分かったただけだけのだから。

「それで終わりか？」

俺は念のために聞き返してみたが、立花はそうだと言っただけだった。

そこに何の役に立つ情報があるというのだ。

「あのなあ…それだけなら別に聞かなくても何ら変わりないだろうが！」

「そんなのもつたいぶるなよ」

「そう言うな…お前が手合わせをしたのなら、どんな能力だったのかは分かるだろ？」

立花に逆に聞かれてしまったが、俺はあいつの能力が何かは説明できなかった。

「目に見えない衝撃波が襲い掛かってくるとしか言い様がない…」

「何だそれ？」

「攻撃範囲もどの位の規模で出来るかも分からないし、威力も分からない。」

それに…朱里に助けてもらったからな…俺よりも朱里の方が分かるかもな」

「そうなのか？お前…朱里に助けてもらったのかよ。」

朱里も相変わらず過保護だな」

返す言葉もなかったが、朱里が反論した。

「私の勝手でしょ。私はやりたいようにやっているだけよ。」

それはそうと、リオの能力についてだけ…」

あれは私も剣で切ってみたけど、まるで空でも切ったかのような感触だったわ」

「空を切る？実在しない攻撃ってことか？

よく分からないな…、まあ、でも私もやりあえば分かるかも」

「お前…そうやって、また護門徒争いに舞い戻ろうって魂胆じゃないだろうな」

「まさか…そこまで人間腐っていない。

お前に負けた時点で私はお前に力を貸すことに決めただ…」

「なあ、素朴な疑問だが、後継者争いに取り決めはないのか？

こういつのは駄目とか、どうなったら勝敗が決まるとか…

俺は全く何も聞かされていないからな」

「とりあえず実力を相手に分からせればそれでいい。

殺そうが、生かそうがそれは勝者の特権だ。

ただ、朱里…あんたのやっていることは少々気をつけた方がいいかもな。

守護人の者が護門徒ではない者にあまり肩入れをするのは神徒協会にとっても好ましくない」

「それは神徒の使いであるあなたの言葉？」

「いや…上の奴らの言葉を代弁しただけだ。

まだ悟られてはいないが、事が大きくなる前に忠告しておこうと思っただけ。

だから、これ以上海には係わるな。

生きようが死のうが、それはこいつの運命なんだ。お前はお前の使命を果たせばいい」

立花は朱里に厳しく釘を刺した。

「そう…分かったわ。まあ、聞くだけ聞いておくけどな」

どうも納得した様子ではなかった。これでは同じ事を繰り返すそ
うだ。

俺も朱里がこれ以上傷ついたりするのを見たくはない。だから正直な気持ちを話した。

「朱里…その…俺はもう大丈夫だ。

いつもお前に助けてもらってばかりだったけど、

これからはこいつと柊リオの対策を練るから心配するな。

後継者争いが終わるまでお前はみゆのことを助けてやってくれな
いか？」

「それ、どういう意味？」

朱里は明らかに怒った表情で俺の事を睨んだ。

う…俺…何かまずいこと言ったか？

「私はもう必要ないってこと？」

「そんなこと言ってない。ただお前のが心配なんだよ。

この先どんなことに巻き込まれるのか分からないのに、守護人の
お前が係わってくるのはまずいだろ」

俺は必死に朱里に訴えかけたが、その気持ちはあまり伝わらな
かったようだ。

朱里は俺の方を見ないで、そつと呟いていた。

「そつ…そつか…私って…そんなものか」

朱里はそのまま屋上から姿を消した。

25話

あれから数日が経ったが、変わった様子はなかった。

しいて言えば、俺と朱里の距離が出来てしまったことぐらいだ。

立花はそんなことお構い無しに、朱里にちょっかいを出してはこごとく玉碎していた。

あいつの性格は天然なのだろうか？

俺はあんなにポジティブに物事を考えられる立花が羨ましくも思った。

大体、俺何かまずいことでも言ったか？

朱里の事を心配して話したのに、それに対して不快感を現わされるのはおかしな話だ。

しかしどうも調子が狂う。

俺は妙に落ち着かない気持ちでいた。

「海…朗報だ」

立花は休み時間に俺の元に近づき、情報を提供してくれた。

「柊リオが動きだしたらしい。

あいつはどうも護門徒後継者争いだけが目的じゃないらしい。

ある人物を追っているようだ」

「ある人物だ？」

「ああ…お前の良く知っている男」

俺に良く知っている仲の良い男など存在しただろうか？

そんなことを考えてみたが、まるで浮かばなかった。

すると立花はそんな俺にはお構い無しに話を続けていた。

「月夜灯…お前の父親だ」

空白の時間を置いて、俺は声を荒げた。

「嘘だろ！親父の居場所が分かったのか？」

「いや…特定はしていないが、そういう動きがあるというだけだ。

簡単な話し、神徒協会はお前から親子を快く思っていないってことだ。

下手すれば二人揃って殺されるかもな」

「物騒なことを言うな。俺も親父も殺されないさ…しかしお前大丈夫なのか？」

こんなに俺に神徒協会の情報を漏らして」

俺なりに立花のことを考えていたが、相変わらずの態度で笑い飛ばしていた。

「お前が私の心配とは以外だな…ま、分からないでもないが…しかし大丈夫だ。」

私は神徒協会の一員でもあるが、半々つてとこだ。まだ正式に護門徒になつた訳でもないし、メンバーにすら入れないのだからな。

だから私の私財の一部を使って調べさせているだけだ」

それを聞いただけでも、立花の家柄の凄さが分かる。

「しかしあの柊リオは違う。生まれから神徒の人間らしい…だとすればその力は計り知れない。」

人種そのものから違うのだからな。

始めから諦めるのは性分じゃないから勝てないとは言わない。

だけど、私たちだけでは難しいかもな…」

「お前でも現実を見るんだな」

「馬鹿：戦いにおいてリアリストの方が生き残れるだろ？」

「それって言葉の意味的に違うんじゃないか？」

「細かいことは気にするな。それよりも今は、お前の父親、そして護門徒のことだ」

この三年間何もなかったが、いよいよ神徒協会も本腰を入れて動くことを決めたようだな。

だとすれば…親父と会うことも可能かもしれない。そんな期待も抱いていた。

そんな時に俺の脳裏には一つの疑問が浮かんだので、とりあえず立花に聞いた。

「そつだ。話しついでだが、お前…みゆのことどこまで知ってるんだ？」

「あいつか？全然知らん…特異な能力を持っているようだが…お前の知り合いだろ？」

「そつか…三条織斗の件の後にみゆは八鬼の冬香がかくまっていたんだ。」

それなら神徒協会の奴らが知らないのも納得がいく。

「そつか…ならいい」

「お前、鎌をかけたんじゃないのか？私の反応を見ていたようにも思えるが…」

鋭いな。しかしここでみゆのことを話すのもどうかと思うので適当にはぐらかした。

「別に…ただ聞いてみただけだ」

「ちっ…食えない奴だ」

立花はそれ以上何も聞かず、今後の動きについて話を進めた。

「あちらからきくと現れるはずだから、お前はそのまま普通に日常を送ればいい。」

その間に私は、戦いを有利な状況に持ち込めるように目ぼしい所にトラップを仕込んでおく。

一般人が立ち寄らないような場所にな。お前はそこに追い込めばいい。

そうすればリオも取り乱すだろうさ…」

トラップと聞いて、俺と戦った時のことを思い出してしまった。

そうだ。こいつは、戦いの中に罠を仕込んでおくのが上手いのだ。

俺はそれを能力の開花によって見抜くことができたが、先読みの能力のないリオなら罠に掛かるかもしれない。

だから立花の提案にも乗った。

ただし、一般人が確実に巻き込まれないことを第一条件に挙げた。

「これで、確実に奴を葬れるかもな」

「葬るって…」

「いいか、あいつに情けは禁物だ。

私にかけたようなことをすれば、お前は負けるぞ？いや、殺される…それだけは肝に銘じておけ」

「そうなのか？」

「相変わらず、すつとぼけた奴だな…戦って感じたはずだ。

あいつに恐怖や迷いはないんだ。だからお前を殺しても何とも思わない。

これは奴が請け負った仕事の結果で分かったがな」

「仕事だと？」

「報告書によれば、こなした数の仕事は二十五回。

成功率は十割。その中で係わった人間は全員死んでいる。

味方も含めてな…しかしそのことを神徒のメンバーは咎めなかった。

それがどういうことかは分かるか？」

「容認で誰でも殺すことができるってことか？」

「正解だ。あいつが誰を殺しても罪にはならないようだ…」

「無法者もいいとこだ」

「ああ…その点においては私も胸糞が悪くなったがな」

立花には立花の信念があったようだ。

無差別の殺人は好まず、自らの意思を貫き通した結果の死だからこそ、

受け止めるられると考えているようだ。

なるほど、柊リオとは明らかに違うな。

あいつと初めて会った時に違和感を感じた。それは心の揺れをまるで感じなかったからだ。

平常心。

そう言ってしまったえば単純だが、奴なら何も考えずに淡々と人を解体してしまうだろう。

汗もかかず、動揺も見せないでまるで食事でもしているかのよう
に。

そんな心の無い機械のような人間を俺だって許してはおけない。

「俺だって覚悟はある…この数ヶ月で学んだ。どうしようもない」とは存在するのだと。

しかし…俺は俺のやり方でやるさ」

「それが自らの首をしめなければいいがな」

「忠告は受け止めておく…」

それ以上は何も聞かなかった。

しかし確実に柊リオという存在は俺の中で大きくなっていくことは
は確かだった。

26話

尾上みゆは夜の街中のとあるビルの屋上にいた。

それは今後の自らの動きを決めるための確認を含めての行動だったのかもしれない。

ネオン街がビルの上から明るく光っている。

そこには人が行きかっていた。

「さて…壊疽者はほぼ壊滅した。私はこれからどうしたらいいかな…」

そんなことを考えて物思いに耽っていると、路地裏にいる怪しい人影を見た。

「あれは…」

みゆはその人影を無自然に目で追っていた。

その姿は若い男だった。

そこにはそいつだけではない、もう一人誰かがいた。

みゆは目を凝らして見ていた。

若い男女だ。

それが見えたがどうも様子がおかしかった。

男の方が右手に何かを振りかざしながら女を威嚇しているように見えたのだ。

みゆはそのことに興味を示したのか、いきなりビルの屋上から飛び降りた。

そこは地上から十メートル以上の高さだった。落ちれば当然即死だ。

しかしみゆはそんなことを恐れることもしないで、飛び降りた。

まるで階段は面倒くさいといわんばかりに。

そして地面が目前に迫った瞬間、懐から例の武器を取り出すと、壁に思い切り突き立てブレーキを強制的にかけた。

ぎざぎざというコンクリートのこすれる音と共に体はゆっくりと速度を落とした。

「っ……っ」

目の前に現れたみゆの姿を見て、その男は驚いていた。

だが、もっと驚いたのはみゆの方だろう。

その場所は血の海と化していたからだ。

切り刻まれた二人の人間の肉体が散らばっていて、その中心には

泣き崩れる一人の女がいた。

こいつは何をしていたんだ？

そのことだけが気になっていた。

しかしそれよりも先にその男は手にしていたナイフでみゆのことを切りつけようとしていた。

みゆは着地して間もなかったので、反応は僅かに遅れた。

壁に突き立てた小刀も抜くのに時間が掛かる。

無理やり引き抜いた小刀と相手のナイフがぶつかり合った。

「くっ…」

二人の体は大きくずれると、お互いににらみ合った。

みゆはその状況を見てすぐに判断した。

こいつは殺人鬼だ。

それも相当の異常者…自然と漂う獣のような匂いがみゆの五感を刺激した。

「何だ？貴様は…俺の邪魔をするのか？」

男は怯えて動けない女を背にナイフを身構えながらみゆのことを警戒した。

「何をしている?」

「何をだ?見れば分かるじゃないか。」

解体だよ…人間の…あのさ、人とさ、虫ってどう違うのかな?

虫は手足取られようが、羽を取られようがどうにか動いているじやん。

人間ってどうなのかなって…さ…」

「それが、この結果か?」

「そうだよ…二人ばらばらにしてみたけど、どっちも上手い具合に
いかなかったよ。」

シヨック死ってやつかな…手足全て取られている間に死んだよ…
そこの生きている女なら、頭に到達するまで生きていられるんじ
やないかと思ってるんだけど…」

完全な異常者だ。

こんなことを動揺の一つも見せないでやってのけるのは、心のど
こかが壊れている証拠だ。

それはみゆもすぐに分かった。

そして奥で怯えている女の事を不憫にも思った。

「お前は…俺の邪魔をするのか?それとも、実験の対象になっ
てくれるのか?」

みゆは、淡々と話している男がもはや人ではないとも思っていた。

「何人殺した？」

「え？」

「初めての殺しじゃないんだろ？」

「そんなの聞いてどうするの？関係ないじゃん。

もう、いちいち数えるのも馬鹿臭くなっただから覚えてない。

それよりもさ…お前、ちよつと人と違わないか？

人の独特の雰囲気がない…そうだ。こんな奴らよりも面白そう
だ」

そう言つと、男は後ろにいた動けない女の首筋にナイフを突きつ
けた。

「お前がこいつの代わりになつてくれないか？それなら、こいつだ
けでも許してやるけどさ…」

「ひ…ひい…」

女はもうまともに動けないほど恐怖を味わっていた。

目の前で二人の人間が解体されたのだから無理も無いだろう。

この女を無視するわけにもいかないの、みゆは少し悩んだ。

それから吹っ切れた顔を見ると、

「別に構わないさ…だからその女を放せ」

男に向かって話した。

すると男はみゆの武器を指差して、ため息をついた。

「あのねえ…それはお前がその武器を捨ててから言っもんだ」
なるほど、と、みゆもすぐに納得して武器を地面に置いた。

27話

「これでいいのか？」

「いやいや…この手錠を両手につけな。そうしたらこの女を放してやるよ」

そして手錠をポケットから取り出して、みゆの方へ投げた。

用意周到な人間だ。

しかし何人もの人間を解体しているのならどんなものが懐から出てきてもおかしくはなかった。

みゆは黙って落ちていた手錠を拾い上げ自らの両腕にかけた。

それを見ると男はにやりと笑った。

「自己犠牲とはすばらしいな。さあ、始めようか？まずは…この女からだ」

「何だと！約束が違う」

「こいつがどのように解体され、死ぬのかその目で大人しく見ているんだ。

そうだなあ、こいつの精神状態だと、持って十分つてとこかな？それでもお前も何かしらの反応は見せるだろう。それをまずは見てみたい…」

「嫌…嫌…」

近づくナイフに女は泣きながら、抵抗していた。

「あんまり暴れると痛いぞ？」

握っていたナイフに力を込めると、身動きを封じるように足に向かって突き刺そうとした。

「止め…」

みゆが叫ぶと同時にその男のナイフを持つ手が宙を舞っていた。

「え？」

男は一瞬、自分の身に何が起こったのか理解でなかったが、自らの手が空を切る感覚で気がついた。

痛みよりも先に、男は目の前に飛び込んできたそいつに驚いた。

黒いローブに全身に纏っていて、フードをすっぽりとかぶり男が女か分からないまるで、

魔術師のような格好だった。

「だ…」

男がそいつに何者か問いたただそうと、言葉を発しようとしたが、その時にはもう殴られて意識を失っていた。

右腕から鮮血を撒き散らしながらみゆの後ろの壁まで吹っ飛んで

いた。

「大丈夫かい？」

そいつはすぐに人質になっていた女の肩を抱いて落ち着かせようとしていた。

話し口調や声域からすると男だった。

女はそいつからやさしく話しかけられることで、度重なる衝撃から開放されたと思いきや失った。

「可哀想に…酷なことをされたものだ…」

そいつはそのまま女を抱きかかえて、血の付いていない地面に移動して下ろした。

「おい…」

みゆは話しかけた。するとそいつは振り返りみゆを見た。

「君は大丈夫かい？手錠をかけられているみたいだけど…」

「心配するな。これぐらいどつってことない」

みゆは落ちていた小刀を足で上に蹴り上げると、手に取った。

そしてその切っ先を手錠の鎖の部分に当てると、力を一点に集中させた。

バギン

金属の碎ける音と共にみゆは手錠の鎖を断ち切っていた。

それから手首についている金属部分もまるで紙でも切るかのよう
に、

手首を傷つけることなく切り離れた。

それを見ていた男は驚いていた。

「いや…これは驚いた。君は…その…何者なんだい？」

「あのな、そっくりそのままあんたにその言葉を返したいんだが…」
男はそれを聞くなり、なるほどといった様子で、深くかぶったフ
ードを持ち上げるとその正体を現した。

四十代前半の男性で、無精ひげを生やし、先ほどのような躊躇の
ない攻撃ができるような冷酷非道な感じではなく、
穏やかでやさしそうな表情をしていた。

私に事情を説明するように迫られると、そいつは以外にも素直に
答えた。

「私は、依頼されてこの殺人鬼を追ってきた者だ。

あいつは、十人以上を殺している凶悪犯だ…

通り魔的犯行で、住まいを転々としているからなかなか捕まらず、
警察関係者から依頼されてね…探し出すのに三日掛かってしまっ

た。

そのせいで無駄な犠牲が増えてしまったことは残念だよ」

「あんたは、何かの組織に属しているのか？」

「こんなことをやってのける人間はそうそう見たことがない……」

「組織？うーん……まあ、属していたといった方がいいのかな？」

「でも……何でそんなことを聞くんだい？」

「知り合いに似たような奴らがいたから……でも、あんたはどこか雰
囲気が違う」

「へー……君は何か知っているようだ。」

私はね、昔とある組織に属していたけど、その体制やら人の扱い、
そして大きな隠し事をしていることに嫌気がさしてね……抜けてし
まったよ。

「今まで築き上げたもの全てを捨ててね……」

「それで、今は警察の手助けをしているのか？」

「いや……私の存在を知っている者は僅かだね。」

「その素性をかくまってもらう代わりに仕事をしているだけさ……
材料が揃わない状態では行動に移すことはできないからね」

「何か起こそうとしているのか？」

「ああ……私の所属していた組織を潰したいんだ」

その男はみゆに迷いの無い目で真剣に話した。

みゆもその男が本気だということを感じ取っていた。

「それで…その材料とやらは揃ったのか？」

「ああ…そろそろ行動に移してもいいかと思っただけね。

時期が近づきつつある…そして私も強力な武器を発掘したからね…」

そう言ってみゆに自らの武器を差し出した。

それは、小刀と普通の刀の間ぐらいの長さの刀だった。

「何人たりとも傷つけることのできない武器だ…」

「どういう意味だ？」

「それは…秘密…」

「ふん。別にいいさ…それよりもここに転がっている奴はどつするんだ？」

「もうすぐ私の仲間が身柄を警察に引き渡すさ…」

それよりも被害者のこの子をいつまでもこんな血なまぐさいところに置いておくのもなんだから、場所を変えよう」

そう言って男は路地裏から表通りに出て、気絶していた女を近くにあったベンチに寝かせた。

そして携帯を取り出すと仲間の男に話していた。

みゆは路地裏に転がっている殺人鬼が目覚めないのか少し心配していた。

すると男が電話を終えてみゆの方を見た。

「すぐ来るそうだから、我々はずらかるとしよう」

「何で…私まで…」

「君も訳ありだろ？それなら私と一緒に行動した方がいいと思うがね…」

強引な奴だと思いつつも間違ったことは言っていないので、みゆはそのまま男の背中を追いかけた。

28話

「ここまで来れば大丈夫だろう」

男は大蛇山の中に入っていた。

私も大人しく付いてきてしまったが、付いてきた自分がよく分かっていなかった。

「さて…ここならゆっくり話ができそうだ」

「ああ…しかしあの殺人鬼そのままにしておいて良かったのか？」

「あ…あれね。大丈夫。殴った時の感触からいって確実にあごの骨は砕いたし、

それに右腕も切り取ったからそう簡単には動き回れない…

連絡して五分もすれば警察は動くはずだから…」

「ふーん」

みゆは何から何まで抜け目の無い奴だと思っていた。

「話しついでに聞いてもらいたいのだが、これから私は海外に飛ばうと思うんだが、

君も付いてこないかい？」

「え？」

「唐突ですまないと思っている。得体の知れない男だしね…

でも、君はどこかほっとけないというか、何か君にも係わり合いがあるのではないかと思ったりもするんだよ」

「何を根拠に…」

「私の潰したい組織というのは神徒協会という所なんだ…」

奴らのやっていることは、間違いだらけでね、それを正そうって訳だ」

「って訳だっって言われても。しかし神徒協会ってというのは聞いたことがある…」

そしてみゆは自らの体験をその男に話した。

自分がどのようにこの世界に現れ、三ヶ月前にどのようなことを起こしたのか。

その結末まで話すと、男は険しい表情を見せた。

「なるほど…三条識斗…奴が絡んでいたか。

それなら君が操られたことも納得できる。しかし何の縁だか…」

男は笑ったかのように思えたが、その表情をはつきりと読み取ることはできなかった。

「君は自身の存在理由について知りたくないかい？」

きつと神徒協会の奴らも君の事を知っているはずだ…

まあ、君という存在がこの世界にいることは気付かれていないよ
うだが。

それでも会ってみる価値はある」

「しかし…」

「勝手な憶測だが、今の君は目的を失ってやきもきしているのではないかな？」

だから、さっきの女性を助けようと真っ先に現れた。違うかい？」

まるでみゆの心を見透かすかのように話した。

それに対してみゆもあながち間違いではないので、黙って聞くしかなかった。

みゆは悟っていた。

自分はいずれ目的を失うのだろうかということ…

異世界から来て壊疽者を殺す目的を持っていたのに、それが全て淘汰された。

その先には何があるのだろうか？

次に考えたのは自由ということだ。

しかし拭いきれない不安は常に付きまとっていた。自分は誰かに支配されている。

その気持ちだけが、全ての行動に蓋をしてしまった。

だからこの男の話すとおり自分のルーツを探るのも一つの手だと考えた。

しばらくの沈黙の後にみゆは、その提案を飲むことにした。

「いいだろう…その神徒協会とやらに連れて行ってくれ。私も自身のことがもつと知りたい」

男は喜んだ。

「君のような強い子が一緒なら私も心強い。あくまで私のサポート役で構わないからそのつもりで…」

そして男は契りを交わすようにみゆと握手をした。

「あ…名乗るのが遅れたが、私は尾上みゆという」

みゆは思い出したかのように自己紹介をしたが、その男もそれを聞いて慌てた。

「ああ…そう言えばそうだった。自己紹介がこちらもまだだった。私は…月夜灯という。よろしくね」

月夜という苗字を聞いて、みゆは思わず反応してしまった。

どこかで聞いた名だ…

29話

いつものように学校に行くと、朱里の姿はなかった。

別のクラスだったので、朱里のクラスの奴らに聞くと無断欠席だと言っ。

俺はその時点でおかしいと思った。

あいつは理由もなく休むはずがない。

俺は何故か妙な胸騒ぎがしていた。

それは長い付き合いだということもあるが、
放課後に立花と話していた時のことを考えると心配でならなかった。

何か一人で勝手に事を起こしていなければいいのだが…

だから学校が終わってから俺は、朱里の家に行こうと思った。

冷たい風に煽られながら、誰もいない路地を歩いていると、
目の前に一人の男が目の前に飛び込んだ。

こいつは…

俺の瞳孔は大きく開いた。それはまるで動揺を表すサインのよう
に…

「お前は…」

その男はにこにこしながら俺に話しかけた。

「久しぶりだね…いやー…君から僕を探してくれるかと思って期待していたんだけど、

何も仕掛けてこないからさ、いい加減痺れを切らしてしまったよ…」

「どづいつことだ？」

「まあ、分からないでもないよ…君は明らかに僕のことを恐れている。

得体の知れない能力、そして躊躇することの無い僕の性格にね。でもね、それが分かっているかといって僕は見逃したりはしないよ。

僕が協会から言われていることは護門徒候補者を皆殺しにして、君の父親を殺すのだからさ…

これは無視できないんだ」

「何故、俺や親父を殺す？」

「正直、邪魔みたいだよ…君ら親子は。

まあ、ないとは思いつけど、神徒協会にとって土台を崩しかねない存在なんだってさ…」

「立花も殺すのか？」

「うーん。彼女の場合は同じ神徒協会直属の候補者として不憫に思っしょ…」

でもさ、いろいろ嗅ぎまわっているようだから殺した方が得策だ
って……」

「ちっ……」

俺は正直気分が悪くなっていた。

所詮、立花も捨て駒のような存在だったことを知ったからだ。

同じ神徒協会の中で修練を共にしたかもしれない仲間をこいつは
平気で殺そうとしている。

そんな決断を出す神徒協会には俺も疑問を抱かざるを得なかった。

「ここまで君に全部話したってことは、分かるよね」

「ああ…本気で俺を殺すってことだよな」

「うん、そうだね。でもさ、その前に一つ君に話しておかなければ
ならないんだ」

「何をだ？」

「千草朱里のことだよ」

その名前を聞いて俺の動揺は更に高まってしまった。

あくまで冷静にならなくてはならない状況で、それができない。

「彼女がさ…ついこの間、独断で僕を殺しに来たよ。」

でもね、彼女は守護人でしょ。

今は護門徒ではないけど、いずれは護門徒になる僕に殺意を向け
た…

それがどういふことか分かる？」

俺は何も答えられなかった。

「主人に対する反逆行為だよね。だから…」

その先を話そうとした瞬間、俺の体は何故か勝手に動いていた。

それがどうしてかは分からなかった。

しかし俺は頭が動くよりも先に体が動いていたのだ。

拳を固めてリオの顔面を殴りつけようとした。

ぶんっ…

その拳は空を切っていた。

俺の目の前からリオの姿はなかった。

というよりも俺が目で追うことができなかったのかもしれない。

自らの能力を使うことすらしなかった俺は、リオの先の行動すら
想像できなかった。

まずい…

気付くのが遅すぎた。頭に血が上ったせいでもあったが、そんな言い訳今通用するはずも無い。

はっとしたが、一瞬で空が真っ赤に染まっていた。

「あ…」

体中から血が吹き出すように、皮膚が裂け、肉が切られた感触が後から付いてきた。

熱い…そんな感覚だ。

「油断大敵だよ…僕に背中を見せるなんてね。だが、これで全て終わりだよ…」

ゆっくりと俺は地面に倒れた。

こんな形で…無力にも自分の一生を終えてしまうのか？

俺の四肢は当然動かすことができなかった。

反撃の声すら出ない。

「話は最後まで聞くべきだ。朱里は、僕が預かっている…」

心配するな。彼女には傷一つ付けていない。

いずれ僕の守護人になるのだからね…それにはあと一人の後継者柴木立花を殺せば完遂される」

ふふふと笑いながら俺の事を見下していた。俺の意識は薄れていく一方だった。

「そうだ、もう一つ…君のお父さんを忘れていた。

彼はどうやら国外逃亡をしたみたいだ。

だからすぐにでも立花を殺して後を追うさ…君はこのままここで朽ち果てるがいい…」

自分の無能さをかみ締めながらね」

「う…あ…」

俺は手を必死に伸ばしたが、そこにはもう柊リオの姿はなかった。

俺に止めも刺さずに、放置した形を取ったのだ。

ちくしょう…俺は…こんなにも無力だったのかよ…

視界が徐々にぼやけていく。

奴の言つとおりには俺はこのまま朽ち果てるのだろうか…

体の力が抜けて、そのまま眠るように目を瞑ってしまった。

30話

「おい…おい…」

遠くから声が聞こえてくる。

俺は…どうなったんだ？死んだのか？

まるで水の中に沈んだように意識がゆらゆらと揺らめいていた。

そして声のする方を目指して必死に浮かび上がろうとしていた。

俺の目は自然と開かれた。

そこには立花の姿があった。

「え？…」

俺は思わず辺りを見回した。

そこで分かったことは、ここは立花の部屋のベッドの上だということだ。

何故ここに…

それに俺は死んだのではないのか？

ふわふわするベッドの中で俺は思わず死後の世界の事を考えてしまった。

「気が付いたか？」

立花が俺の顔を覗き込むように迫ってきた。

「何でお前が…」

「何でって…それはお前を助けたからだろ？おかしな奴だな…」

「いや…俺は…死んだと思ってたから」

「死んだ？おかしな奴だな。お前の体を見ても…死ぬような状態ではないぞ？」

「え？」

俺は体を起こすと、自らの肉体を見回した。

おかしい…

あの時確かに切り刻まれたはずだ。

血も体中から吹き出したし、指一つまともに動かせなかった。

それが…ほとんど傷が塞がっていて、体も動いている……どういうことだ？

「お前が俺を見つけてからどのくらい経っている？」

俺は何日も自分が眠ってしまっていたのではないかと思ひ聞いて

みた。

「七時間と行ったところだ。私があそこに駆けつけたら、お前が倒れていたのだ。」

血まみれになつてな…しかし血まみれの割には傷が浅かったのだからここに連れてきたつて訳だ」

浅い？そんなはずはないと思つたが、そこは話さなかつた。

「柊リオにやられたんだな？」

「ああ…完膚なきまでに叩きのめされたよ。俺の甘さをとことん教えられた…」

「今更何を言っている…甘いのはずっとだろ？」

立花は痛いところを突いてきた。

「それで？リオの力の秘密は分かつたのか？」

「済まない。一瞬の出来事でそれどころではなかつた…」

「お前な！二度も手合わせをしていて、相手の能力が分からないよ。うではこの先戦つても無駄だぞ？」

それ、分かつてんのか？」

「くっ…」

奥歯を噛み締めながらぐっと堪えた。立花が話していることは正論だ。

「まあ、いい。それよりもお前の体だ。何故アレだけの血を流していないながら、この程度で済んでいるのが不思議だ…それに…」

そこまで言いかけて、立花は何かに反応した。

「どうした？」

「誰かがこの屋敷の敷地内に入り込んだ。一人か…いや…もっとだ…」

それを聞いてから、俺も人の気配を微かに感じていた。

「まさか、柊リオが殺しに来たのか？」

「その可能性もなきにしろあらずだ」

「やれやれ…」

俺は半病人だったが、重たい体を無理やり引き起こした。

しかし立花はそれを止めた。

「私一人でやる…この敷地内は私のものだ」

「しかし…」

「病人は寝てる…」

立花はそう言って、周囲の気配を細かく掴もうとしていた。

その矢先に、窓ガラスが音を立てて割れた。

「う…」

俺は思わずベッドから跳ね起きてしまった。

そして何が起こったのか確認するかのよう飛び込んできたものを見た。

飛び込んだ物は何か分からなかったが、

三体の黒い影は立花を目指して鋭い武器を手にして襲いかかってきた。

しかし立花はすぐに空間移動をしていた。

しかも手にはテーブルの上に置いていたペーパーナイフを握り締めていた。

立花の姿を一瞬で見失った三体の影はうろたえながら辺りを見回したが、

その隙に立花は空間移動を済まし、背後に現れると躊躇することもなく無駄な動きを一切排除して、

次々と首や心臓といった急所を刺して倒してしまった。

どさどさつと大きなものが崩れるように床に三人の遺体が転がった。

そして床は真っ赤に染まっていた。

「ちっ…私の部屋が…汚れてしまったな」

そんなこと気にしている場合かよ。

俺はそう思ったが、こいつらが何者なのかを知るのが先だった。

そのことを考えている間に殺気がどんどん増していくのを感じた。

「こいつらだけじゃないのか？」

「そのようだ…この屋敷自体を取り囲んでいるな。それに数も半端じゃない」

「こいつら…何者だ？」

すると立花は死んだ奴らの体に近づいて、情報を集めようとした。

暗くてよく見えなかったそいつらの姿はまるでカルト教団のような格好をしていた。

全身黒のローブに身を包んで、顔までご丁寧に隠していた。

立花はそいつらの着ているものを脱がせて不振なところは無いか調べた。

すると何かに気が付いた。

「こいつら…」

「何か分かったのか？」

俺はたまらずに聞いた。

「神徒協会の信者だ…こいつらの見につけている貴金属に神徒の紋章が入っている」

立花の調べている奴の指輪には見たことのないマークが入っていた。

「しかし何故…信者が私を殺しにくる？」

柊リオが来るのならまだしも…そう言った感じだった。

「時間がないぞ…このままでは取り囲まれて集団リンチだ…」

殺気が迫ってくる間隔は次第に短くなっているのが分かったからだ。

標的が立花だったとしても、俺もただでは済まないだろう…

「お前の空間移動の範囲はどうなんだ？屋敷の敷地内から出ればそれで…」

案を出してみたが一蹴された。

「無理だ。お前も知っているのだろうか？私の空間移動の範囲は狭いということ…」

「む…しかしそれを繰り返せば、ここから逃げられるだろうか？」

「万が一体を掴まれてしまえば、空間移動は出来ない…
たくさんの人数の前では私の能力は無意味になってしまっただ。
それにな…何度も連続して使えるほど私も万人ではない…」

ここで立花の能力の弱点が露呈してしまった。

だが、そんなことを話している場合ではなかった。

俺にも打開策は上手く浮かばなかったが、これしかないと思い提案した。

「俺が窓から外へ出て敵をかく乱する…」

その間にお前はこいつらの服を着て、奴らの中に紛れる…」

そうすれば、数回だとしても空間移動もしやすいだろ？」

「馬鹿か？お前はどうなるんだ？私より甘いお前が無事で済むわけないだろ？」

「これしかないだろうが！それとも逃げるための隠し部屋でもあるのかよ！」

「いや…」

「早くしろ！来るぞ」

俺は立花の意見を聞き入れることをせず、自らの計画を押し進めていた。

立花は言われるがままに死んだ奴らの服を身に纏った。

俺は武器になるものを探し、

部屋に落ちていた服をかけるための三十センチ程度の壊れたポールを見つけるとすぐに拾い上げた。

奴らがドアを破るまでに一分と掛からないだろう。

その間に立花は服を着て、服を脱がされた遺体をベッドの下に隠した。

いよいよ行動を移す時がきた。

31話

俺は全身が未だに裂けるように痛かったが、数時間前に比べればいくらかましだった。

窓枠に足を掛けると、意を決して芝生の敷き詰めてある庭に着地した。

地面から二階までの高さは五メートルはあったが、芝生が良いクッションとなった。

足を折ることも無くそのまま立ち上がることが出来た。

「さて…」

立ち上がってすぐに周囲を見回すと、そこには同じ格好をした人、人の山だ。

どれだけ人を集めたんだ。それにこいつら、生气つてものが感じられない。

まるで三条織斗に操られた時のクラスメイトと同じだ。

その一人ひとりの手にはダガーが握られていた。

西洋の武器の一つで、短剣のようなものだが、殺傷能力はかなりのものだ。

それに比べて俺は鉄の棒一本。しかしこれはこれで、良いところ

がある。

「こいつも…殺せ！」

「おお！」

「おお！」

群集はまるで獲物を狙うハイエナやはげたかのように俺に群がってきた。

俺は意識を集中させた。痛みの刺激で先読みの能力は頭の中をどンドンクリアにしていった。

群集の動きが手に取るように分かる。そしてその隙間も全て把握した。

三十人近くいたそいつらは群集という唯一の武器を弱点にも変えていた。

標的の俺はたった一人…しかし同時に襲い掛かれば同士討ちもあり得るのだ。

俺はそれを全て見切った。

立花との戦いでよりクリアに未来が見えるようになり、体も動くようになっていた。

それは手負いという状態が自らの能力を高めているのかもしれない。

勢いよく人の群れに飛び込むと、短い鉄パイプで絶命を避けるように次々と気絶させていった。

前にいた人間が数名倒されたのを見るなり、群集心理には乱れが生じていた。

このまま固まるのはまずいと…それから俺を取り囲むように動き始めた。

しかしそれこそ俺の思う壺だ。

隙間が出来れば出来るほど、俺の動きは本領発揮となる。

全員が輪の動きになる前にその形を崩しに行った。

五人…十人…気が付くと、群集の半分が倒れていた。

「はは…ははは…」

俺はハイになっていたのかもしれない。刃がまるで俺をかする気がしなかった。

同時に行われる数人の攻撃をまるで滑らすかのようにかわして、最小限の攻撃で倒していた。

鉄パイプで殴ると腕はびりびりと痺れたが、気になどしていられない。

そして体からは出血もしてきた。

残り数人…

立花は逃げ切れたのだろうか？早くしないと援軍が押し寄せてくる。

そう思っていると、屋敷から轟音が響き渡った。

それを聞いたその場の全員の動きが思わず止まってしまった。

それは破壊音というよりも爆発音に近かった。

俺は立花の身に何か起こったと思い爆煙の方をじっと見ていた。

すると…そこには誰かが立花の体を支えるように出てきた。

「あれは…」

遠くだったのと煙が大きく立ち上がっていたせいもありよく見えなかった。

立花の体を引きずる者が男か女か、そして敵かも分からなかった。

その場にいた残党は我に返って俺に向かって襲い掛かったが、さっきと同じように触れさせることなく一瞬で動きを封じた。

そして俺はそのまま立花の元へと走っていった。

十数メートルを一気に駆け抜け、立花を掴んでいる人影に向かって突っ込んだ。

躊躇うな、こいつは恐らく敵だ。

それなら…

そう思いながら手にした武器で、人影に襲い掛かった。

しかし俺の体は何故か宙を舞っていた。

「うあ？」

そして受身も取れないまま背中から地面へと叩きつけられた。

背中が痛くて、呼吸もままならなかった。

「慌てるな…よく見る。馬鹿！」

すると背後から聞き慣れた声がした。

俺はひっくり返ったままの状態でその声の主の方を見た。

そこには、三ヶ月前に俺たちの前から姿を消したあの豪腕で自己中心的な女教師、冬香の姿があった。

「え？」

立花の手を引くその姿は立花同様に神徒協会の奴らが着ていた服を着ていた。

恐らく俺と同じ発想だったのだろう。

「冬香…お前…何で…」

慌てて起き上がると、冬香の姿をまじまじと見た。

「海…」

冬香はにっこりと俺に微笑みかけると、俺の顔面に拳を叩き込んだ。

予想もつかない俺は、なす術もなく再び地面に叩きつけられた。

「何すんだよ！」

「自業自得だ。私のことを呼び捨てで、しかもお前って言ったからだ！」

「それだけの理由かよ…」

「何か不満でも？」

冬香の背後には明らかに殺意の炎が見えていた。それだけで俺は完全に萎縮してしまった。

「いえ…ない…です」

「分かればいい」

それから事情を説明するようにならされたが、冬香も何から話しているのか困惑していた。

そして連れ出されていた立花も気を失っていた。

「完結に今の状況を話すと、あれだ、私がここに乗り込んで、神徒協会の奴らを壊滅させた…」

「それは見れば分かります。どうして立花を助け出してるんですか？」

32話

「それは…その…成り行きでなあ…たまたまだ」

「嘘でしょ。他の奴らと同じ格好しているのに敵とそうでない者を区別するのは難しいです。」

「始めからどういう人物か知らない」と

「お前…鋭いな。まあ、その話は後にするとして、私は八鬼の仕事でここに来たんだ。」

我々の目の上のたんこぶのような存在の神徒協会の連中が日本に乗り込む情報も得ていたし、

不振な動きが多いのでな。お前の父親を探しているって話も聞いていた。

柊リ才だったか。あいつを使って、神徒協会の脅威になる人物を排除しようとしている…

まずはこの家の家主である柴木立花。

お前も知っていると思うが、彼女は独自のルートを使って内部事情を知りすぎた…

隠し事の大好きな連中だから気に食わなかったのだろうな。

資金援助はたっぷりしてもらったから、もういらないと判断されたに違いない」

「そんな…こいつ…護門徒後継者になろうと頑張っていたのに」

「そして海、お前は、父親共々神徒協会の方針に従うことは無いだろうと判断されたのだ。」

あくまで今回の後継者争いは出来レースだったってことだ。

柊リ才は最初から正統な後継者として選ばれていた。

後は目障りな奴らを後継者争いという形で集めただけだ。
そしてそれが同時にリオへの試練にもなっていたのかもしれない
ってことだ」

「そこに何で八鬼が絡んでくるんです？」

「それは…むかつくからだろ？」

「いやいや…それはあなたの感情だから。」

「まあ、それもあるが。神徒協会の動きがおかしな方向に進んでい
ることは事実なんだ。」

「この国に多発している異常犯罪の元凶は奴らの研究の末路とも言
われている」

「どうということですか？」

「あいつらの表向きは、人々を救う聖職者だ。しかし裏の顔は世界
を変える改革者らしい。」

「それは、長年に渡った独自の実験やら異能の力から生み出された
毒が照明してくれた。」

「その毒は人の心を蝕み、神経を犯し、心を支配した。」

「それはもう人ではない。」

「尾上みゆの話していた壊疽者というものに近い…」

「そして私らはそいつらを何度となく駆除してきたんだ。」

「この国のために…何度も何度も…しかし今、その元凶が神徒協会
にあると知ったらどう思う？」

「それは憎くて仕方がないに決まっている。だから冬香の表情は怒
りでいっぱいだった。」

「だから…八鬼は奴らを国の脅威と判断し、遂に全面戦争をする
ことにしたのだ…」

長い因縁にけりをつけるためにも」

以前冬香は話していた。

神徒協会は古くからこの国に根付いていた八鬼の存在を排除する
かのように侵略してきた。

まずは国を仕切る権力者に門の脅威と対処法を詳しく、細かく話
し、八鬼以上に親身になって付き合った。

そんな彼らの根回しは完璧だった。

八鬼とはまるで対照的だったので、それを受け入れる輩の方が多
いに決まっていた。

元々、世間からつまはじきになっていた人間の集団が八鬼なのだ
からそれは自然の流れなのだ。

社交的な根回しなど出来るはずもない、人嫌いの集団には汚い仕
事ばかりが回ってきたのだ。

しかしそのことを八鬼は不満にも感じながらも国のためだと思い
献身的に働いた。

そして冬香の両親もそんな中で命を落としていたのだ。

だからこそ、神徒協会が国を脅かす存在を生み出しているという

事実を知った今、
純粋な怒りしか湧き上がらないだろう。

それは冬香に限ったことではない。八鬼全員の考えがおそらくそう
うだ。

「それで…神徒協会は何をしようとしているんです？」

怪しげな研究も然り、その目的ってものがはっきりしないんです
「よ」

「それは私も同意見だ。だが、我々の情報だけでは神徒の上層部ま
で探ることは不可能。

その壁にいつもぶつかっていた…

だが、全面戦争を仕掛ける今ならその事実も分かるかもしれない」

「そこに親父も…」

「まあ、絡んでいることは確かだろうな」

冬香は何か知っていそうだったが、それ以上は父親のことは教え
てくれなかった。

「なあ、親父のことを知っているなら少しは教えてくれよ！

俺は…その…何も知らないんだ。

いや、知らなかったんだ…だから知りたいたんだ！」

俺は今こそ知る機会だと思いき冬香に迫っていった。

「お前の親父が前任の護門徒だったのは知っているな？」

「ああ…」

「彼は護門徒至上、唯一異能の力を持たない者だったらしい。異能とはお前も私も持っている特異な能力だが、彼はそんなものを持たない普通の人間だったのだ。」

「そのせいもあってか、どんな人間にも友好的で好かれる存在でもあった…」

「しかしそれとは真逆に戦いにおいては非情以外の何物でもなかったらしい」

「非情…」

その言葉だけでいろいろなことを想像させられてしまう。

「彼には隙というものが存在しないらしい。」

そして敵意を自分に向けるもの、人々の脅威になる者を決して許さなかった。

「だから彼を襲った全員が命を奪われた…例外なくな」

マジか…

俺の親父はそんなに強かったのかというのと同時に襲った敵を全て殺していることに驚きを隠せなかった。

「あんなに優しい父親だったのに…」

そんな思い出だけが俺の頭の中を駆け巡っていた。

「三年前に突然姿を消したようだが、その理由は未だに不明らしい。しかし神徒協会にも我々にも自らの痕跡を残さないように潜んで

いたとは、よほどの人間だ」

冬香は感心していた。

「それに八鬼とお前の父親とは付き合いがなかった訳ではないらしい。

これは聞いた話だが、昔八鬼を尋ねた月夜灯に三條織斗は興味本位で攻撃を仕掛けてみたらしい。

しかし彼はそれを軽くあしらって実力差を見せ付けたらしい……」

そう言えば、織斗本人も初めて会ったときに俺を見て親父の話をしていた。

織斗自身が自ら敗北を認めるとはよほどの実力者ということになる。

俺にはそのことが想像できなかった。

「純粋に闘争において、彼を凌ぐ者はいないのかも……」

だからお前も彼の息子だということを誇りに思ったほうがいいのかな？」

冬香は親父のことを高く評価していたが、俺にはいまいち実感が湧かないし分からない。

だから自らの気持ちは素直に冬香の意見には従えなかった。

「俺は…俺だ。親父は関係ない…です」

「まあ…そういうもんだよね。私も同意見」

「話戻していいですか？なぜ、立花のこと知ってるんですか？」

俺は冬香が立花を支えている姿を思い出してそう言った。

すると冬香も頭を掻きながら話していいものかといった感じで悩んでいた。

「うーん。その…何だ？簡潔に話すとだな。その…妹…だ」

あの冬香の口からは想定もしていない出来事が飛び出した。

俺もすぐには反応できない。

33話

しばらく間を置いてから聞いた。

「え？それは…その…どういった関係の妹さんですか？」

「どういったって…お前には他の意味の妹が存在するのか？
それは、パパっていう意味を別の意味で解釈することと同じなの
か！おい！どうなんだよ！」

冬香は俺の胸倉を掴んで軽がると持ち上げていた。

明らかに目が怖い。これは殺される。

「ち…違います。突然のことで、テンパったんですって…」

「ちっ…」

冬香は舌打ちをしながら俺を地面に落とした。

「なんだって、あんたの妹が…その八鬼ではなく、神徒協会に入っ
ているんだよ。」

しかも苗字も違うし…まあ、変なところは似てるけど…」

「死にたいのか！貴様は…」

再び俺の胸倉を掴んで、拳を握っていた。

すると背後から声が聞こえてきた。

「そのことには私から話そうか？」

声の主は立花だった。目を覚まして少しふらつきながらこちらに近づいてきた。

表情からは近寄りがたいオーラを出していた。

「大丈夫か？」

心配して声を掛けたが、無視された。

「答える！何で今更私の前に現れた！しかも善人面して私のことまで助けて…」

立花には俺の姿など見えていなかった。冬香に突然食って掛かっていった。

「おい…」

俺はどうしていいのか分からなかった。

しかし立花の怒りは怒涛のように続いた。

「お前は私の事を見捨てたはずだ…それなのに…」

何をする気だと重いながら、じっと立花を見つめると俺の脳裏には未来の姿が不意に見えた。

まずい…

未来を垣間見た俺には嫌な予感がした。

立花は冬香を殺す気だ。

しかし止めに入る前に立花は空間移動をして冬香の背後を取っていた。

その手にはナイフをしっかりと握っていた。

「りっ…」

名前を叫ぼうとした時には更に有り得ない光景が。

冬香は振り返ることなく立花のナイフを握る手を掴んだ。

そしてそのまま振り返ると拳を腹部に思い切り叩き込み、地面に崩れ落とした。

「何で…くそ！…私は…あなたにも勝てないのか？」

腹部を押さえながら、立花は再び気を失った。

眠るように横になり、周囲の倒れている者たちと同じような風景に溶け込んでしまった。

そのままではまずいので、俺たちは場所を変えた。

俺は立花を背中に乗せて近くの空き地まで運んだ。

以外にもその体の小ささを感じながら複雑な心境のまま立花の温もりを肌で感じていた。

空き地は草むらになっていて、その周りには建物がぼつぼつと建っていたが、民家ではなかったので明かりも消えていた。

「説明が必要だな…」

冬香はため息をつきながら立花をそつと置いている俺の方を見た。

「はい…できればお願いします」

「なら…」

そして冬香は昔を思い出すかのように遠くを見ながら静かに話した。

「今から十三年前のことだ。私が十歳…そして立花が三歳の頃に両親が死んだ。

それは国を守るといふ使命の元での出来事だったから仕方がなかったのかもしれない…

あれは例の門が開いた影響での出来事だったのかもしれないとも言われている」

「十三年前…」

そのことを聞いて俺は重さんの言葉を思い出した。

三年前の隕石騒動と十三年前の騒動が似ているということと話していた。

ということ、十三年前にも門が開きかけ、そこから壞疽者のよ
うな者たちが飛び出さしたのだ…

それから国を守るために冬香の両親は命を落としたのかもしれない。

つとまあ、勝手な想像だがその可能性もあったと思っていた。

「両親を失ってからの生活はそんなに困らなかったが、一つだけ問題があったのだ。」

それは、両親と叔父が入っていた組織八鬼だ。

今までの組織形態を崩すわけにもいかずに、強引ではあったが、私が後継者として入ることになったのだ。

妹はまだ小さかったし、こんな殺伐とした世界には私だけで十分だとも思った。

だから私はあいつを八鬼に入れないことを条件にして異例とも言える裏、表八鬼に籍を置くことにしたのだ。

そして妹とは絶縁する形で養子に出した…」

「それは…先生の判断で？」

「いや…八鬼の頭目の方がいいだろうってことでだ。」

だから…私には選択の余地はなかった。

しかしそれでも妹にとってはいいかとも思ったのだ。」

冬香なりの配慮というか、愛情がそこには見えだが、立花にはそれが通じていないようだ。

「立花は…その…納得していないようですが」

「私も十三年振りに会ったんだ…思い描いた通りの妹がそこにいるなど期待はしていなかったよ。」

「それよりも直情的で安心した」

「何ですか？」

「はっきりと物事を口に出るって言うのは、私に似てるってことだ…」

「それに包み隠されて言いたいことも言えないような人物だったらもっと困る…」

「確かに…先生の性格だったらそうかもしれないですね」

「お前は変なところではっきりと物事を言い過ぎるんだよ！少しは空気を読め！」

34話

軽く頭を叩かれたが、冬香はそのまま話を続けた。

「立花が養子に行った先は柴木家と言って貿易商を営む名家だが、そこは私も知らなかったのだが、神徒協会との繋がりがあったのだ。だ。

財閥やら、貴族、名家と呼ばれる金持ちのほとんどが神徒協会との繋がりがあり、援助をしたり活動の協力をしていた…それは数百年年も前から行われていたらしい」

「政界や財界との癒着ってことですか…それにしてもよりによって敵対する組織に入るなんて…」

「私もそんなこと夢にも思わなかった。しかしこうやって考えると運命なのかもな。実の妹とも戦って答えを出させられるとはな。

だから言い訳もする気はない」

「それで…どうやって立花を助けたんです？あんな状態でよく区別がつかましたね」

「それか…私も神徒の連中がこの屋敷を取り囲んだ時にここに来てな…」

奴らの服を拝借して屋敷内に乗り込んだら、あの馬鹿がすぐに際立つ行動をしたからばれて、大暴れをしたんだよ。

それでそのまま私はその場にいた連中を例外なく排除したって訳だ…」

お前なら私の能力が分かるから、どうやったかは想像がつかだろ？」

俺の方を見る冬香の目は怖かった。冬香の実力はいわれるまでもなく知っている。

だから体もそれに反応していた。

「新城家は空間干渉の能力が卓越している系譜だが、

あいつもまさか空間転移なんて真似ができるとは思わなかったよ…正直その目で初めて見たときは驚いた。

しかし未熟な奴の使う技には癖がどうしても出てしまう…

二度も三度も見せられれば目に見えなくとも現れる場所は特定できる」

「あいつの能力はこれが限界なんですか？」

俺は少し気の毒に思って聞いてみた。すると冬香はあっさりと答えてくれた。

「いや…もしもあいつが八鬼にいたなら私に次ぐ使い手になっているかもしれない。

あいつは独学で自らの能力を伸ばしたんだろう。

私みたいに親の教えが受けられなかった分だけ能力に無駄が多いのさ。

それさえなければもっと伸びるはず…」

「先生は立花に対してこれからどうするんですか？」

「ん…ああ…とりあえずは何も考えていない。」

だって…私だっていきなりお姉さんだよって涙の再会をするほど人間できていないし、

あいつは私のことを憎んでいるからな…それならそのままでもいいさ。

ありきたりの言葉かもしれないが、時間が必要ってことだ。

それよりもお前はこれからどうするんだ？

聞いた話では終リオにぼろ負けだったそうじゃないか。

奴はお前の事を死んだと思っっているらしいがな…」

嫌なことを思い出させてくれる。

しかしそれは事実でそこから目を背けることはできない。

だから俺ははっきりと答えた。

「奴には、もう一度戦いを挑みますよ。例え殺されることになって
も…」

今までそんなこと恥ずかしくて言えなかったが、直情的に素直に話した。

朱里が捕らわれてしまったのは俺のせいでもある…

だから、俺の命に代えてもあいつだけは救い出さなくてはなら
ない。

終リオの笑い顔が今でも脳裏に焼きついている。それを思い出す
だけで俺は無性に腹が立った。

「へえ…随分と変わったな。お前も…少しは男っぽくなったな。

「今までのような甘さが嘘のようだ」

冬香は感心していたが、逆に俺の心配をするのよりも自分の心配もしてほしかった。

立花との修復をどうするのだろうか。

このままではすれ違いのままになってしまふ。

「しかし不思議なことはお前の体だ…」

お前の戦っていた場所にも行ってみたが、状況から見ても瀕死の重傷つてとこが定石だったが、

それを覆すかのように数時間で動いている。お前の能力は先を読むだけではないのか？」

「それは…その…俺自身も全く分からないですよ。

あの時、死んだ！という感覚がありました。それが気付いたらこんなことになっていて…」

「立花が何かしたとは考えづらい。

だから、お前自身の能力には間違いないのだ。それを知ることが柎リオとの戦いに役立つかもしれないな。

急速の再生か…まるで…尾上みゆのようだ」

「俺とあいつは違いますよ。きっと運が良かったのかもしれない」

「そうだ…みゆはどうしている？あいつも部外者ではないだろう。それならば何らかのアクションを起こしてもおかしくはないのだがなあ」

冬香はそう話したが、俺は彼女をできるだけ巻き込みたくはなかつた。

35話

今までの生き方があまりにも殺伐として、まるで機械のように扱われていた。

だから、そんな彼女が日常の中に溶け込んでいく姿は嬉しくて仕方なかった。

「みゆは…壊疽者という者を滅ぼす目的を果たすためだけに生きてきたんです。」

だから、それが終わったら…自由になってもいいんじゃないでしょうか。

その目的をほぼ完遂しつつあるとは話していたんで、今回の件はそつとしておきましょうよ」「

「ふーん…やさしいところもあるじゃないか。」

お前の話すことにも一理ある。

ただな、これだけは話しておく…あいつは門の中から来た人間だ。もしかしたら門の中の世界に帰ると話すかもしれないぞ、

その上で神徒協会と絡むことになるかもしれない。それでもお前は納得できるか？」

冬香は先を見越してこの話をしているが、俺もみゆのことを応援したかった。だから彼女の思うままにさせたい。

「彼女が…それを望むのなら…」

「いいだろう。しかしもしもそれが原因で、敵側にあいつが回ったとしたら…」

殺すことも視野に入れておけよ…」

幾多の修羅場を乗り越えた冬香の言葉は重みがあった。

俺は、正直みゆとやりあうことなどないと思っていたのかもしれない。

だから上辺だけの返事をしてしまった。

「なら、私は行くか…こいつが目覚めれば面倒だからな。

お前からは適当に話しておいてくれ…共同戦線を張る日もそうは遠くないと思うからな」

「分かりました。俺もすぐに柊リオを追います…」

それから冬香は俺の前から去ったが、

俺もこのままでは立花が風邪を引いてしまうと思い俺のアパートまで運んだ。

「さて…報告を聞こうか」

神徒協会本部のある城の中には柊リオと朱里、そして三賢人が大広間に集まっていた。

まるで朗報が当たり前といったような口ぶりで柊リオに三人は視線を集中させた。

「あらから片付いたよ。」

護門徒後継者の一人は殺したし、残りの一人はあんたたちが送り込んだ増援の信者の手で殺されたでしょ。

あとは月夜灯だけだけど…彼は…こちらに向かっているって情報があつたよ。

だったら手間も省けるでしょ。」

灯がこちらに向かっていると聞いて彼らは顔を曇らせた。

「こちらにだと？」

「あいつめ…何を考えている」

そんな様子を見たリオはどうして？といった様子だった。

「そんなに凄いの？だって息子は全然手ごたえがなくてつまらなかつたよ。」

それに年は四十を越えてるって言うし…僕達の敵じゃないでしょ」

リオは軽々しく話したが、三賢人は穏やかではなかった。

「甘く見るな！」

「あいつは…護門徒史上類をみないぐらいの逸材なのだ…性格に問題さげなければ、今も働いて欲しいぐらいのものだ」

「へ…言うねーでも、普通の人間なんだろう？」

あんたらの遺伝子を受け継がなかったものが…何で？」

「人間の本来の力を純粹に持つ者だからだ。いや…生物といった方がいいか…」

「生物？」

「ああ…お前も分かるはずだ…我々は完全を求めすぎた不完全な人間だということを」

「へー…自虐的じゃない…それを先に言ったら敗北宣言だよ」

「だからといって、彼には我々を殺すことも出来ない…」

しかし計画を妨げられるのだけは防がなくてはならないのだ」

「ああ…世界を…全てをやり直すためにはこれしかないのだからな…」

「我々の願いの叶うまで…」

リオには何のことだか理解できずに、相変わらずにあっけらかんとした態度で聞き流していた。

「これからの事を僕は僕で楽しむさ…さあ、行くつか…朱里」

すると側にいた朱里はリオに大人しく従って付いていった。

36話

俺の体は丸一日で全快していた。

柊リオに付けられた傷は完全に消えていたのだ。

自分の体がどうしてこんな治癒能力を持っていたのか分からない。

以前、京に付けられた深手の傷も朱里からもらった薬ですぐに治ったが、

あれは自分の治癒力も関係していたのだろうか？

俺はいろいろ考えながら、眠っている立花の方を見た。

こいつが、あの新城冬香の妹とはな…

ここ最近の立花はぼろぼろだ。俺に戦いを挑み敗れ、みゆにも敗れ、そして最後は実の姉に敗れた。

これでは自らの力を疑いたくもなる。

だけど、俺も立花とそう大差はないのだ。

あの柊リオに手も足も出さずことなく、瀕死の重傷を負わされ、よりによって朱里を連れ去られてしまった。

何のための能力だと、自分を責めなくなる。

真希を救えず、京を救えず、このまま朱里まで救えなかったら…

俺の存在する意味などない。

俺は膝に頭をくっつけて悩んでいた。

「なあ…」

立花が目を覚まして俺の方を見ていた。

「あ…気がついたか？その…屋敷はあんなだし、とりあえず俺の家に運んだが」

「そうか…」

立花はベットから起き上がり、窓の方へ向かって歩いていた。

時刻は朝の七時、まだ外は薄暗くちらちらと雪が降っていた。

俺たちの心そのものをあらわしているかのような配色だな。

「立花…屋敷の中で何があった？冬香からは取り乱して素性が発覚したと言っていたが」

「別に…大したことではない。それにあいつに助けてもらったというのが、ムカつく」

「そう言うな。冬香だって、お前のこと心配していた…」

悪いかもしれないがお前の生い立ちも聞いたよ。

分からないでもないが…その…どうにかならないのか？」

「どうにもならない。あいつは嫌いだからな。それに私は神徒協会

の人間だ。

八鬼と馴れ合うつもりはない」

「お前、まだ自分の神徒協会の人間だと言うのか？裏切られたらどうが！」

「それは分かってる…神徒にも…未練はないさ。ただ…あそこが…私の唯一の居場所だったからな」

なるほど、簡単には割り切れないってことか…

しかし俺は立花にはあそこには戻って欲しくなかった。

「なら、これからお前はどつする？ただここで姿を隠しているか？」

「私がそんな人間だと思うか？」

「いや…その…」

「私だつてこのままは嫌だ。神徒協会本部にでも行つて確かめるさ。私を襲つた理由をな」

「立花：お前は神徒協会の本部がある場所は分かるのか？」

「聞いたただけだからそこにあるかは分からないがな。でも行つてみる価値はある」

「そこに朱里と柊リオがいる可能性が高いんだ…だから、俺もそこに連れて行つてくれないか？」

「朱里が？ちつ…リオに先を越されたか。」

私が所有したかったのに…そう言えばみゆはどうした？」

「それは俺も聞きたい。しばらく姿を見ないんだ。ひよつとしたら出て行ったのかもな」

みゆは根無し草だ。一箇所のところにずっと留まるとも思えなかった。

だから俺の心のどこかにはいずれいなくなるのではないか、そんな気持ちに付きまどっていた。

「それよりも、俺らは俺らのやるべきことをしなくては…」

「ああ。そうだな」

俺らはこうして、神徒協会の本部があると思われる北欧を目指すことになった。

37話

私は八鬼の総本部に帰ってきた。

そこには表、裏八鬼にいる全員の人間が険しい顔を並べていた。

「さて、冬香が戻ったところで、定期集会を始めようか」

頭目の一声で全員の気持ちが一体化した。

「議論するまでもないだろう。」

長い歴史に渡って繰り返された神徒協会の因縁を今断ち切るんだらう?」

「奴らが暴挙に出ようとするとするなら、それは止めなくてはな…」

「それに…我々の先祖の任務を横取りし、我が物顔で国の手綱を握るような奴らには我慢の限界だったからな」

「門を護るといふ護門徒やらの候補者でも、今正に揉めているらしいからな…」

全く…灯が護門徒の頃が懐かしく思える」

「息子が後を継ぐ話だが、どうなっているんだ?」

「どうも…そこには始めから決まっていたシナリオが用意されていた可能性があるらしい」

「それはどんな?」

「神徒が用意した候補者が月夜親子を抹殺するために仕組まれたものだと…」

「なるほど、同じ土俵に上げて殺すってことが…」

神徒協会の中での殺人は罪にも問われない。だが、月夜灯は生きていたのか？」

「冬香の報告では、彼の痕跡は行く先々で発見された。

凶悪犯罪者と呼ばれた者が、我々よりも先に再起不能にされているのだからな。

そんな技を持っているとしたら、彼しか他にあるまい……」

「そうなのか？ 頭目？」

紅蓮は黙って彼らのやり取りを聞いていたが、そこで口を開くことを余儀なくされた。

「ああ…私の良く知っている痕跡を残しているからな。だが、彼は彼なりに考えて動いているはずだ…姿をくらまして三年。死んだとも思わせていたが、影で動いていた。ということは、きつと何かをしようとしている。彼は絶対に無意味な行動をしないからな」

「そこまで彼を買っているのは分からないでもないが、我々を陥れようとは考えられないのか？」

元々神徒協会側の人間だったのだ。それを急に……」

その言葉に紅蓮はすぐに反応した。

「黙れ…彼の事を悪く言うのは許さない」

紅蓮はぎろりと発言者を睨んだ。すると、その男はそれ以上何も話せなくなった。

「今、我々がやらなくてはならないことは、一つだ」

「ええ…神徒協会を潰すことよ」

「それは、分かっている。

だが、具体的にどうしようと言つのだ？

策もなしに向かつていつても崩壊するよつな組織でもあるまい」

「心配するな。そう思って、事前に蓮を動かしている」

「蓮…まさか、立木耶甲のせがれか？」

「そうだ。彼は正式なメンバーではないが、いずれは親の後を受け継いで欲しいと思っていた。

そのこともあり、彼にはその試練も兼ねて動いてもらっていた」

「すると…」

「彼には海外に飛んで神徒協会の情報を集めてもらっていた。

そこでだ、神徒協会本部の場所が割れた。

そして更に、神徒協会本部には三賢人と呼ばれる最高幹部と評議会がたまたま顔を出しているらしい。

ここまで話せば分かるだろ？」

「本部そのものを潰せば、神徒協会は崩壊する…」

「その通りだ。下っ端の人間たちなど問題ない。彼らは何も知らないで、三賢人のことを神と同等に扱っているのだからな…その素性を全く知らないままに。だから重役連中を潰してしまえば何も出来ずにただ崩壊するだけだ」

「聞けば、その三賢人とやらも不思議な技を使えるそうだが、その情報はあるのか？」

「残念だがそこは分からない…しかし戦いは情報が全てではない。

「純粋な強者が生き残るものだ。」

「それならば、我々も真つ向から戦って結果を残すしかない」

「それが自然の摂理と言うものか…いいだろう。我々の力を見せてやるぞ」

「ああ…八鬼と呼ばれた異名を教えなくてはな」

「全員の士気は高まり、神徒協会との戦争に向けて全員の気持ちが一致した。」

「それぞれの能力を開放する時が来たのだ。」

「私も久々の大仕事に腕が鳴る。」

「だが、その上で立花とはこの先も会うことになるだろう。」

俺は訳も分からないままに北欧の地に足を踏み入れていた。

それというのも立花のせいだろう。

あいつの用意した自家用機と呼ばれる代物はよくテレビで見る、ハリウッドスターが乗ってくる乗り物だった。

どんな富豪だよ！

と思いつながらも、それに無理やり押し込められると、翌朝には北欧の景色が目の前に広がっていた。

移動時間は九時間と少し、サンタクロースかムーミンが出そうな風景に俺は圧倒されていた。

自然の形がそのまま残りつつも、建ち並ぶ建物はその外観を損ねていない。

まるで、景色と一体化しているようだ。

正直な気持ち感動しながら、俺はちらちら待っている雪を幻想的に感じていた。

「文句を垂れていた割には、嬉しそうじゃないか……」

立花が背後から声を掛けてきた。

「うるさいな。外国なんか…その…初めてだからな…」

「旅行で来ているつもりはないが？」

「知ってる…」

俺も気持ちを引き締めて、これからのことと向き合った。

「町に下りて数日をここで過ごすぞ…」

まずは神徒協会の動きを知らなくてはならないからな」

「町って…お前、この国の言葉話せるのか？」

北欧は三ヶ国語は必要だぞ…それに英語じゃない」

「心配するな。私だって伊達に海外を飛び回っていた訳ではない。語学なんて山のように学んだし、言葉を覚えるのは得意な方だ」

こいつにもこんな特技があったのか。

まあ、親が貿易商を営み、神徒協会の護門徒候補者だったのなら分かる気もする。

勝手に納得するとそのまま俺たちは山の麓の小さな町に向かって歩き出した。

尾上みゆと月夜灯は独自のルートを使って海たちよりも数日早く、

北欧の土地を踏んでいた。

「さて…君には聞きたいことがたくさんあるんだが…いいかな？」

「え？」

みゆと灯は向かい合って座っていた。

ここは小さな町の中にある一軒のバーの中だった。

木製のテーブル、椅子に囲まれ、木々の良い香りのする一角に二人は座っていた。

薄暗い店内には数組の客がいたが、さほど気にもならない様子だった。

夕飯を取りに二人はここへ入ったが、席につくなり灯は、メニューも見ないで

アクアヴィットという酒とマリネや肉の燻製、魚介類のオープン焼きを頼んだ。

恐らくどこの店にでも置いてあるものだと思い、頼んだのだがその予想は的中していた。

何も言わずに店員はそのまま渡すことも出来なかったメニューを持っていた。

常連客なのだろう、そう店員は思ったかもしれない。

すぐにアクアヴィットが灯の元にボトルと共にショットグラスが

置かれた。

「悪いね…お先に…」

そう言うと灯は一気に酒を口の中に流し込んだ。

みゆはその様子をただ黙って見ているだけだった。

「それで…さっきの話の続きをしたいのだが、いいかな？」

「ああ…別に構わない」

「まずは、君の出生だが…門の向こう側から来たってことは…ラス
トチルドレンってことか？」

その言葉がまさか灯から出てくるとは思ってもいなかったので、
みゆは驚きを隠せなかった。

「どうしてそれを？」

「普通ではないってことは、初めて会ったときに感じていた。
神徒協会にも似たような奴がいるからね」

「神徒協会にも？」

「ああ…だから、彼らは門の向こう側の存在を知っているんだ。
それなのにそれを隠して、自分達がこの世界を守っているかのよ
うに思わせている。」

それを知ったときには私もショックでね…だからあの組織を抜け
ようと思ったんだ。

それに、もう一つ…奴らは何か大きなことをしようとしている」

「大きなこと？それは、世界規模のこと？」

「ああ…今までの世界の理を正そうとしているのらしい。

私も大雑把な情報でしか知らないのだが、この星の再生をしようとしていることは確かだ」

「それは…悪いことなの？」

みゆは、いまいちぴんとこない様子で、灯に聞いた。

すると灯は胸ポケットからもぞもぞと煙草を取り出すと、マッチで火を付けた。

「それだけ大掛かりの計画なら、人は何万人と死ぬ可能性もある…無関係の人間の大量殺人を誰が望む？」

煙を大きく吸い込むと一気に吐き出した。

「その可能性がある以上は阻止しなければならぬ…」

灯はそのままグラスに入っていた酒を飲み干した。

みゆは複雑な表情でその話を聞いていた。

「みゆ…君は神徒の人間に会ったらどうする？」

話題を変えてみゆに質問をしてきた。

しかしみゆは、そのことにすぐに答えられなかった。

「君は何かに縛られている…それは契約であり、呪術の類と言ってもいいだろう。」

神徒の奴らならその契約を解くことができるかもしれない私は思うんだ…

そうすれば、君は自由を得られるかもしれない」

「自由？」

「ああ…自分のしたいように行動して、行きたい場所に行くこともできる。」

だが、今の君はその見えない縛りで不自由さを与えられ、心までも開放できなくなっているのではないかな？」

心という言葉でみゆは少し反応を見せた。

「心…」

海と話したり、遊んだりした時のことを思い出し、自らの心がとくん、とくんと動いているのが感じられたのだ。

それは悪い感じではない。寧ろ暖かくてもっと感じていたい感覚だった。

しかしそんな感情もすぐにかき消された。

そう、心の奥底にある深い闇と鎖のような枷によって…

それはいつも自分の深層心理に存在して離れることを許さなかった。

「大丈夫だ…君もいずれは不自由さから解放されるだろう。」

その時が来たら君はもつと笑えるはずだ」

灯は本気でみゆのことを励ましていた。その言葉に嘘は感じられなかった。

それはみゆも分かっていて、灯という人間の大きさを知ることにもなった。

「さて…君の生きる理由も見つかりそうだし、今後の動きについて少し話しておこうか」

話題を変えるように灯がそう言ったが、みゆに断る理由はなかった。ので黙っていた。

灯は一枚の地図を取り出しテーブルの上に広げた。

そして、自分達のいる場所を指差して、神徒協会のある程度予測できる場所も指差して説明した。

「まずは、我々がいる場所だが、神徒協会の本部のある場所から数百キロ離れている。

国境を越えなくてはあそこにはたどり着けない。

だから、ゆっくり三日ぐらいかけて進む…

飛行機や海上からの入国では、すぐに気づかれてしまうからな。

だから、我々は汽車と車を使う…大量の人に紛れていれば神徒の信者共に気付かれることもないだろうからな…」

「信者の数は？」

「おそらく…この国で数万だろう。しかし奴らは本部の側には信者を絶対に置かない」

「それは、なぜ？」

「秘密が漏洩することを防ぐためだ。

事実を知っているのは三賢人のみ、評議会ですらその全貌を掴めていないだろう」

「聞きたいことがある…その神徒協会設立者の三賢人に灯は会ったことがあるのか？」

話しだけ聞けば、一介の人間では会えない雰囲気だ…」

「ふむ…いい質問だ。私はね…彼らに育てられた孤児なんだよ」

「え？」

みゆの反応は当然だった。

「年数で言えばほんの数年だが、私が独り立ちできるまでしばらく

一緒にいたよ。

そして護門徒後継者争いが勃発したときに、それっきりだと言われて私の母国である日本に送られた…

お前が護門徒になって当然だからと言う名目でね。

しかし結果はその通りだった。私は候補者を皆殺しにして地位を築いた。

それから二十二年の間、純粋に任務に没頭していたが、三賢人と会うことはなかった。

だからこそ、三年前に興味本位もあつたが、会うことを試みたんだ…

昔を思い出し、うる覚えの場所をただただあてもなく彷徨つてみた。

期待することもなくただ無限に広がる白い世界を歩き続けてね。

すると、三日目に真つ白の光景に変化が…そう、以前訪れたあの城が目の中に飛び込んだんだ。

あれは、今でも鮮明に覚えている…」

灯は三年前の記憶を今の記憶のようにはつきりと覚えていた。

そしてその目はどこか悲しそうに見えた。

「私は慎重に城の中に入り込んだ。しかしそこには危機感など存在しなかった。

私はそれまでこの組織のことを全く知らなかったから、同業者の家庭訪問程度に感じていたのかもしれない…

しかしそれも三賢人の話す言葉をたまたま聞いて聞いてしまったあの時から、

私は今までの…生き方や考えを変えることになってしまった」

「それが、さっき話していたこと？」

「うん…そうだね。いやー…私もね神徒協会には二十年以上もいたから、すぐに割り切れなかったよ。」

「ずっと親同然に信じていたからさ…でも、このままではまずいからね…」

「この星の未来にも、住んでいるみんなのためにもね。」

「だから、息子には悪いと思ったが姿を晦ましたよ。」

「息子…あなたには子どもがいるの？」

「ああ…私とは違って、やさしい子だよ。人の事をきちんと考えることができる。」

「だから同じような道は歩ませたくはなかった。しかしね…」

「その先の言葉を聞かなくてもみゆには、何となく予想がついていた。」

「皮肉なものだ…遠ざけようと思っていたのに、自然と同じ世界に巻き込まれている感じがする…」

「灯は自分の息子のことを懐かしく思いながらも複雑な心境だった。」

「まあ、私の身の上話はこのぐらいにしておいて、三賢人の話に戻そうか…」

「まず、奴らのことについて知っていることを話しておこう。」

「三賢人の容姿は二十代前半で全て男だ。」

「アルタイル、ベガ、デネブという名前で、君には分からないかもしれないが、」

「星座の名前から取っている。冬の大三角って名称のね。」

「でも、そんな名前よりも不気味なことがあってね、二十年以上」

経ってもその容姿が変わっていないんだ」

「年を取らないってこと？」

「そう考えたほうがいいのかな。」

まるで時でも止まってしまったかのように…そして、戦闘とは無縁の骨格や風貌だ。

殺気すら感じられない。しかし何か特別な能力を持っていることは確かだ…」

「あなたは実際に手合わせしたの？」

「いや…私はないんだ。」

しかし噂では死なない体の持ち主らしく、誰にも傷つけられたことがないらしいし、

戦いを挑んだ者がいたのかも定かではない…謎が多すぎるんだよ」

「年も取らないで、死なない体ということは、不老不死ということか…」

みゆは、そんな奴らと戦って勝ち目があるのか不安を感じていた。

「心配しなくても大丈夫。対抗策もあることはある…まあ…完全にとは言えないがね。」

それでもゼロではないんだ。だから、私は前に進める…」

「そう…それを聞いて少し安心した。私も勝算のない戦いは避けたい」

話し込んでいる間に料理は出来上がり、次々とテーブルに運ばれ

てきた。

熱々の料理から良い匂いが辺りに漂い、灯たちの食欲を刺激した。

「さあ、料理も揃ったことだ。ひとまず難しいことはさておいて、空腹を満たそう」

まるで自分の娘でも見るかのような暖かい笑顔で、悩んでいるみゆの気持ちを切り替えていった。

それから二人で静かに食事を始めた。

40話

俺は立花と並んで歩きながら見たことのない外国の町を歩いていた。

寒さも日本のものとは全く違い、用意していた全身を覆うようなフード付のジャケットに体を埋めていた。

外国が初めてだった俺は当然、きよろきよろしていた。

すると、立花は恥ずかしいから止めると、俺の腕を引っ張った。

「今日はここに泊まるぞ」

ホテルとは無縁の普通の家のように見えたレンガ造りの建物の前で俺らは立ち止まっていた。

フィンランド語で書かれている文字は俺にはさっぱりだったが、立花が迷うことはなかった。

木のドアを開き、中に入っていくと目の前にカウンターがあり、そこには一人の老婆が椅子に腰掛けていた。

カウンターの脇には暖炉があり、部屋を暖めていた。まるでテレビかゲームか本の世界だ。

立花はフィンランド語を難なく操り、老婆と宿泊の契約を交わした。

俺はただそこにいるだけの存在で、すっかり蚊帳の外だ。

「部屋が取れた…とりあえず相部屋だが、気にするな」

そんなことをあっさりと話す立花の気持ちが多分ならなかった。

俺は思わず取り乱して、それはまずいと必死に食いついてみたが、予想通りに立花はふざけるなの一言だけだった。

それはそつだ。俺は言葉を話せないし金も持っていない…

立花に反論したところで何も自分ではできないのだ。

渋々ではあったが、立花に従うように部屋に荷物を置いた。

部屋は意外と広く、ベッドが二つとクローゼット、ちょっとしたリビングが存在した。

そしてトイレと風呂が一緒になっていた。

「結構広いんだな…」

「ああ…日本と建築様式も、構造も全く違うからな。私にとっては何も珍しくない。」

さて、着替え済ませたら飯でも食べに行くぞ」

こいつの男らしい性格は相変わらず健在だ。しかし順応とは恐ろしいもので、それに俺はもう慣れていた。

それから俺たちは、下の食堂らしき部屋に入って夕食をとった。

裏表八鬼のメンバー十五人の内、頭目の紅蓮を入れた五人が神徒協会の本部を目指していた。

一人はあの女教師であり、柴木立花の姉である新城冬香。

そして俺と同じ学校だった体術のスペシャリストの立木蓮。

残りの二人は、八坂玲紀という類稀な霊力を持つ女性と設楽翔馬という飛び道具の達人の男性だ。

立木蓮だけは一足先に情報を仕入れるために神徒協会の本部の近くにしばらく滞在している。

紅蓮は残った者たちにこの国を守るように話した。

そして彼らが旅立ったのは俺たちが北欧の土地を踏んでから二日後の事だった。

彼らは立花のように大富豪でも何でもなかったもので、一般人の観光客同様に移動していた。

そして北欧の大地に足を踏み入れた訳だが、俺同様に全員がテンパっていた。

「なあ…冬香…こっつて熊とか出てくるのか？」

「さあ…」

「北極熊って奴だっけか？」

俺は今までヒグマぐらいならわけなく片付けたが、未確認生物は苦手だな」

紅蓮はそんなことを口にした。ちなみに北極熊は未確認生物などではない。

「頭目なら余裕でしょ！いつものようにちゃちゃっと鍋にしてくださいよ！」

冬香と別の女性である玲紀は明るく振舞っていた。

見た目はどう見ても中学生ぐらいだが、これで冬香よりも年上のだから驚きである。

「そうですね。俺も手助けしますよ。眉間辺りにばーん！って弓を射りますか？」

それともこの拳銃で心臓打ち抜きますか？」

もう一人の見ない顔の八鬼のメンバーの翔馬は、

二十代半ばの男で見た目は細身の美少年なのに、乗りは明らかにおかしかった。

そんなおかしな三人のやりとりを見ていた冬香がまるで普通に見えていた。

そして落ち着いて話をした。

「あのね…ここにそんなの出るはずないでしょ。
北極熊の生息地は、アラスカ、グリーンランド、シベリア辺りよ
…」

冬香が話すと、紅蓮は目をまんまるく開いて驚いた。

「流石…八鬼唯一の高学歴だ！」

確かに冬香は大学を出ていた。もちろん教師になるために資格も取っていた。

だが、そんなに良い大学は出ていなかった。

それは世間から見れば三流大学かもしれないのだ。

しかしそんな所を卒業した冬香以上に他のメンバーはあまり教養がなかった。

それもそのはずで、みんな自らの能力だけを磨く日々だったのだ。

「あのね…こんなのテレビ見てれば普通にやってますから」

最もらしい意見だったが、他の奴らはテレビ見ないしーと云ってまるで聞いていなかった。

「よし、そうと分かったら、今から神徒に殴り込みにも行くか！」

「ちょ…どこが、そうと分かたらなんですか？それに場所分かっているんですか？」

「気にするな。勢いだ。何事も…」

「そうつすよ！俺たち今、乗りまくっていますよ」

「行きましよう！」

冬香と他の三人には温度差が明らかであった。

冬香同様に二人も親から跡目を譲られた連中ばかりだったが、乗りが全然違った。

それというのも頭目のせいである。

こいつが八鬼はもつとグローバルにならなければいけない。

そのためにも何事にもポジティブに向かえ！そんな精神を広めたからである。

三条識斗がいた時は当然、あいつは頭目を無視していた。

しかし冬香もそんな状況に追い込まれてきた。

「やれやれ…」

頭を悩ませながら、小学生を三人連れて歩いている気分です導した。

41話

「不穏な動きが感じられる」

金髪の長髪の細身の男、デネブが何かを感じてそう話した。

「ああ…まるでこの城を取り囲むように、何かが向かっているようだ」

銀髪で短髪、筋肉質で背の一番高い男ベガは、デネブが話したことが嘘ではないことを確認した。

そして最後の一人、眼鏡をかけ、黒髪で髪を後ろで束ねている女性のような美しい顔の男、

アルタイルが口を開いた。

「灯か？」

「その可能性はなきにしろあらずだ…」

「多重結界が張ってあるこの城を行き来できるのは評議会のメンバーか、

我々の意思で通された者にしか無理なはずだがな」

「それでも彼は以前に興味本位だけで、ここに入ることができた…」

「厄介な奴だ。我々が手塩にかけて育ててやったのに、恩をあだで返すとはな」

「まあ、それでもあいつに我々を殺すことはできない。あいつに限らずな……」

三人は暗闇の中、蠟燭の明かりの前でぼそぼそと話していた。

どこからどう見ても三人の年齢は二十代半ばで、服装は研究者か医者のような白衣に身を包んでいた。

「これからどうする？ 門の完全開放状態には、あと数週間ある。全ての準備は整ったといってもいいだろう」

デネブは懐から煙草を取り出すと、マッチで火をつけた。

「のんびり待たさ……きっと大人しくしてない連中がここを訪れるに決まっている。

つい先ほど評議会のメンバーもここに呼んだ。

彼らが我々の代わりに良い駒となって戦ってくれるだろう」

「相変わらず、悪趣味だな……」

「お前に言われたくないな」

それから三人は城の奥へと向かい、これからの準備に取り掛かった。

俺と立花は二日間の間、この町を散策していた。

そして神徒協会の本部があると思われる城の話聞いた。

それは雪山のど真ん中に存在する城らしいが、その姿が見えたり消えたりするのでちょっとした怪現象として恐れられていた。

まるで冬の陽炎だ。

俺はそう思いながら、城の話聞いていた。

それから立花は山の地図を取り出すと、話を聞いた場所にチエツクを入れていた。

誤差は数キロ出るかもしれないが、この辺りで間違いないとめぼしをつけると、再び宿に戻った。

「神徒協会の本部の場所はある程度特定できたな」

俺は立花に向かって話しかけた。しかし立花の表情はどこか曇っていた。

「場所が分かったとしても…」

町の人が話すように城が見えたり消えたりするということは多重結界が張られている可能性がある」

「多重結界？何だそれ？」

「属性の異なる結界を何層にも張り巡らし、外敵からの進入を防ぐものだ。」

姿が消えたり見えたりするのもその特徴の一つで、
結界の属性を全て解明しなければ破ることもできない……」

「なら…前途多難な状態ってことか」

「しかし評議会のメンバーが行き来しているということは、入れる方法があるのも事実なんだ。

まあ、それでも私には入れないことはないが…

その前にもう少し情報を集める。

それと…もう一つ…これはお願いなんだが、私の鍛錬に付き合っ
てほしい。

お前も分かっているだろう。このままでは私は何もできないで殺
されてしまうことを…」

「それは…」

「私自身がお前達と戦うことで気付かされたんだよ。

自らの非力さにな。だから短期間ではあるが一週間で仕上げたい」

「仕上げたいって…お前何か自らの能力が変化するあてがあるのか
？」

「ああ…」

立花には俺に見せなかった技があるらしい。

強敵と戦う上で立花の戦力は欠かせないものになるはずだから、

俺は喜んで協力することにした。

「俺自身も同じ気持ちだ…終リオには手も足も出ずに負けたからな。

対抗策を考える上でもお前との手合わせは必要だ」

「なら、いいんだな……」

俺が軽く頷くと立花はほっとした。

それを見た俺は、こいつはこいつでいろいろ悩んでいるのだと気が付かされた。

冬香のこともあるが、まずは神徒協会のことを見据えての発言だったのだ。

俺たちはそれから一週間、鍛錬と情報収集の毎日を送った。

42話

「そろそろだね」

灯は真っ白い視界の中、車を数十時間運転していた。

みゆは、そのタフさにも驚かされていたが、それ以上にこんな何も見えない状態でよく道が分かるものだと感心していた。

「とりあえずここに車を止めて、数キロ歩く。君と私なら三時間もあれば十分だろう」

そう話して、車を止めると荷物の入ったリュックを背負って歩き始めた。

みゆは文句の一つも言わずに黙々と後をついていくだけだった。

目の前は依然変わらずに真っ白で、数メートル先も見えない。

しかし灯はまるで見えているかのようにどんどん進んでいった。

足跡はすぐに雪で消えてしまう。それほどの吹雪であったが、二人の歩く速度が落ちることはなかった。

「む…」

三時間経つと、灯は急に足を止めた。

「着いたね…ここだ…」

何も見えない空間を指差した。

「どこにある？」

みゆには何も見えなかった。

「ここにはね、多重結界が張られているんだよ。

だから、目には映らないんだ…まあ、空気の流れの関係でたまに映ることもあるけど、

まず探すのは無理だね。だから、ちょっとした工夫が必要…」

すると灯は何もないところに手をかざした。

「何も物理的な障害が存在する訳ではないんだ。

以前訪れた時にこの結界の構造は既に把握した…だから…」

みゆは何かが開くのが感じ取れた。

それはそこに存在する不穏な空気がまるで浄化されるかのようにだった。

そしてそのまま灯の後をついて進んでいった。

「これで大丈夫…」

何をしたのかは分からなかった。しかし神徒協会の本部に入り込めたのだけは分かった。

今まで存在しなかったものが目の前に見えていたのだから…

それは大きな白い古城だった。

吹雪だったはずが、なぜかここに入った瞬間に穏やかな気候に変化していた。

まるでどこかの屋内に入った気分だった。

「なあ…何がどうなっている？」

「少し説明しようか…彼らの持つ力の根源は全て科学のものなんだ。数式だったり公式で成り立っている…」

だから、それを解明したことで多重結界を一部取り外すことができた。

多重結界はそこに目に見えない防御壁を築いて外界からの障害を全て取り除くものなんだ…

だから、外は吹雪きでもここは穏やかかって訳さ…さあ、進もう…」

みゆは灯の話していることを半分も理解できずに首をかしげながらも歩いてた。

足取りは今までと違い軽かった。

あらゆる障害から解き放たれているここはまるで異空間で、とても穏やかな世界だった。

「気持ちが悪いほどその…神秘的だ…」

みゆは正直な気持ちが思わず口に出ていた。

「いい表現だ…だが、これは人の作ったまやかしの世界さ。
人の作り上げたものなど神秘的という言葉からは無縁の存在だ…」
それから二人はそのまま城の中へと入っていった。

俺と立花は例の結界の前にいた。

行く手は確かに見えない力で遮られていた。

感触はなくても俺には違いが分かる。

「これは明らかだな」

「ああ、だから、私の能力が役に立つんだ」

そう言えば、この間も多重結界の話をしていても立花は動じていなかったな。

やはり突破口があるのか…

「手を貸せ…」

立花はそう言って俺の手を握り締めた。

そして次の瞬間、俺らは体が別の場所に引き込まれたような感覚

に襲われた。

「うお…」

初体験の出来事に思わず声が出てしまったが、体は別に何ともなかった。

「空間転移だ…」

そうか…こいつの能力があればこんな多重結界無駄か…
セキュリティーの高い施設だろうが、銀行の金庫だろうが、政府の重要機密の場所だろうがだ。

「今までは自らの体しか転移できなかったが、お前との鍛錬の成果が出たな…」

「そうなのか？」

「ああ…私という世界しか空間の操作が出来なかったからな」

そのまま俺たちは前を向くと目の前に見える城の中に入っていた。

まるでなんとかランドのなんとか城だな。

薄暗い城内の通路の壁には、ランプの火が等間隔で燈され妙な圧迫感を感じさせた。

正面の門から入り込むことは流石にできなかったので、脇に存在した勝手口のような小さなドアから俺たちは城内に潜む

ように入った。

「人の気配が感じられないな……」

足を踏み入れて数分で俺はそう思った。

「こんなに馬鹿でかい城に数人しか存在しなかったら、感じ取るのも難しいだろ」

「まあ、そうだな……」

そのまま迷路のような城の中をぐるぐると歩き回ると、広い部屋に出た。

そこは何もない大きな空間だった。石の内壁に囲まれて大きさは、体育館並みの広さだった。

「この部屋は何だ？」

家具も置物も何もないただの部屋。

しかし確実に分かることは、血の匂いが染み付いていることだ。

目に見えない恐怖を感じながらも先に進もうとすると、暗闇の中から声がした。

「やっぱり来たんだ……」

立花が声のする方を睨むと、声の主はすっと姿を現した。

やはりそうだ、終リオだった。

「死ぬか、生きているかは賭けみたいなものだったけどね…
流石、護門徒候補者の二人。生きていたね」

にこにこしながらリオは俺たちに近づいてきた。相変わらずその表情からは何も分からない。

「この場所はね、かつて護門徒後継者が争った場所でもあるんだ。
神徒協会の三賢人が呼び寄せた者だけが集まり、最後の一人になるまで戦わせた…」

数百年前はそうだったみたいだけど、今は謀反を起こすような馬鹿な輩の処刑場でもあるんだ。

だから、二つの要素を含んでいる君らにはぴったりの場所だと思わないかい？」

「朱里はどこだ？」

俺が知りたいのはまずそこだった。

「別の部屋にいるよ…でも彼女は僕の守護人となる人。

だから、一生を添い遂げてもらおうと思ってるね。軽い暗示をかせさせてもらったよ」

リオの笑みが気持ち悪く見えた。

「まさか…洗脳？」

立花もその表情から察したらしい。声を荒げて聞いた。

「聞こえは悪いが、そうかもね。彼女の目には今は僕しか映っていない。」

だから、この先も君は用なしだ。いや、ここで終わりだから先はないか……」

まるで勝ち誇ったかのような様子で俺の事を嘲り笑った。

43話

俺の怒りは頂点に達していた。

朱里を…俺の…大事な存在を…こいつは笑って弄ぶ気だ。

「ふざけるなあ！」

俺には計算だとか、先を見るとか、そんなことは思い浮かばなかった。

ただ純粹にこいつを殴りたかった。

だから、体は自然の…いや、俺という生物本来の動きをしていたのだろう。

リオが瞬きをする間に俺の拳は、リオの頬を捕らえていた。

その間は一秒にも満たない。

防御をする間もなくリオの体は後方へと仰け反るように吹き飛ばされた。

立花は今の出来事を見て当然驚いていた。まさか、俺から仕掛けるとは思わなかったのだろう。

「いやー…なかなかやるね」

地面に大の字になっているリオから声が聞こえた。そしてゆっくり

りと立ち上がる。

見ると奴はあろうことか無傷だった。

嫌な予感はしていた。思い切り叩き込んだはずの拳に妙な感触があつたからだ。

例のリオの能力のせいだろう…

「殺気も十分…速さに至っては目で追うこともできなかった。

これで面白い勝負ができそうだね。

そうだ…一つ忠告しておくけど、僕には打撃は効かない。殺るならナイフでも出した方がいい」

あっさりと自分の弱点を俺に話した。

「こうでもしないと、フェアじゃないだろう？

それにもう一つおまけ…二人で掛かってきてもいいからそのつもりで」

余裕もここまで来れば腹立たしさを失ってしまう。俺は逆に気を引き締めて、リオの前に立った。

「さて…始めるかい？君から先でもいいが、やられっぱなしは嫌だからね…」

リオの周囲を取り巻く空気の流れが渦巻くように変化した。

仕掛ける気だ。

「僕から行くよ！」

言葉と同時に以前と同じような見えない斬撃が俺を襲う。

しかしそれはもう見えている。

俺は先読みをして、その箇所を特定していた。

懐からナイフを取り出し、右、左、前、後ろと時間差で襲い掛かる斬撃を切り落とした。

「お前の能力は分かっている…お前は、空気を自在に変化させられるんだ。

形状を変え、刃のようになり膨張させてクッションのようになりな…

さっき俺が殴った時も軟らかい感触があったが、自らの体を空気の膜で覆っていたのだろうか？」

舞い上がる風の中俺はリオに向かってナイフを構える。

「へえ…君にもそれなりの洞察力が存在するんだ。

でもさ、分かったところで以前のような逃げ道を塞がれた攻撃をされたらどうするんだい？

見えない無数の刃が君に向かっていくんだよ…ふふふ…」

リオは言葉巧みに俺を追い詰めようとしていた。しかし俺にだつて策はある。

「やってみればいい…」

表情を変えることなく俺はリオに話した。

「へー…これはまた、何か掴んだようだね。でも、僕にはそれが何か全く分からない。なら、実力でそれを証明してもらわないとね！」

語尾に力が入ると同時に、俺の立っていた所の地面がぼんやりと音と共にえぐれた。

しかし俺はそこにはいない。

神経を研ぎ澄ませ、リオが攻撃を仕掛ける瞬間を見逃さなかったのだ。

彼の表情、筋肉の動きを読み、そして先読みの能力をフルに活用することが出来れば、

それくらいの初動には対応できる。

以前の俺には冷静さと警戒心がなかった。

そんな状態では命のやり取りなど出来るはずはない。そうだ…甘かったんだ。

何度となく自分の甘さを思い知らされた俺だが、それでもいいと思っていた。

どこか非情になれない自分がどこかにいるのだから…

しかし今はそんなことを考えている余裕などない。相手は強敵、そして躊躇もない。

そんな相手に余裕など見せたらこっちが命を奪われてしまう。

俺は、高速移動でリオに急接近して、体が数センチ触れるというところまでできていた。

ナイフは逆手に持っていた。何故か自然とその方がしっくりくるからだ。

右に左に切りつけてみたが、リオはそれを後退してさせた。

俺はすぐに追撃した。

再度体が密着するほどに…

「ちっ…君もしつこい奴だね。まさか、これが策とでも言うのかい？」

「ああ…お前も分かっているんだろ？俺が接近していれば技が出せないと言っつことを」

俺はそのまま追撃を仕掛け、ナイフを最短距離でリオの肉体に近づけた。

しかしリオも攻撃を捌くのが上手かった。

俺の攻撃をことごとく受け流し、拳句の果てには素手でも攻撃をしていた。

完全なるインファイトでの戦いになってしまったが、ここで攻撃

を緩める気はなかった。

数秒の間、息をすることも忘れるほどに戦いに没頭していた。

リオの拳は華奢な体とは思えないほどの破壊力があつた。

皮を切るような鋭い突きと、かすった時の衝撃の重さがそれを表していた。

もしも喰らつたらただでは済まない。

俺はそのことも視野に入れながら、攻撃の速度を上げていった。

「くくく…いいね…前とは段違いだよ。怒りの中にも冷静さが感じられる。」

これが君本来の力つて訳か…」

攻撃しながらよくしゃべる奴だ。

俺はリオに負けずに攻防を繰り返し、速度も負けていなかった。

「それで？密着していれば僕が技を出せないと…」

リオは上半身だけの攻撃が集中していた俺の重心を崩すように瞬時に軸足を刈り取った。

まずい。これでは態勢が大きく崩れる。

そう思った矢先にリオの不適な笑みが見て取れた。

「甘いね！僕は密着していろいろが技が出せるんだよ…まあ、発想は良かったかな？」

そう言っつて右の手のひらをすつと俺の顔面目掛けて開いた。

何かが来るのは分かっていたが、それよりも先に。

ズン…

重たい衝撃がリオの背中に響いていた。

「な…」

44話

何が起こったのか分からずに呆気に取られていたので、俺はその隙を見逃さなかった。

崩れかけた足を踏ん張らせ、

下半身に力を込めるとリオの胸にナイフを地面と平行に滑らせながら一気に突き刺した。

深々と突き刺さるナイフからは肉を貫いた感触のみが腕に伝わる。

それは硬い胸骨の隙間にナイフが入ったことを証明したことであった。

遅れてコンマ数秒後に叫び声が部屋中に響き渡った。

「ぐあああああ」

リオは血液を撒き散らしながら、胸を押さえた。

痛みに喘ぐ姿を今まで一度としてみるものがなかったため、俺は少々戸惑った。

しかし追撃が来ることを考え、すぐにそこから離れて様子を伺った。

「き…貴様ら…」

その目はまるで俺たちが虫けら風情とでも言いたいようだった。

憎悪に満ち溢れ、殺気も十分に高まっていた。

「まさか…立花…お前まで攻撃に参加するとは…」

リオの背中を見るとそこには、俺とは別にナイフで刺された傷があった。

これが何を意味するのか…それは簡単だ。

リオは空間の移動を体の部位のみで行ったのだ。

それはつまりナイフを握った手だけの空間転移。

今までできたことは自らの全身を移動させるものだった。

しかし修行の成果とでもいうのだろうか、彼女は部位の空間転移と、

他人を連れての空間転移が出来るようになったのだ。

おそらく、彼女の力がもっと伸びれば、物だけですら転移することが出来るだろう。

だが、そんな便利な能力にも弱点があった。

それは立花が部位の転換を行う時には、通常の数倍の集中力を要する。

それは技を完璧にするまでに時間が足りなかったせいもある。

空間の固定、そして転移は小さくなれば小さくなるほど難しいらしい。

だから、立花のこの能力はまだ戦闘にはむかないのだ。

それを補う時間がなければだ。

だから俺は時間を稼いだ。

リオの能力を把握して接近戦を仕掛けている間に立花は意識を最大限に集中させ、

自分の転移する空間にリオが姿を置くまでじっと待っていたのだ。

そして、機が熟したのだ。

「私は…お前に攻撃しないとは一言も言っていない。

それに…お前ほどの実力者なら二人でも十分やれるんだろ？」

立花はにやりと笑っていた。

それとは対照的にリオに余裕の表情などできなかつた。

背中で息をしながらじつと俺らを睨んでいた。

「く…はあ…はあ…ここまでコケにされるとは思ってもみなかつたよ」

流れる血の涼は致死量に達しているのだろうか。水溜りのように床に広がっていた。

「海！早く止めを刺せ！」

リオはそう俺に話したが、俺の反応は僅かに遅れていた。

血まみれのリオを見て少し怯んだせいかもしれない。

踏み出そうとした瞬間に目の前の地面が爆発音と共に瓦礫を撒き散らした。

「何！」

視界が遮られ目の前が見えなくなる。

俺はリオの姿を必死に探そうとしたが、手遅れだった。

「この痛みは覚えてく…だが…次は…僕がお前らを血まみれにする番だ！」

爆煙の中から声だけがするとそのままリオはそこから姿を消してしまった。

「ちっ…逃がしたか…」

視界が元に戻るとリオの後ろの外壁に大きな穴が空いていた。

「なあ、立花…あいつ…あの怪我で助かると思うか？」

俺の見立てでは、腎臓と肺は確実に潰れている…それなのにあいつは、次があると言っている…」

「さあな…そこまでは分からんよ。」

でも、あれほどの能力者ならお前のように治癒能力も長けているのかもしれないぞ?」

「俺の…ように…」

「まあ、それでもアレだけの重傷を負わせたんだ。急いで追撃を仕掛けよう。」

そうすれば回復する前に殺せる…」

立花はすぐ後を追うように急かせた。

その先に何が待っているかは分からないが、俺もいい加減、腹をくくるとしよう。

45話

神徒協会の本部とも言えるこの古城は、途方もなく大きすぎる。

みゆと灯は海たちの入る数時間前にここに来ていた。

「いやいや…相変わらず馬鹿でかいね。無駄なものばかりだ…」

通路に建ち並ぶ年代物の彫刻を見つめてそう話した。

「灯…ここは、昔から変わらないのか？」

「まあ…そうだね。」

それにはここにはちょっとした細工がしてあって、

侵入者を迷わすために城内にも無数の結界が張られているんだ。だから私にしっかりとついてきてくれよ。

「じゃないと私の姿そのものも消えて見えたりするかもしれないから…」

「面倒なんだな…」

そのままみゆと灯は迷うことなく足取りを速めていった。

目的の場所が灯には分かっているらしく、

その場所に近づくに連れて全体の雰囲気が変わっているのを見ゆは知っていた。

「この先だが…彼らももう既に察しているようだね。彼らとは別の誰かがここにいる…」

ドアの前で灯はみゆに向かってそう話したが、みゆはドア越しの気配を感じ取れなかった。

それは、あまりにも微弱なもので人とも違った感覚だったからだ。

ゆっくりと重たい大きなドアを開けると、そこには八人の男達が立っていた。

「やはりか…」

灯は知っている口ぶりでそう話したが、男達はそんな灯の事にも留めなかった。

驚くこともしないでゆっくりとみゆの方に視線を移すと凝視していた。

「いやいや…あなた方に会うのも何年振りになりますかね？ 私なんかが会うことはほとんどありませんでしたから…」

皮肉たっぷりで灯はそう口にした。

「やはりお前か…灯。」

孤児のお前を拾い、ここまで育ててくれたあの方たちに刃向かうとはな…」

「寛大なお心をお持ちのあの方達も嘆いていた」

評議会の男達は灯の事を次々に非難し始めた。だが、灯は動じることはなかった。

「そんなの関係ないでしょ。」

確かに私は、拾ってもらった恩はあるが、
世界を混沌に変える片棒を担がされるのは御免なんですよ」

「何故、あの方達の考えがお前には分からない？」

「あの方達は決してこの世界の混沌など望んではない…再生を考
えているのだ。」

人が溢れ、破壊しつくされた未来のない世界をな」

「そうですか？そんな純粋な気持ちではなく、意図的に何かをしよ
うと思えないんですよ…」

それに再生そのものを一握りの人間が行うのは傲慢だとも思いま
すが…」

人という種族が減びるとしたらそれは自然の姿。

それを個人が勝手に捻じ曲げるのは自然の摂理から反しています」

灯は自らの思つ気持ちを吐き出して話したが、

評議会のメンバーは誰も心を打たれることも納得することもなか
った。

「…君と討論をしても平行線を辿るだけだな。」

確かに君は能力者ではなく、人間そのものの力を十分に発揮でき
る。

それはある意味、自然で純粋な人という種族なのかもしれない」

「しかし人という唯一の知恵を与えられた生物ならただ破滅を待つ
だけの愚かな選択はしないだろうか？」

「君は傲慢というかもしれない。しかし誰かが行わなくてはならない事態は起こるのだ」

「何もしない方が罪だ」

「最善の方法を尽くしてこそ人というものの最後だ」

評議會の話も正論のオンパレードではあった。しかし灯も納得することはなかった。

「いいでしょ…お互いの意見が合み合うことはないことは十分分かりました。」

それなら実力でここを通らせてもらいます」

灯は、宣戦布告を告げた。

しかし評議會の連中は態度を変えず、静かに立っているだけだった。

にらみ合うこと数秒、

その間に水のような静けさの中にも激しく燃え盛る闘志の熱気が部屋中を充満させていた。

そんな殺気立った部屋の緊張感を打ち破るかのように入り口の付近から声がした。

「やあやあ、そこは…俺たちが手伝おうかな？」

灯とみゆは、声のする方を見た。当然、評議會の連中もつられた。

「お前…紅蓮か？」

そこにいたのは日本を影から守護する八鬼のメンバー四人だった。

頭目の紅蓮を筆頭に三人の能力者がその姿を現した。

「やつほー…灯。久しぶりだね」

紅蓮はのりが軽く灯が逆に引いていた。

「あのね…お互い四十を超える身だ…」

ヤッホーはないだろ。それに、今までの緊迫感が台無しだ…」

「別にいいだろ？お前とは付き合いが長い。

それに俺は神徒のメンバーが好かん。

ここは一つ協力して、目の前の障害を打破した方が良いのではないかな？」

新たに増えた人物に評議会の連中も無視はできなかった。

「貴様は…八鬼の頭目の唐津紅蓮か…」

「あらあら…俺って有名人なのかな？」

「相変わらずだな。その人をくつたような態度は…」

だが、お前ら八鬼ははつきり言って目の上のたんこぶだ。

ここ倒しておくのには都合がいい…」

「唐津紅蓮…貴様と手合わせをした者の存在は知らない。

だから今更能力分析などちまちましましたことはしない。さっさと掛

かつて来い！」

一人の評議会のメンバーの男がその言葉を口にした瞬間。

ザシユ！

鋭利な刃物で切り裂く音と共に、紅蓮を焼き付けた男の首が吹き飛んだ。

ブシユウウウウウウウウウウ

時間差で噴水のように死体から血が吹き上がった。

「う…」

流石の評議会の連中もその攻撃を無視することは出来なかった。

「あれれ…俺を焼きつけた割りにこの程度で死なれると、逆に拍子抜けなんですけど」

短刀を手にした紅蓮は振り返り血を浴びることなく、元の場所へ移動していた。

46話

「あのさ…難しい話はこの辺にしておいて、さっさと始めないかい？俺は時間を無駄にしたくないからさ」

人を一人葬り去っても一切の変化を見せることのない紅蓮に回りは何の反応も示さなかった。

殺された評議会のメンバーは、一部始終を声を上げることもなく黙って見ていた。

「灯…ここは、俺たちで何とかするからさ、先に行っていていいよ。俺たちもこいつらさくさくつと殺してから先に進むからさ」

紅蓮は灯に軽く促した。まるで何の問題もないように。

「いいのか？」

「いいさ…ただ、帰ったら美味しいものご馳走しろよ！」

「まあ…お前の味覚に答えられるかどうかは分らんが、努力はしてみるよ」

そして灯は、みゆを連れてその部屋を出て行った。

彼らが行くのをみると、紅蓮は再び評議会に視線を戻した。

「さて…始めようか？翔馬と冬香だけで十分かな？ねえ、どう？」

「ねえ、どつ？つて…あんだね…」

冬香は戦う気持ちよりも紅蓮という人物に少々疲れていた。

「俺にやらせてください」

翔馬はやる気マンマンで名乗りを上げた。

そして一步前に踏み出すと、

懐からクナイを取り出し目の前にいた四人の額に向かってノーモーションで投げた。

それは三メートルほど離れていた距離など一瞬に感じさせるほどの速度を持っていた。

前方にいた四人は何も出来ずに額に深々とクナイを突き刺され、膝を地面についた。

しかし翔馬の攻撃はそれだけでは終わらなかったのだ。

右手でクナイを投げ終わると同時に後ろに回転しながら、今度は拳銃を三発、左手で発射させていたのだ。

音と同時に後ろにいた三人も、どさどさつと倒れた。

正に瞬速とはこのことだ。ものの数秒で全てのかたがついてしまった。

何も出来ずに転がった死体が全部で七つ。

乾いていた石畳の床もじわじわと流血が隙間に流れ込んで部屋中を埋め尽くしていった。

「あっけないね…これでは神徒協会の底が見えてしまった感じだ」

紅蓮は眉間にしわを寄せながら腕を組んでその様子を見ていた。

「翔馬くん…やりすぎです。私の分も残しておいてくださいよ」

玲紀は翔馬に獲物を横取りされたことを腹立てていた。

「お前は戦闘向きじゃないだろ？」

肉体の回復や戦闘力を上げるのが得意な後方支援の立場なんだから少しわきまえとけよ」

「それは、翔馬くんも一緒じゃないですか。射撃だって後方支援ですよ。」

あんな至近距離で射撃の腕を披露しても何の自慢にもなりません」

「このやる…そんなに俺に横取りされたのが、不満なのか？え？」

「不満ですよ！」

冬香は二人のやりとりを見ていて、いらいらしていた。

紅蓮を始め、何で八鬼の若い連中はこうなんだ…そう思っていた。

「まあまあ、二人とも落ち着け。このまま終わりってことはないとも思っから…」

「え？」

「どつという意味だよ？」

紅蓮は死体を指差した。

「見ればわかる……」

すると、今まで動くことのなかった評議会の連中の体がぐぐぐと持ち上がった。

「ふ……う……」

頭にはクナイが刺さったままの奴がいれば、銃弾の跡が残っている奴もいた。

刺さっているクナイを引き抜くと、傷口を押さえた。

すると、見る見るうちに傷口がふさがっていった。

「何……あれ……」

驚くのはそれだけではなかった。

最初に紅蓮に首をはねられた奴の首が元の通りにくっついていったのだ。

全てが元通りそう言った様子で、流れ出した血液までもが体の中に戻っていった。

「あれは何の能力ですか？」

冬香が紅蓮に聞いた。

「不死の体を持つってどこだな…」

「不死？」

「三賢人は不老不死って話だ。それなら、こいつらにもそんな能力があってもおかしくないだろ」

数分もしない内に全員の体は元に戻った。

それからそれぞれが武器を持ち始めた。

短剣、槍、長剣、弓、斧、銃、普通の剣そして何も持たない人物がひとり。

「我々の能力を教えたくてね…まずは、君達の技を受けてみることにしたよ」

こきこきと首を鳴らした。

「所詮はこんなもの…絶命させるには至らないな…」

「今度は我々の攻撃を受けてもらおうか」

八人がそれぞれの持ち場につくように、陣形を取った。

それは一切の隙間をなくすような強固な守りで固めた一つの要塞

のようだった。

冬香は四方八方からそのほころびを探そうとしたが、見つからなかった。

当然、冬香よりも未熟な翔馬と玲紀にはそれがどんなものかすら理解できていない。

「頭目…」

冬香は戦況が一変したのを見計らって、今後の策を紅蓮に委ねようとした。

しかし紅蓮は相変わらずの態度だった。

「とりあえず、お前達だけで何とかしてみてくれない？
俺もまだこいつらの能力を完全に把握していない」

「あのね…あんた、傍観者になる気ですか？」

「馬鹿だな…勝つための策だと思ってくれよ。そうだな…一分でいいから」

一分。それが短いか長いのかは分からなかった。しかし冬香はそれに従うしかなかった。

頭目である唐津紅蓮、彼の實力は八鬼をまとめるだけあって言葉以上の實力を持っていることは明白だった。

47話

「分かりましたよ……」

渋々返事をする、三人で八人の不死軍団に立ち向かおうとした。評議会のメンバーに乱れはなかった。

まるで八つ子のようにそれぞれが同じ意思を持っているかのようで、同調していた。

気味が悪いと思い三人は嫌な汗をかいていた。

そして突然の攻撃は翔馬から始まった。

彼らに向けて、先ほどしたようにクナイを無数に放つ。

それは的確に高速で急所に向かっていったが、槍を持つ男の一振りですべては全て地面に叩き落とされた。

「う……」

他の七人は既に動いていた。

三人を取り囲むかのように陣形を整えると、短剣、長剣を持つ者が冬香たちに同時に襲い掛かって行った。

冬香はそいつらの攻撃をどうにかかわしながら素手で受け止めると、腹部に強烈な蹴りを叩き込んだ。

冬香の打撃は喰らっただけでも致命傷だ。男は大きく吹き飛ばされた。

一方で、もう一人の男の攻撃は玲紀がどうにかかわしている様子だった。

このままでは、押し切られると冬香は判断し、応戦に向かおうとしたが、敵の二番手の攻撃までは読めなかった。

不意に横っ腹に痛みを感じていた。

よくよく見ると腹部に弓矢が刺さっていた。

しまったと思ったときには無数の銃弾と弓矢が冬香たちを取り囲むように飛んでいた。

とてもではないが、翔馬と玲紀にはこの攻撃はかわしきれない。そう思っていると、冬香たちを中心に円を描くように衝撃波が噴水のように巻き起こり全ての攻撃を盾のように防いだ。

「何!」

評議会の連中はそのすさまじい圧力に後退することを余儀なくされた。

「はい…時間です」

背後から紅蓮の声がした。

「なるほどね…三段構えの攻撃か…」

接近戦を持ち込んで、その隙に遠距離からの嵐のような攻撃、戦況が把握できない間に槍と斧で離れて止めを刺そうって魂胆だ。不死ならではの発想だな…玉砕覚悟で初撃の連中が突っ込んでくるんだからな…

不死の連中に三段構えで攻撃されたら誰も勝てやしない。実に理にかなっているね。

しかも意思の疎通までもが完璧だ。それもかなり高度…」

拍手でもしてやろうといった様子で、紅蓮は今までの攻撃を一瞬で見破った。

「それで、どうだというのだ？我々は敗れた訳ではない。

寧ろお前らのほうが窮地に追い込まれているのではないかな？」

「机上の空論など誰にでも出来る…」

評議会の連中は紅蓮のことを真つ向から否定した。しかし紅蓮は全く動じない。

「そうかね…なら、俺にも考えがあるよ。ちょっと確かめたいしね…」

「何だと？」

「そこまで言うなら、俺の本気って奴も見てもらわないとな…いや…弟子ばかりに任せつきりって教育上良くないでしょ」

そこまで言うと、紅蓮は姿をふっと消した。

空間移動能力を使い、部屋の隅にいた何も持っていない最後尾の男の前に立った。

「うー！」

男は瞬時の出来事に冷静さを失った。

しかしそれと同時に紅蓮を取り囲むように他の男達が武器で一気に入る場所に距離を詰めた。

だが…

「こんなに狭いところで一斉攻撃は有り得ないんじゃないかな？」

そして剣、弓、銃弾、槍、斧の攻撃を見切ってたわしていた。

それもそのはずで、狭いところに一度に集まったら互いの武器が邪魔で身動きが取れない。

冷静な一人ひとりの判断があればそんなミスはしないはずなのに、何故か全員が同時に紅蓮に攻撃を仕掛けていたのだ。

それを見越して紅蓮は体術と幻術、

そして体内で練り上げて目に見えない衝撃波を作る気功の一種、気術で七人を同時に撃破したのだ。

ばらばらと碎け散る武器、そしてあちこちに吹き飛ぶ男達の大きな体。

残りの一人である元々武器を持っていない男に詰め寄った。

「お前が司令塔だな？七人を同時に操るなんて有り得ない真似をして…」

顔と顔が近づく。

「何故分かった？」

今まで感情を露にしなかった男の表情にも少し曇りが出てきた。

「意思の疎通無しに同時にあれほど動ける奴らを知らん。

それに第一陣、第二陣、第三陣が鏡に映したかのように全く同じ動きをするなど、

互いの意思を持ち合わせているものには無理だ。

操られている以外の何物でもない…それにね…司令塔って奴はいつも奥に引っ込んでいるんだよな。

似たような奴が俺の組織にもいたからな…」

それは三条織斗のことを指し示していたのかも知れない。呪術を得意とする織斗の過去の戦い方は正にその通りだったのだ。

紅蓮はぐいっと左手で男の胸元を掴むと、片手で持ち上げた。

数十キロはある男の体をまるで数キロしか感じさせない程度に軽々持っていた。

「こつなったら、一体どうなるのかな？」

空いている右腕を心臓に向かって突き刺した。胸骨も心臓も突き破って背中から手が突き出してしまった。

「うはあ…」

大量の吐血をして、男の動きは止まった。

すると周りにいた半殺しになっていた連中の動きもぴたりと止まる。

それは、紅蓮の話していたことを証明したのだ。司令塔、つまり頭なしではこいつらは動けないのだ。

それは三条織斗の時のように操っているのは少し違った。

紅蓮は腕を引き抜くと、男を無造作に投げ捨てた。そして真っ赤に染まった腕を眺めた。

「こいつら…血、赤いんだな」

そんなとぼけたことを口にして、仲間の元に戻ろうとしたが、背後から蠢く物音がした。

「はあー…やっぱり…この程度じゃ、死なないか。

不死だもんな…試してみたけど…やっぱり駄目かあー」

今までのことを思い出して振り向くと、そこには倒した男たち全員がゆっくりと立ち上がっていた。

映像の巻き戻しのように壊れた武器は欠片から元の姿に戻っていた。

そして紅蓮の右腕にべったりと付いていた血液も剥がれるように司令塔の男の体に戻っていった。

「洞察力はなかなかだな…神徒協会に入ってもらいたいぐらいだ」

「お断りしたいね…」

傷口が完全に塞がりぼつかりと空いていた心臓の穴も今はない。

「紅蓮…だったか…お前と手合わせして感じたが、お前は八鬼という組織の能力を全て持っている…」

「ということか？」

「へー…一瞬の攻撃でそれが分かったのかい。」

それはそれで褒めてやらないとな。いかにもそうだ。

俺は八鬼の全ての技が使える。しかしそれは基礎だけなんだがね…他の連中はそのたった一つの能力を切磋琢磨して伸ばしている。

一個一個の能力なら他の連中には及ばないさ…」

「それが八鬼創立者唐津草十郎の遺伝子を受け継ぐ者の力か…彼の遺伝子をベースに八人の能力者が生まれたのだから…我々とお前らのやっていることはそう違いはないんだよ」

「どつという意味だ？」

「唐津草十郎。彼が我々の創造者三賢人と同じような存在だということだ。」

その存在が遅いか早いかの違いでな…」

「意味がまるで分からないな…」

それに俺の先祖の唐津草十郎はお前らの上司とは違って国を守ることだけに命を費やした。

世界を変えようなどこれっぽっちも思っていない。一緒にするな」

「まあ、そのこともいずれば分かると言いたいのだが、その前にお前らはここで死ぬのだから分ならず終いだ」

「大した自信だな……」

「不死の体をどう攻略するつもりだ？

先ほどは少し驚かされたが、お前の能力が分かればそれも恐怖の対象にはならない。

我々は同じ攻撃を何度もするだけだ。

私が攻撃されるのはご免だが、布陣を少し変えればそれも問題はない」

八人は再び陣形を整えて武器を構えた。

今度は司令塔の男が中心に立ち、他のものが円を描くように取り囲んでいた。

「頭目：策はありますか？」

心配そうに玲紀は紅蓮の方を見た。

「うーん……とりあえず分が悪そうだから逃げようか？」

紅蓮は冬香に目で合図を出し、それを見た冬香は側面の壁を瞬間冷却した。

バカァン！

拳で凍った壁を粉々にすると隣の部屋へ入っていった。

「早くこつちへ！」

紅蓮と翔馬、玲紀は冬香に従ってそのままついて行った。

それを見ていた評議会の連中も後を追いかけてよとしたが、紅蓮が壁をみるみる修復させて元通りにしてしまったので、入って来ることはできなかった。

隣の部屋はまるで牢屋だった。八畳間の殺風景な部屋の目の前に鉄格子が広がっていたからだ。

「時間稼ぎにはなるだろ。」

早くお前らの傷を治さないとあいつらに対抗することはできない…玲紀さっさと済ませてくれ」

そう言うと紅蓮はその場に座った。

実際、紅蓮の言うとおりに紅蓮以外の八鬼メンバーは負傷していた。

冬香は右わき腹、翔馬は左肩と左腿、そして玲紀は右腕と腰だった。

弓と銃弾の遠距離からの一斉射撃での負傷だった。

冬香が一番ダメージが軽かったのは経験の差であった。

他の二人は軽傷とは呼べるものではなかった。恐らくあのまま戦いを続けていたらどちらかは死んでいた。

「ちょっと待つてくださいね。私を治してからっ」と

玲紀が右手を自らの傷口に添えて、ぶつぶつと話すとゆっくりではあったが、傷口が塞がっていった。

八坂玲紀。彼女は代々霊能力者が生まれる八坂家の遠縁の者で、言霊を操ることができる。

そしてそれを利用して守護霊を動かし、蘇生、回復をある程度できるのだ。

だから彼女の作った薬も有り得ない回復力を持っている。

「全く…お前らがそんな感じだから、あいつらに引導を渡せなかつたんだぞ…」

紅蓮は子どものように文句を言っていた。

「じゃあ、不死の体のあいつらに対して何か策があったんですか？」

「いや…全然…」

「なら、私たちのせいじゃないでしょ！」

「冬香は、怒りやすいなー…カルシウムが足りないぞ。それにヒアルロン酸もな…」

「私のどこが老けているって言うんです?」

冬香は紅蓮を片手で持ち上げた。

「おいおい…冗談だよ。馬鹿、傷口が開いてしまっぞ…」

「その減らず口を何とかしてくださいよ」

「暗くなったら良い考えも浮かばないだろ?だから少し和ませようと思ってだな…」

「そんな和みはいりません」

馬鹿話をしているうちに玲紀、翔馬の治療は終わった。そして次は冬香の番だった。

玲紀が右手を冬香のわき腹にそっと置いた。

「人手不足だったな。蓮が来ないとこちらの分が悪い…あいつ、今どこにいるんだ?」

「さあ?」

「この城に入っているんじゃないんですか?」

「それがな。この山に入る少し前までは連絡が出来たんだが、こここの結界を通った瞬間に圏外になったんだ。」

やはり入ったプランが悪かったのかな…」

「って携帯ですか！普通に考えて無理でしょう。それにプラン関係ないし！ここは圏外もいいところですよ。普通なら別の連絡方法を取りますよ。」

衛星の電話回線を使うとか、もっと魔術っぽい連絡を取るとか…」

「あんなーそんな漫画みたいなこと言わないでくれよ」

「我々の存在だけでも十分漫画の域ですから。」

「はあ…これでは先が思いやられる」

冬香は紅蓮に振り回されっぱなしで、この先の見通しすらできない状態に追い込まれていた。

他の二人は紅蓮の後押しをするだけで、何の役にも立たなかった。

しかし蓮がこの城に入り込んだというのが事実なら、いずれは会えるだろう。あいつだけが唯一まともな奴だ。そこに冬香は希望を持っていた。

「よし、傷も治ったな」

話している間に冬香の治療も終わっていた。

「城内をうろついていれば、蓮にも、評議会の奴らにもいずれ会えるだろう。なら、進むか…」

紅蓮は目の前にあった鉄格子を触れることなくばらばらにした。

「ち…行くぞ」

その光景を見て冬香は思った。

こいつは黙っていれば、物凄い能力者なのに…と。

49話

月夜灯とみゆは三賢人の前に立っていた。

灯は記憶を頼りに三賢人の部屋を探していたが、迷うことなくそこまでたどり着いていた。

三年ぶりの対面となったが、デネブ、ベガ、アルタイルの三人は冷やかな目で灯の事を睨んでいた。

「やはり…ここにたどり着くのはお前か」

「歴代護門徒の中で最強にして、非情な実力者…」

それは灯のことを認めての発言だった。

それだけに敵側に回ったことを惜しいとも思っていたのかもしれない。

「何故、我々を嗅ぎまわっている？」

「お前が姿を晦ます三年前までは全て順調だったはずだ」

「そつだ。お前の望むものは全て与えていたはずだ…」

まるで過保護の親のような発言だった。だが、灯の放つ言葉は正反対のものだった。

「もう…見せ掛けだけの付き合いにはうんざりしていたんですよ。」

あなた方が私に隠し事をしていたこともそうですが、それに利用されていたことを知ったことが一番の原因ですよ」

その言葉を聞いて、三賢人は灯が本当の目的を知っているのだと思っただ。

「その口ぶりだと、知ったのだな…我々の本当の目的を…」

「ふーん…だが、どこまで知っているのかだが…」

「しかし、話だけでは理解はできまい。

だから一つ提案だ…我々の側に付く気はないか？

お前ほどの実力者をこのままにしておくのは勿体ない。この先も悪いようにはしない」

あっさりと裏切り行為を無条件で許すという三賢人に灯は苛立ちすら感じた。

「どういふことですか？私は一度破棄された身ですよ？」

「我々は利を取るのだ。くだらん感情はそこには必要ない」

「その通り…だが、息子の命だけは諦めてもらおうか…」

月夜海。彼はお前の心を動かす唯一の不安材料だ。これまでの凶行を考えれば当然だ」

「つまり、息子は諦めると…」

「ああ…恐らく嫌でも諦めなければならぬと思うのだが…」

「どづいっ意味だ？」

「柊リオという我々の子どもがいるのだからな。彼に全てを任せている」

「月夜海、暗殺計画のな…一応お前もその中に入っていたんだが、リオには荷が重過ぎるだろう」

みゆはそのことを聞いて、初めて会話の中に割って入った。

「海だと！おい、灯、海はあなたの息子なのか？」

「ああ…そうだ。三ヶ月前のことは聞いていたから知っていたが、申し訳ない。」

「隠すつもりはなかったんだが、こう見えても息子の事を大っぴらに話したくないんでね」

「そうか…でも納得だ…あいつが、何であんなに強いのか」

みゆは海のことを思い出して、灯とどこか似ていると思っていた。

すると三賢人が今度は口を挟んできた。

「くくく…果たしてそうかな？」

「柊リオと一度戦い敗れている…」

「しかも瀕死の重傷だったらしいが、またこの城に入り込んだと報告を受けた」

「今度こそ絶命は避けられまい」

「これを聞いてどう思う？灯…」

灯の反応を見たかったのだろう。三賢人はにやにやと笑いながら話をした。

しかし灯はあくまで冷静な状態だった。

「それで私が動揺するだけでも？それでも、まあ…気にはなりますがね。」

しかし違う結果が出ているのではないんですかね…」

三賢人にはその言葉の意味が分からなかった。

灯はすつと暗闇に向かって指を差した。

そしてその先に全員がゆっくりと視線を移した。

するとそこには瀕死の柊リオの姿があった。

彼は立花と海との戦いから逃げ、三賢人の元に帰ってきてきたのだ。

ぼろぼろの体を引きずるようにして、血を大量に流しながらずりずりと床を磨るように歩いていた。

呼吸は荒く、小刻みに震えていた。

「リオ！」

デネブはリオの姿を見て驚きの声を上げるしかなかった。

「まさか…貴様、敗れたのか！月夜海に！」

ベガは怒りを露にしていた。

そしてその一部始終をアルタイルは静かに見ていた。

眼鏡の奥の表情は、怒っているのか、驚いているのか分からなかった。

「僕は…ごほ…負けては…いない…こんな傷すぐに治るんだ…治るはずなのに…」

よたよたと三賢人の前に崩れるように膝をついた。

「治らない…治らないんだよ。

ねえ…どうして？いつもなら…こんな傷治るはずだよ。それが…何で…」

リオは怯えるようにがたがたと体を震わせていた。

大量に血を流しすぎたせいもあつたのだろう。

思考はまともに働いておらず、意識をいつ失ってもおかしくなかった。

「まさか…不死と不老の同時進行は失敗だったというのか？」

評議会の連中に与えた、急速の回復の力である不死は成功だったが、

まさか…リオには不老の力しか得られなかったということなのか？」

デネブはリオの体を見直し、一つ一つの傷を確認していた。

「そんなはずはない。今まで、彼に行つた拷問の数々で不死も証明されている。

体をばらばらにされても生きているはずだ」

「しかし…傷が治っていない。これは失敗だったのでは？」

デネブとベガがリオを囲んで言い争いをしていると、アルタイルは静かに言葉を発した。

「慌てるな…やはり我々のような同時融合は無理だったのかもしれない。

しかしある程度の結果は見られたんだ…これは決して無駄ではないさ」

三賢人はまるでリオのことを子どものように見ていなかった。

それは、物か何かのようで決して愛情を抱く対象のものではなかった。

灯もその様子を見ていて痺れを切らしたのか、割って入ろうとした。

その時、まるでその行動を遮ろうとするかのように海と立花がその部屋へ足を踏み入れた。

その場の空気は固まった。いや、時間が止まったと言ったほうが正確だろう。

その部屋の全ての人間が動きをぴたりと止めてしまった。

そしてその止まった時を動かしたのは海だった。

50話

「お…親父」

俺はそんなストレートな言葉しか出なかった。

柊リオを追いかけてここまで来たら、三年前から会っていない親父の姿があった。

しかも尾上みゆというおまけ付きでだ。

「海…」

親父は俺を見るなりやさしく微笑んでいた。

「やはり、お前は俺の息子だな。この道避けて通ることはできないとはな…」

俺は親父にたくさん聞きたいことがあった。しかし今はそんな状況ではないのが見て分かった。

柊リオは瀕死の状態のまま、それを取り囲む知らない三人。

普通ではないことは、はっきりとしていた。

こいつらが話しに聞いていた三賢人。

アルタイル、ベガ、デネブか…

「月夜海と柴木立花か…まさか二人とも生きているとはな…」

三賢人の男達は俺と立花をじろじろと見て険しい表情をしていた。
すると立花がいきなり三人に話しかけた。

「おい！どういうことだ！私を殺そうとするなんて！あなたたちには十分協力してきたはずだ」

自分を殺す理由を知りたがっていたので、その質問が真っ先に出たのだろう。

しかし三人はふふふと笑っただけだった。

「協力？ふふ…十分協力してもらったから殺すんだよ」

「そうだ…お前は簡単に話せば用済みってことだ。」

それに内部事情を多く知りすぎた上に敵に協力していること自体が反逆行為だ」

「金だけを黙って差し出せば良かったのだ。余計なことをするからそうなる」

まるで立花が全て悪いような言い方だった。

立花は悔しくてしょうがなかった。だから拳をぎゅっと握り締め、少し俯いていた。

自分は金だけを差し出す存在…じゃあ、これまでの私は何のために生きていたんだ？

そのことが頭の中をぐるぐると駆け巡っていた。

「お前の能力は正直高く買っていた。

しかし数年前に身边を調べた結果、あの八鬼に肉親が存在するといっじゃないか…」

まさか…そんな表情を立花は見せた。

「何故それを？私の両親ですらそのことは知らないはずだ…」

「我々を見くびるな。それぐらいの調査など容易くできる…

だから護門徒候補者に選んで殺させようとしたんだ。

それが…灯の息子と組んで共闘するとはな…」

「結局、隠し事が多いのは、お前も一緒ということなんだよ。

寝返った時点で我々にその質問をすること自体がおかしい」

「自分を正当化するな！」

正論をどんどん並べられ、あれだけ口が達者な立花も黙っていることしかできなかった。

それから三人の視線は俺に移された。

「月夜海…お前の実力を甘く見ていたようだな…

まさか、我々の存在に近い柊リオに致命傷を与えとはな…」

「だが、そうとは言い切れないだろう？」

こいつはただの失敗作だったということだ…我々を追い求めた結

果がこうなっただけだ」

そこまで話すと、リオが弱弱しく口にした。

「僕は…あいつに…負けてなんかいない。

だから頼む…この傷を治してくれ…あんたたちの力なら出来るだ
ろ?」

終リオはそう言って、ベガのズボンの裾を掴んでいた。

掴まれたのを見たベガの顔は強張った。

「お前…誰に向かって口を利いているんだ?

今までの傍若無人振りを見過ごしたのも結果があったからだ…
それが、今、この醜態を晒して同じことが通じると思ってい
るのか?」

「え?」

リオには理解できなかった。

今まで自分の言うことを何でも聞いてくれたはずの彼らが掌を返
したような態度に出たからだ。

「お前は所詮、我々の計画の一部に過ぎない。作り上げられた研究
体が夢を見すぎたのだ…」

アルタイルも冷酷な言葉を投げかけた。

「お前はそのまま朽ち果てる」

ベガは足を上げると、リオの手を踏みつけ、蹴飛ばした。

その様子を大人しく見ていたが、あまりにもひどい言葉を投げかける三賢人にだんだん腹が立つてきた。

「そこまで言うことはないだろう！」

リオを哀れむ気はなかったが、自然とそんな言葉が出てきた。

するとベガは、苦しむリオを踏みつけながら笑っていた。

「ははは！お前は…本当に人がいいな。」

こいつに命を奪われようとしていたのにな…

しかし…心配するな。こいつは人ではないんだ。

我々が遺伝子を提供して、作り上げた人でもない生物だ…

生かそうが殺そうが、我々の自由なんだ」

「リオは…作られた人間なのか？」

俺の声のトーンはいつもの倍以上になっていた。それだけ興奮していたのだろう。

「その通りだ。こいつは所謂、試験官ベイビーって奴だ。」

あらゆる生物に通じる工程を無視して生まれている。

成長促進剤を与えることで、この三年で人間の十七歳という年まで成長した。

この時点でもう、人間とは呼べないだろう…

それを殺したところで殺人の定義には当てはまらない」

「く……」

次々と並べられる正論はただの御託にしか聞こえなかった。

しかし三賢人たちはそれを誇らしげに話していた。

「生物というパンドラの箱を開けた我々に出来ないことは存在しない……」

人の仕組みは全て解明されたのだ」

「それは人の無限の可能性を広げるもの……」

傲慢だ……こいつらは、人を全て理解した気にいる。

俺は別の意味で恐怖を感じていた。

「だから、私は嫌になった」

親父が三賢人に向かって寂しい表情で語りかけた。

「人を研究対象でしか見ることもできず、心を無視した行為を数々行った……」

革命者になろうとする者がそんな無秩序な行為を繰り返してどうする？」

「灯……お前は全ての恩を忘れたようだな。」

我々のことをそこまで非難できるとはな。

お前だって、人を人と思わなかった者だろうが。お前は我々の同類なんだよ……」

「それを今更否定するとは…」

「息子もいることだ、自分の昔話でも聞かせてやったらどうだ？」

俺の知らない親父の姿があるのだろうか？

興味もあつたが、何も反論をしようとしないうちに見ると、俺は胸が苦しくなった。

「あれは…今のような季節だったな」

そしてアルタイルは親父を無視して静かに話した。

51話

あの時、俺の目の前が真っ暗になったのは良く覚えている。

しかもそれは空の上を飛んでいる最中だ。

何があった？

思い出せない…

強い衝撃で記憶も断片的にしかなかった。

覚えているのは、自分が日本人で、年は十三歳、名は…なんだっけ？

目の前に広がる光景は赤と黒の世界だ。

焼けた匂いと黒煙のコラボレーションは俺の心を深く抉るものとなった。

しかしこれが現実なのか理解できるまでに時間は掛かった。

状況を整理しようにも思考が働いていない。このまま眠った方がいいのかな？

きつと寝てしまえば、これが夢だったと思って再び目覚めるのだろっ。

そんな浅はかな考えのまま目を瞑ろうとすると、人のうめき声が

聞こえて、現実に戻された。

「うづうづうづうづうづう」

それは地の底から響くような、人のうなり声だった。

苦しそうで、声にならない声のようだった。

俺は目を開いてその声のする方を見た。

すると、そこには体に無数の鉄骨が突き刺さった男がこつちを睨んでいた。

「た…助けて…くれ…ご…がはっ…」

喉に詰まった血液が大量に吐き出された。

俺はふらふらと立ち上がり、その惨劇の正体を改めて見た。

そこには巨大な鉄の乗り物の無惨な姿が曝け出されていたのだ。

胴体は何箇所かに分かれ、座席、荷物、そして人があちこちに放り投げだされていた。

当然、人の体も様々だった。

手足はもちろんのこと、あらゆる臓物が飛び散り、焦げ臭い匂いは人を焼いている匂いでもあった。

首が転がり、こつちを眺めている。

瀕死の人物の体は、ずたずたで、欠けているパーツが多すぎた。

このままでは死ぬのは時間の問題だ。

俺はどうなっている？

慌てて自らの肉体の再確認をするが、五体満足でどこもちぎれていなかった。

しかしあちこちが軋むように痛かった。

「た…助けて…」

「死にたくない…」

「嫌だ…」

断末魔の声があちこちから聞こえてきた。

俺は動けるのに、動けないちぎれた体の持ち主が、か細い声を上げながら次々と息絶えていった。

頭がおかしくなりそうだ…

大量の死体、断末魔の叫び、極地の寒さは、神経を蝕んでいった。

壊れる…このままでは壊れてしまっ…

もしも救助が数日後に来たとしても、俺はまともでいられる自信がない。

人が…あんなにも醜い姿で、最後を迎え、更には自分に助けを求め、それを救えないでいる…こんなものってあるのか？

そればかりが頭の中を巡っていった。

こんな生き地獄を見せられる位ならいつその事死んだ方がましだった。

ちくしょう…何で、俺だけ生き残ったんだよ。

そう思い、自らの周りを見回すと、両親だと思われる人物の遺体があった。

二人は手を取り合い何かを守るように死んでいたのだ。

それが自分だということは何となく分かっていた。

だが…記憶がない…

この人たちは父親と母親なのだろうか？

そんな疑問が残ったからだ。

でも、自然と涙だけは出ていた。

「く…うつ…うつあああああああ」

記憶も無い、人の死を見続けこの場にいらなくてはならない。

そんな過酷な状況を余儀なくされ俺は呆然と立っていた。

「助けて…足が…足があ…腕が…どこかにいつてしまったわあ…」

「目が…目が見えない…ここは、どこだ？」

「誰がいるのか？体を…俺の体を捜してくれ」

止めてくれ…

「死にたくない…死にたくないよあ…」

「助けてよ。お母さん…どこにいるの？ねえ…返事をしてよ」

止めてくれ、止めてくれ…

「く…苦しい…」

「痛い…痛い…嫌だよ、こんな痛いのは…」

「死にたい…死にたい…」

「殺して…」

止めてくれ、止めてくれ、止めてくれ。

「止めてくれえ！止めてくれよあ！」

俺は…俺には何も出来ないんだよあ！頼むから静かにしてくれ！」

俺は両耳を塞いだ。

寧ろ引きちぎりたかった。

生きながら地獄を見続けなくてはならないのか…それなら…このまま凍死したほうがいい。

ここは極寒の地だ。

何もしないでこのまま眠っていれば、死ぬる。

無理に生きようとしても…俺の頭が壊れてしまふ。

そして俺は考えることを止めた。そのまま黙って静かに眠ることだけを考えた。

すると、二度目の暗闇が自分に襲い掛かった。

52話

二度目の目覚めは場所が変わっていた。

「じじは…」

俺はいつもと違うベッドの上で寝ていることを知った。

「まさか…助かったのか？それとも…夢だったのか？」

部屋の中を見回して、明らかに自分の家ではないことを確認した。

頭痛がして、体中がずきずきと痛んだ。

何かを思い出そうにもすぐには出てこない。

どこなんだ…ここは…

はつきりとしらない頭の中で必死に考えようとした。

すると、奥のドアが開いて一人の男が入ってきた。

「目が覚めたようだね…」

その男は若い男性で、背が高く黒髪の長髪で眼鏡を掛けていた。

「え…あ…うあ…」

突然の事で声も出なかった。

頭の中はぐちゃぐちゃのままだ。

「無理に言葉を出そうとしなくてもいい。

あれだけの惨劇を目の当たりにしたんだ。

少しの休息が必要だ…ここは、病院ではないんだが、君の体ぐらい治せる…」

治るまではゆっくりしたらいい」

そう言つてその男は部屋を出ようとした、その際に自らの名を「う名乗った。

「私は…アルタイルだ。よろしく」

あれから一週間が経とうとした。

俺の体はすごい勢いで完治していった。

まあ、元々の怪我が致命傷ではなかったということもあった。

それでもその様子を見ていた、アルタイルとその仲間であるベガ、デネブは驚いていた。

「これは…」

「体内の氣が開放状態なのか？」

アルタイルに答えを二人は求めていた。

「確かに、中医学で記されている原気が常人の数倍だ、元々の特異体質だったのだろうか。」

いや…人間本来の力をこの子は持っているんだ。失われた人の能力をな」

「すばらしい…我々とは対極だということか」

三人が何を話しているのかは分からなかった。

だが、俺の体は人という生物上は普通なんだが、今の世の中では普通ではないってことが分かった。

しかしそんなことを気にも留めることなく、毎日過ぎていた。

そこで少しずつ分かったことは、俺が巻き込まれた惨劇は飛行機の墜落事故だったということだ。

それが何の原因で起こったのかは分からない。しかしあの時に生き残ったのは俺だけだということは、はっきりとしていた。

声はあれ以来未だに出なかった。それに感情のコントロールも上手くできない。

まるで心が死んでしまった感じというか、無感情になってしまった。

「…」

ずっと無言でいる俺に、三人はいろんな治療と称しているんな検査を行っていた。

よほど俺という生物が珍しかったのだろう。

何度も何度も丹念に傷つけることはなく、調べていた。

そして一ヶ月が経ち、冬の寒さが本格的になってきた頃、俺はその三人に正式な養子にならないかと申し出られた。

しかしあることを条件に出された。

「君にももしその気があるならで結構だ。

私たちと同じ道を歩んでくれるというのなら、是非養子に迎え入れたい」

その意味は分からなかった。しかしこの人たちは何かをしようとしているのだけは分かった。

とてつもなく大きな何かだ…

その道に踏み込んでいいのだろうか？そんな疑問が頭の中を過ぎるが、俺には判断ができなかった。

この先生きていくのに道を指し示してくれる人物は必要だ。まだ俺一人では生きていけない。

そう思ったとき声も出ない俺は、無言で首を縦に振ってその申し入れを承諾した。

「ははは…そうか、それならこれから正式に手続きを行うとしよう」

た。
彼らはきちんと政府を通して、書類を作成し俺の親権を手に入れ

53話

「全てが整った。だから、我々のことも話しておこう」

晴れて彼らの養子となった俺に向かってアルタイルが話をした。

「神徒協会…それが我々の作り上げた組織だ。

神の使徒として世界を導くという意味を込めている。

この世界は不完全で、そして数々の不可思議な現象があるものを通じて起こっているのだ…」

それが何のことかは分からない。

「この世界には時の門と言って、七つの門が存在するのだ…

それは別の世界と繋がっていて我々の世界に多大な干渉をしている」

「高度な文明だったり、得体の知れない化け物だったり…」

「門は完全に開くことはない…」

しかし、門が完全に開くことになったらそれは、この世界の終わりなんだ…」

「向こうの世界から開け閉めされる門には、その開かれる時間は特定できない。だから門番を置くのだ」

「それが護門徒。彼らがずっと門を見張り、開こうとしたらそれを未然に防ぐのだ。

そうすることで、この世界は崩壊しないですんでいる…」

「ぎりぎりの状況なのだよ…
だから我々はあの門を長年かけて研究しその原因を突き止めよう
としている。」

そしてあと数十年で今までの成果がきつと報われることだろう」

「つまりだ…養子になったということは、お前も護門徒になること
を目指してほしということだ。」

我々と同じ道を歩むということはそういう意味なのだ」

三賢人と呼ばれている彼らの口からは、まるで世界を救う殉教者
のような言葉が出てきた。

俺はそれを聞いて、彼らと同じ道を歩もうと決めた。

人類を救う立派な仕事だ。そして俺にしかできないことがあるの
ならそれをやり遂げよう。そう決意した。

それが、あの事故で生き残った俺にできる唯一の生きる道なのだ。

「だが…護門徒になるにはその道も相当険しい…」

時には非情にならなくてはならないし、お前自身にも命の危険は
常に付きまとう。

それでもいいか？」

確認をするようにデネブが俺の方を見た。

その目は真剣そのもので、飲み込まれそうになった。

だが、俺の腹はもう決まっている。

だから、それでも構わないと目で彼らに知らせた。

「いいだろう…：それならお前の能力を全面的にこれから伸ばしてやる」

それから三年間、彼らの元でいろいろな修練を積みまされた。俺は強くなつていった。内面も外面も…

しかし言葉は未だに出なかつた。

十七歳の誕生日を迎えたとき、俺は一つの試練を与えられた。

「ここに行って、この組織を壊滅して来い。それが最終試験だ」

一通の封筒を渡された。

そこには、地図とそこにある組織の詳しく書かれた情報が書いてあった。

無言でそれを受け取ると、俺はそのまま三年ぶりの外の世界に出た。

季節は夏だった。

じりじりとした世界が目の前に広がるのだろうか？

城から三年間出たことのない俺からすればそんな想像をしていたのだが、

北欧の夏は日本とは違い、風が冷たく気温も低かった。

少し戸惑いながら、俺は目的の場所へと移動していた。

乗り物の知識は与えてもらっていたので、

どうにか車、バイクを使って、丸三日掛けて無事に地図の場所にたどり着いた。

神徒協会本部から数百キロ離れたこの場所は、灰色の景色の中に溶け込む小さな山の奥だった。

こんな偏狭の地に五十人近いゲリラの部隊がいるのだろうか？

しかし神徒協会を襲撃するような野蛮な連中だ…きっと隠れるように暮らしているのだろう。

辺りを見回すと、人の住んでいる痕跡が見えた。

来客用のトラップも数々用意されているようで、不穏な空気が流れていた。

ま…そこまでするには用心していることだろう。だが、俺からすればそれも丸裸だ。

五感が研ぎ澄まされ、些細な音や気配も見逃さない…俺は殺される気など毛頭なかった。

しかし俺は今回の襲撃に当たって、制限を加えられていた。

それは武器を一切持たないで潜入することだ。

相手の持つ武器やその場所にある物なら使用を許可され、空手のまま俺はその場にいた。

敵の出方を伺おうかとも思ったが、そんな時間は勿体ない。

俺は自らの感覚に身を任せていた。

トラップをすいすいと掻い潜り、見張り役の奴らを数名見つけると、音もなく彼らの首の骨を折って黙らせた。

ここまでは順調だ：武装している数十人に真っ向から勝負するのは馬鹿だ。

それなら少しずつ数を減らしたほうが良い。

考えるよりも体は動いていた。

黒曜石を剥離させて作った短剣を握り締めて俺は、次々とゲリラの数を減らしていた。

そこには一切の感情はない。淡々と人を動かさなくさせる単純作業の繰り返しだ。

意表を突かれた人間の取る行動は分かりやすい。

だから俺はその先を呼んで声をあげる前に殺していた。

何人も何人も…

確実に絶命する方法を取って、首を頭を心臓を狙って突き進んで
いた。

もう二十人以上殺した…

だが、そこには何も浮かばないし、心も動かない。

54話

そして三十人ほど黙らせて、本部と見られるバラック小屋を見つけると、一度呼吸を整えようと思った。

流石にこれだけの人数を殺せば体に何らかの異変が起こるのでは…

そう期待にも似た感情を抱いてみたが、何も起こらなかった。

そして大詰めに入ろうと思った瞬間、

「ガキ一人で乗り込まれるとはな…」

「ああ…恐れ入った。神徒協会も流石だな。

こんな若い奴が我々の組織の人間の五分の一をこれだけの短時間で殺すなんてな…」

俺は取り囲まれていた。

しかも十数名という屈強の男達にだ。そして彼らの全てが銃なりナイフなり武器を握っていた。

神徒協会の情報は間違っていた。

この組織は五十名ほどではなかった。その三倍の人数がいたのだ。

まずいな…これでは、戦力の差で負けてしまいかもしれない。

諦めることは嫌いだが、それも想定内に入れていた。しかしピン

チだというのに一向に心は無反応だ。

どうして…ここまで落ち着いている。

「神徒協会は我々の組織と思想を共にすることのできない偽善者集団だ…」

今の世の中は表から変えるのではない。

裏から変えるものだ…それを思い知らせるためにもお前を無残な死体に変えて神徒協会に送りつけてやる」

「ガキだからと言って容赦はしない。

同胞を殺されたのだ…これは戦争だ。互いの命を奪い合うのに子ども大人も関係ない」

「そうだ…今更命乞いなど聞く気はない」

「お前はここで死ぬのだ」

だが、俺はその場では殺されなかった。

一旦体を縛られ身動きを封じられると、集落の中心に連れて行かれた。

きつと公開処刑をされるに違いない。

あれから三十分、銃器で脅されながら歩き続けた。

さて…どうしたものか。

俺はいろんな展開を考えていた。

「神徒協会め…三年前の旅客機墜落を機会に少し落ち着いたかと思
つたが…」

「こんな暗殺者を送り込んでくるとはな…」

一人の男が俺を後ろから銃で突きつけながらぶつぶつと話した。

三年前…まさか…

俺の脳裏に過ぎつたのは、あの時の惨劇だった。

「旅客機には彼らの同士がたくさん乗っていたからいい様だったが
な…」

「その通りだ…それで我々の存在も脅威も証明された」

頭が痛い…

呼吸も苦しくなってきた。

「だが、未だにそれが伝わらないのは解せないがな…」

「こいつを解体して、一個一個、体のパーツを送り込めば少しはこ
たえるんじゃないのか？」

何だ？これは…俺の…心が…じんじん痛んでくる。

「なるほど…それも一理あるな」

「これを機に神徒協会の奴らを一気に畳み掛けるチャンスだ」

人の焼ける匂い…

叫ぶ声…

苦痛の表情…

散乱する体のパーツ。

それぞれがフラッシュバックのように頭の中を一瞬で流れていた。

「あ…あ…」

ふるふると体が振るえ、声にならない声が出てきた。

「何だ？こいつ…急に声を上げたぞ？」

「怖くなつたんじゃないのか？」

「違う…俺らの話を聞いてたら当然だ」

あれは…仕組みられたことだったのか。

こいつらが…こいつらが…俺にあんな地獄を見せたのか？

だとしたら…無関係のあの人たちは…俺の両親は…何も悪くないの…

俺の足はぴたりと止まった。

それを見たゲリラの連中は腹を立てた。

「おい！何止まってる！歩け！」

持っている銃の先で俺の背中をぐいぐいと押し付けた。

「ここで殺しても構わないんだぞ？あ？」

「早く動け！このうすのろ！」

連中は俺の事を罵り、虫けらのように扱ったが、俺は言葉を失って以来始めての言葉と感情を表すことになった。

「ふ…ふざけんなあ！」

心から叫びながら大地を蹴って移動した俺の姿は奴らの目には映らなかった。

後ろ手に縛られた縄など、間接を外してしまえば抜けられる。そのことを一瞬で可能にしながらそのまま道の脇の生い茂った林の中へ飛び込んだ。

「何だと！」

奴らは十数人が固まって移動していたので、俺の後をすぐに追うことはできなかった。

そして俺は逃げる選択肢を選ばなかった。

ここで奴らを壊滅させる。

その気持ちだけが強く心に残っていた。

奴らは俺の逃げた先を必死に探そうとした。きっと遠くに走って逃げた、そう思っていたのだろう。

だが…

俺は奴らの後ろに回り込んで、一人の男を音もなく雑木林の中に連れ込むと、頸椎をひねって殺した。

それを他の連中に悟られることはなかった。それは、視線がみんな俺の逃げた方向に集中していたからだ。

俺は木陰に隠れて、殺した男の武器を奪った。短銃とナイフ…

リボルバーではなくオートマチックか。

替えの弾倉は二つ。ということは、全部で銃弾は三十六発…

ここにいるのは全部で十五人…

十分すぎる武器だ。

俺は一瞬でこの戦場の流れを組み立てた。そして行動を移すまでに三分と掛からなかった。

わろ…

草を掻き分ける音が戦場を駆け巡る。

敵はその音を聞いてはっと立ち止まった。

馬鹿が！

こんな密集した状態で立ち止まりでもしたら格好の的だ。

俺は銃弾を的確に相手に向かって打ち込んだ。

その数、秒間三発。

四秒で一つの弾倉は空になったが、相手は五人倒れていた。

長距離での射撃でこの人数殺せれば十分。相手がパニックに陥る。

予想通りに相手は銃撃の音を聞くなりそれぞれその場を離れた。

しかし俺は逆に距離を詰めた。

至近距離になれば俺の殺傷能力の精度も上がるのだ。

移動しながら新たな弾倉を銃身にはめ込むと、数メートル先には敵の姿が見えた。

すかさず、俺は銃弾を敵の頭に向かって確実に打ち込んだ。

声を上げる間もなく二人、三人とその場で息絶えた。

生き延びた奴らは俺の姿を見て、すぐに襲い掛かってきたが、触らせることもなく頸動脈を持っていたナイフで切り裂いた。

これで十人殺した。

残り五人。

十分すぎる武器で俺は相手を追い詰めていった。

ここまでくれば弱いものいじめだ。だが、そんなの関係ない。

彼らには彼らの最後があるのだ。それが、罪の象徴だ…

戦力差を圧倒的に見せ付けると数人は諦めを見せた。

しかし泣きながら命乞いをする奴らを前にしても俺は非情に殺した。

自らの手と体は血まみれになっていた。そしてその場には十人以上の死体が転がっていた。

気持ちがつつきりすることも晴れることもなかった。

ただ虚無の世界だけが目の前にあったような感覚だ。

三年振りに言葉が出たのに…

今の俺を突き動かしているのは、家族の復讐と神徒協会の仕事だった。

一致している内容に違和感を感じながらも残党を退治するために

俺の足は動いていた。

それからの行動の結果は分かりやすかった。

相手の武器庫を利用し、爆薬と武器を使ってその集落を壊滅させた。

百五十人近い人数を葬ったのにも係わらず心は少しも動かない。

言葉が出た時に感じた怒りの感情以外に何も感じないのは以前と同じだったのだ。

「はは…何にも感じないのかよ…」

思わず笑みがこぼれてしまった。

死体の山を目の前にしても俺は無感情だった。

振り返ることもなく、そのまま壊滅した集落から俺は立ち去った。

55話

「それで…どうだった？」

いきなり直球で質問が飛んできた。

しかしベガの表情を見る限り全てを知っている顔だった。

俺は少しむっとした感じで答えた。

「おかげさまで声が…出るようになりましたよ」

「そうか…それは何よりだ」

「あなたたち、あいつらが俺の乗っていた旅客機を襲ったゲリラだつてこと始めから知ってたんですね」

「ああ…そうだよ」

アルタイルは悪びれた様子もなくはつきりと話した。

「荒療治にはなるかもしれないが、君には過去の自分と向き合った
めでもあったんだ。

その結果君は打ち勝った。だから声も取り戻すことができたのだ。
何か問題か？」

「くっ…」

俺は正論を並べ立てられ何も言えなくなった。

「今更、人を殺したことを悔いる必要がお前にあるのかな？」

「そうだ…そんなくだらない定義をお前は持ち合わせていないだろう？」

それぞれが言いたいことを口々に話す。

「生粋の殺人者なんだよ。だから才能に溢れている…」

しかしそれこそが生物の本懐だ。恥じることも悔いることもない。それがなくては生き残れないのだから。弱いものは殺され食べられる。

それが自然の摂理というものだが、人という生物のみにそれは許されない…それは何故か。賢いからだ」

「人は進化の過程で、知識を得る代わりに生物本来の闘争本能と狩猟技術を薄めていった。

代わりに自らの安全を求める手段ばかりを増やしていったのだ」

「それが、理性であり、人の作った法律というものだ。

まあ…我々は知能を与えられた人間側だ。それを批判することはおかしいのだがな」

「だからお前には憧れと期待を抱く。人という本来の能力を全て持っているのだからな。贅沢な奴だ」

勝手なことをまあ、次々と…

俺は褒められているのだが、大して嬉しくもなかった。

確かに俺の体は変だ。

五感というものが常に研ぎ澄まされていて、生物の発生する気配を瞬時に感じ取り、

相手をどんな方法でも絶命させられる。

そこに心も存在しないからだ。

虚無の世界だ…自分には常に真っ白な世界が広がっているのだ。

三年前きつと神様は俺にとんでもない試練と力を与えたんだ。

それから数ヶ月後、俺は護門徒候補者争いというものに巻き込まれていた。

生まれ故郷の日本の門を護っていた前任の護門徒が引退を決意したらしく、その後釜を決めるためだった。

俺を含めた候補者六人は、日本の八坂市に集められ、そこで候補者争いという名の殺し合いのゲームをさせられた。

だから俺は実に四年ぶりに日本の土を踏むことになったのだ。

季節は十一月。木の葉の色は赤や黄色に染まり、風は冷たかった。

本当は自分の家を見たかったが、

神徒協会の養子となった時に処分されてしまったので俺の過去の

思い出は一切合財なくなっていた。

それでもここへ戻ってきたことは嬉しかった。

三賢人は俺が旅立つ前にこう話した。

「これは出来レースなんだ…」

周りの者に示しをつける上でこういう形式を取ったのだが、お前が護門徒になることは確定している」

「それは…どうして、そう言いきれるんですか？」

「我々が見込んだ者たちは、ここで鍛えられるのだ。

何年も掛けて我々の技術を叩き込む。だから他の候補者には決して負けることはないのだ」

「例外もなく？」

「ああ…数百年そうしてきた。

そうしないと、外部の人間が力でねじ伏せて入ってこようとするからな。」

あの門のことは我々だけが知っている。だから…外部の人間を組織内に入れることはまずいのだ」

そこまで門のことを隠そうとするのには理由があるのだと思うが、何度も彼らが話したことは門の開放状態を防がなくてはならないということだけだった。

開放されれば世界は終わる…ただそれだけだと。

俺は大してその話に裏があるとも思わなかった。

逆にそれならば、と自らの使命感に燃えていたのかもしれない。

「いいか…必ず他の五人を殺せ。生かしておくは無駄な敵を作る可能性もあるからな」

「最初の話しでは、戦意喪失させればいいとありましたが…」

俺は聞き返したが、三賢人は何も言わなかった。

なるほど…これも表向きの規定って訳か。

「分かりました。俺は、自分の仕事をします」

そのまま決意を固めて歩き出そうとしたが、三賢人の一言に引き止められた。

「灯…我々とお前の関係はここまでだ」

「お前が、護門徒になることは分かっている。

この先は日本で護門徒の仕事をするがいい…つまりお前は自由なんだ」

「自由…」

「ああ…護門徒になったら教えられたように自らの仕事をこなし、後は好きにしるということだ」

まるで適当な感じの言い草だ。

しかしそれはそれで気が楽だし、これからの自分探しにも繋がるのだろうか？

「ただし…我々の許可なしに二度とここへ足を踏み入れてはならない。それだけは肝に銘じておけ」

ベガは脅かすように強い口調で話した。

「では…お前の任務の成功を祈っている」

こうして大した疑問も抱かないまま俺は、言われた通りに事を進めていった。

56話

体中を吹き付ける風が厳しい秋の夜。

俺は真っ赤な血の海の中心にいた。

呼吸を乱すこともなく、心拍数だって正常のままだ。心にある虚無の世界は未だに変わらない…

自らの足元には五人の死体が転がっていた。

さっきまで俺と話していた奴らだ。

それは今から数分前のことだ。

「それで…俺たちをここに呼び出したのは何故だ？」

暗闇に集まった六人の男女。

勿論その中に俺もいる。

「だってまどろっこしいだろ？それぞれが探しあつて殺しあうなんて。」

それなら、ここで一気に決めた方が早くないか？」

俺はここに護門徒候補者の五人を集めた。

彼らの居場所は聞いていたから、探すのは簡単なことだった。

一人ずつ闇討ちしてもいいが、それも面倒だ。それならと思い、それぞれの住んでいる場所に手紙を送りつけた。

『十一月二十三日、午後十時。下記の場所において護門徒後継者争いを行う。』

もしも参加しなかった場合は、候補者争いを破棄したとみなし、重大な厳罰を下されることとなる。

神徒協会評議会より』

これは俺が作った偽の文章だ。

評議会が護門徒候補者争いを仕切ることないのに、奴らはそれを信じてまんまと騙されこの場所に来ていた。

ここは八坂市の端に建ち並ぶ造船工場の一つで、絶好の闘技場でもあった。

周りに迷惑が掛からず、目撃者もおそらくいないだろう。

全て俺の目論見どおりだ。

「こんな手紙に騙されるとはね……」

唯一の女が手紙を俺に向かって破って見せた。

「さあ…どうするんだ？」

俺は懐からダガーを取り出した。これは三賢人が俺にくれたものだった。

金で出来た持ち手に黒い刃。

見ているだけで禍々しい雰囲気を漂わせているが、俺はこれに気が入っていた。

それはいくら物を切っても刃こぼれもせず、切れ味も衰えないからだ。

「ここまでお膳立てしてもらったらやるしかないだろ？」

俺の身構えた様子を見て回りはざわめく。

「ああ……」

「この中で生き残ったものが、護門徒になれるのだ」

「異論は？」

「ないわね……」

他の五人は顔を見合わせて話をしたが、誰一人として反対しなかった。

それなら話が早くていいな……

そして俺は相手が動く前に既に動いていたのだ。

初動は格闘の最大の基本。

それが殺し合いになれば尚更で、相手のペースを作られる前に動いてしまえば、負けることはないのだ。

足音をさせることなく動く、一番近い場所にいた男の首筋にナイフを一気に突き刺した。

「え？」

他の四人の動きが一瞬止まった。刺された本人は理解できていなかった。

鮮血を撒き散らしながら声も上げることなく瞳孔を大きく開いて死んでいった。

「くそお！」

四人はすぐにその場から離れた。しかしそれこそ俺の思う壺。

散開する場所など手に取るように分かる。

ましてや初動を俺に掴まれているのだ。次々と目の前にいる敵を切り刻んでいった。

集まった四人は俺とは違い能力者だった。

自らの体の一部を金属に変化させたり、
脳に直接影響を与えて幻覚を見せたり、
周囲のものを変形させて

武器にしたり。

だが、何の能力も持たない俺に殺されている。

能力はないが人間の持つ本質をフルに発揮できることはある意味最強なのだということも分かった。

相手が繰り出す能力など、全て人の作り出したもの。その本人の思考次第だ。

俺の五感は研ぎ澄まされている。技を繰り出そうとする者の考えなど手に取るように分かる。

それに…相手が金属になるというのならそれでも斬る。

思考を読むというならそれ以上の動きをする。

そして地形までも変化させ攻撃できると言うなら全ての攻撃をかわしてみせれる。

こうして五人の死体は俺の前に転がっていった。

血にまみれたダガーを握り締めて俺は、ふっと一息ついた。

始めから決められた結末…正にその通りだったな。

57話

「どうかな？今の話を聞いて」

「君の父親は最強にして、非情な人間なのだよ」

「それを物語ったかのように護門徒候補者争いを歴代の記録を塗り替え、

異例とも思える僅か五分で決めた…」

「親父は黙っていた。」

その話を聞いて俺はどう答えていいのか分からなかった。

しかし親父の事を今までとは違う目で見るとはしなかった。

俺の親父は…本当に…優しい人だから。その記憶だけが俺の中にいつまでも残っている。

あの手の温もりと笑い顔…

それは三年前と変わっていないはずだ。

「海…」

今まで黙っていた親父が遂に口を開いた。

「今まで騙っていて悪かったね。何一つ父親らしいことしていないんだから…」

にっこりと微笑んで俺の目を見ていた。

それは自らに嘘偽りが無いと言わんばかりの意思表示とも思えた。

だが…その笑顔は懐かしい。

俺の知っているあの頃の親父だ…

「と…」

父さんと言葉が出かけた瞬間、

「まあ…こんな父親だけだね。私にはやらなければならないことがあるんだ…」

急に親父の視線は三賢人に移された。

「お前らの未来を奪つことは…私が許さない」

その目には殺気が込められていた。俺の背筋は凍っていた。

これほどまでの殺気を放てる人間を俺は知らない。

冬香も蓮もみゆもそしてあの三糸織斗ですらここまでの殺気を放つてはいなかった。

「…いつ…」

みゆも驚いていたようで、汗が頬をつたうのが見えていた。

本気だ…

親父は本気でこの得体の知れない三賢人とやらと殺し合いをする気だ。

「ふふ…威勢がいいのは結構なことだ。

しかし…我々の計画はもう動き出している。誰にも止めることはできないのだよ」

相変わらずの余裕っぷりだ。

俺には彼らは負ける要素がどこにもないといった感じにしか見えなかった。

「それに…」

三賢人の一人、ベガは側の花瓶に入っていたバラをつまみ上げると、一瞬で枯らしてしまった。

何が起こったのか理解ができなかった。戸惑っている内にベガは枯れたバラをデネブに投げつけた。

「お前らは我々には勝てない」

そしてデネブはそのバラを受け取ると、元通りに戻した。

まるで手品のようだったが、俺にはそのタネすら考え付かなかった。

デネブは何事もなかったかのように元通りになったバラを花瓶にさした。

「灯…どうかな？」

親父に力を見せつけ、それでもやるのかと言わんばかりの表情をしていた。

焚きつけられて真っ先に殺しに掛かるのかとも思ったが、能力の正体も分からない相手にそれはない。

「時…ですね」

親父はそんな言葉をぽつりと口にした。すると三賢人の表情は固まった。

今までのような余裕のある雰囲気ではなかったのだ。

「あなた方は、時そのものを操れるのだ。それも、広範囲のものでなくごく限られた範囲で…」

「ほう？それで、どう扱えると言うんだ？」

「ベガ…あなたは時を進めることができ、デネブ…あなたは時を戻す。」

そしてアルタイル、ここまで話せば分かると思うが、あなたは時を止められるのだろう。」

そう、三賢人は時の支配者だったんだ」

親父の話したことは間違っていないかったのだろう。その証拠に三

賢人は何も否定しなかった。

「私がこの三年間何もしていないと？あなた方の情報を必死で集めましたよ…」

同胞を何人が殺す羽目にもなりましたがね…」

その目はどこか寂しそうだった。息子の俺がいるからだろうか？

「自らの秘密をそうそう話すひとたちでもないので苦労しました。

それでも、どうにか時間に関することだけは知りましたよ…」

あなた方は時の稟なるものの力の恩恵でその力を手に入れたんだ

…」

そこまで話すとアルタイルは観念したように親父の話に割って入った。

「そこまで知っていたか…優秀すぎるのも問題ということか…だがいいだろう。」

この世界と門のことを話してやろう。この話を聞く権利は今この場にいる者には相応しい…」

そしてアルタイルは自らの過去を話し始めた。

この世界の終焉となる話を…

科学が蔓延した世界の成れの果ては、酷く醜く悲惨な光景だった。

人の笑い声など存在しない、暗いくらい光のない世界。

この世界に生き物はほとんど存在しなかった。

それは、創造される者が多くなってしまったからである。

人間は知恵を与えられた結果、自らの存在を滅ぼしてしまったのだ。

生殖機能は衰え、子どもを産むことさえも出来なくなってきた。

これは環境の変化も関係していたのだろうが、それも自らの公害が元凶だった。

だから自ら子どもを持たなくなった人類は遺伝工学を研究し、人間を作った。

だが、それは神に対する冒瀆だったのだろうか…天罰は下ったのだ。

この研究に最初から携わった人間は全部で四人だった。

その名は、ポラリス、デネブ、ベガ、アルタイルだった。

二人の男がどこかの山脈で発見された不思議な鉱物を眺めていた。

「ポラリス…これは…その…どういった鉱物なんだ？」

目の前に光り輝く鉱物を見て、アルタイルは聞いた。

「これが…今まで見たことのない鉱物であることは間違いない。

鉱物という表現は当てはまらないのかも…含有成分がどの鉱物にも無いものだ。

まるで卵のような感じだ」

「卵？中に何が入っているのかは分からないのか？」

「そうだ…こいつは未知のもので、扱いは十分気をつけた方がいいだろう。

我々の知識の及ぶものかどうか分からない…それよりも不安も感じる」

「不安？あなたが？まさか…」

アルタイルには弱気なポラリスの発言が信じられなかったのだらう。

「いいか…これはくれぐれも慎重に扱うのだ。全てを解明するまでは手出しはしないことだ」

ポラリスはそのように警告をしたが、金のように光り輝く怪しい

鉍物は、アルタイルの心を少しずつ虜にしていった。

「ポラリス…いつになったらこの研究を進めるんだい？」

デネブはあの不思議な鉍物を発見してから何も進展しない状況に苛立っていた。

「さあな…研究許可が下りないのなら仕方ないことだ。

とりあえず、含有成分等の結果ぐらいは出しているが、

どれ一つとしてこの世界に存在するものに当てはまらない。

これからも分かるように危険なものかもしれないということだ…」

「我々の知識外の物だと言うことなのか？それなら研究をすべきだ
」！
」

「だから、何回も話しているだろう？

国の申請許可が下りなければ、手出しは出来ないんだよ。

それに…今は遺伝工学の分野の研究の方に研究費を割きたいんだ
る？

だから、この鉍物の研究など二の次になってしまっただ」

「それなら、内密に研究すればいいじゃないか、我々として素人では
ない。

慎重に扱えば危険も少ないかもしれないではないか…」

ベガも口を挟んできた。

「俺は反対だ。あれが発見された時に、科学で証明されないような様々な怪現象が起きている…」

ポラリスは三人の意欲を失わせようと話した。

「景色が歪んで見えたり、触れたものが急に年老いたり、若返ったりしたそうだ…」

「それって？」

「詳しいことは分からない。

それが分からなければ、触れるのも側に置くのも危険かもしれないんだ。

それでもやるって言うのか？」

そのことを聞いた三人は怯んでしまったのだろう、何も話さなかった。

「いいか…このチームでは俺がリーダーだ。口出しはするな」

ポラリスははっきりと自らの意思表示を口にした。

だが、それを面白く思わない人物がその様子を伺っていた。

「なあ…お前らこの鉱物の研究をしてみたいか？」

アルタイルはそんなことをベガとデネブに話した。勿論その場にポラリスはいなかった。

暗い研究所に三人が集まってひそひそ話していた。

「それは当然だろう？ 科学者なら未知のものと言われたら好奇心が疼くってものだ」

「ああ…その通りだ。しかしポラリスは頭が固いからな…融通が利かなくてこまる」

二人はポラリスの不満を口々にして、アルタイルは黙ってそれを聞いていた。

そして意を決したかのように、

「なら…我々だけでやろう」

と話した。

それを聞くなり、二人はうんとは素直に答えられなかった。

「まずいだろ…国からも許可が下りていない状態であの得体の知れないものをいじくるのは…」

「そうだ…ポラリスに知れたら、この研究所から追い出されるかもしれないぞ？」

二人の弱気な発言にアルタイルは嫌気が差したのだろう、一括す

るように声を荒げた。

「このままでは状況は何も変わらない！」

唐突な出来事にぴたりと二人の動作が止まった。

「いいか…このまま何もしていなければ我々は国からお払い箱になるのは目に見えているんだぞ？」

子孫を増やすための遺伝工学も結構だ…

だが、新しい未来を切り開くためには別の分野も追い求めなければ我々人類に未来はないとは思わないか？」

「それは…」

「何もしなくてもこの研究所のチームは崩壊する。

それなら大きな偉業を成し遂げてこそ、科学者の最後だと思わないか？」

これだけの研究材料を目の前にして何もしないのは愚の骨頂だ！」

アルタイルは二人の心に火をつけていった。

彼らは動かされていったのだ。だから、アルタイルに協力するよ
うな雰囲気になっていった。

「そつだ…そうなんだ！ポラリスは間違っている」

「科学者たるもの研究を怠ってどうする？我々は進化し続けなければならぬのだ。未来のためにも…」

二人を上手く丸め込んだことを見ると、アルタイルは微笑んで話

した。

「それなら、やるかい？」

その言葉を拒む理由がそこにはなかったため、二人はアルタイルの提案に同意した。

ポラリスは幾度となく政府機関に足を運んでいた。

昔は数個の大陸とたくさんの国が存在したこの世界は一つの国になっってしまった。

それは子孫が出来なくなったこと、環境汚染、それが原因で全人口が十億人程度になってしまったことが一つの理由だった。

激減する人類はばらばらに暮らすよりも集まった方が良いと考え一つの大陸に集まったのだ。

そこで一つの国家を作った。

『単一国家パンドラ』

ここには悪を吐き出し、希望が残っているという意味があったのだ。

しかし人類の生き残る状態は厳しくなっていたのは変わらなかった。

遺伝工学がいくら進歩していたからといっても、完璧な人間は作れなかったのだ。

そして生物としても生きることが困難だった。

そのことを重く見ていた政府は、幾度となく会合を設けて話し合

っていた。

「君ら研究者の意見を聞きたいのだが…」

そんな言葉を切り出したのは、この国の重役の一人だった。

「我々の計算では、このままいけば三十年後には人類が消滅しているだろう」

「資源不足、地形の急激な変動、そして子孫ができない…これでは未来がない」

「何としても、気候の調節の研究と子孫を繁栄させる研究を進めなければならん」

その場に集められた十数人の研究者が頭を悩ませていた。

「そう言っても…研究は時間が掛かるものなんです。いきなり今のものを急成長させろっていつでも無理な話です」

「そうです…時間が足りないんです」

口々にみんなは無理だと言った。

「だが…何もしなければ我々の未来はないんだ？やるしかなかろう」

「弱気なことを言い合っている場合ではないのだ！何とかしろ！」

政府の重役は言いたい放題で、科学者達をどんどん焚きつけていった。

「おい！ポラリス局長。君のところの研究所は何をしているんだ？
鉱物の研究など今更必要ないだろうが！それで何故研究の申請許
可を求めている？」

ポラリスはその話に触れられ、ようやく自分の発言が出来ると思
った。

「いや…ただの鉱物ではないのです。

何と言うか…危険な物であり、我々の研究に役立つってくれる物だ
とも思っています」

「何だ、その漠然とした発言は…」

それにこの前に研究データをもらって資金の追加はないと話した
はずだ。

今は予算を無駄な研究に省けるほど余裕などない」

「だから…一度、私の研究所に来てもらえば、あの鉱物のすごさが
分かるんです」

「くだいな…君は遺伝子学の解明者の一人だ。

それならば進化の研究をもっと進めるのだな。

そうすれば我々だって研究費を惜しむことは無い」

「今更…遺伝子を組み替えた人類を生み出して何になるというので
す。

その対象の人類が子孫を繁栄することができないのですから」

「いや…第三の人類の研究を進めればそれは可能なはずだ…今はま
だ形にはなっていないがな」

「止めてください！あれはリスクを伴います。
完全な人類が生まれるかなど保証できないんですよ！」

「だから君の力が必要なんだよ。こんなところでくすぶっていないで、我々のチームに入りたまえ。」

そして完璧な人類を作ろうではないか」

ポラリスはその言葉に何度となく嫌気がさしていた。

俺たちは決して神などではない。

それなのに神の代行者となって新たな人類を生み出していいのだ
ろうか…いや、良いはずがない。

そのことばかりをずっと思っていた。

だから答えは簡単だった。

「無理です…。」

「何だと？」

「私は遺伝子の大方を解明し、どこをどのようにいじれば人という
生物が変化するのか知りました。」

だが、それは人の行ってはいけない行為だったんです！

生命というものは水のように流れる如く進化を遂げるんです…そ
れを…無視やりに…。」

「科学が我々の進化だ！それを否定して何になる！このまま滅びを

待てと言っのか！貴様は！」

声が次第に荒くなっていくが、ポラリスは信念を曲げなかった。

「私は…それで滅んだとしても本望です。

今までやってきたことが間違いだと気付いたんですから。

他の人には悪いかもしれない…しかしそこまでして生物として…
これ以上生き延びたくないんです」

「貴様！」

「その発言は、反逆罪に値するぞ！」

一丸となって人類の未来を担おうとしている時にお前は…腑抜け
になってしまったのか！」

「そうだ！このままではお前の研究所は即刻閉鎖だ。そして仲間も
極刑にしてやるから覚悟しろ」

重役たちは感情に身を任せて様々な発言をポラリスに浴びせかけ
た。それを聞いたポラリスも動揺を隠せなかった。

「ちよっ…待ってください。私はどうなっても構いませんが、他の
連中は見逃して下さい。」

そんな理不尽な理由で裁かれるのは私だけで十分です…」

「理不尽だと？お前の話のほうがよくほど理不尽ではないか？」

この世界に時間はない。そのことをお前は知っているはずだ。

それなのにそれをみすみす逃そうというのが賢いとも言っのか
？」

「それは…」

「お前は一人としての哲学で物事を美化し陶醉しているだけだ…それは科学者ではない。」

だから捌きを下すのだ。今の世界には殉教者も哲学者も必要ない。この世界の未来を見れる者だけが必要なのだ…それが現実なのだよ。」

数万分の一になってしまった人類を救うことのが悪い！」

それぞれの考えが交錯しぶつかり合っていた。相手の考えもポラリスは十分分かっていた。

しかし信念を曲げることはできなかったのだ。

「平行線を辿るのは分かります…」

しかし…我々は一体何のために生き続けるのですか？これが正しい道なのですか？

生物とはかけ離れた物を生み出してまで子孫を繁栄し、そこに未来があるのですか？

お願いです…できたら時間ばかりに縛られないで、長い目で…自然の状態で我々の子孫を残せる方法を考えて下さい…

このままでは生態系が大きく崩れてしまい本当に未来は失われてしまいます」

必死に懇願したが、重役の連中は冷めた目をしていた。

「時間がないと言っているだろう？お前は時間の重さを知らない…」

「自然の摂理に任せているほど悠長なことではできないんだよ」

「そうだ… 確実な未来。それが求められているのだ… 話していて良
く分かった。」

お前にもう用はないだろう…」

「そうだな… こいつを捕らえてくれ」

そこまで話すと、そろそろと警備の男達が姿を現した。

そしてポラリスの両腕をぐいっと引っ張った。

「頭を冷やせと言うのは… まあ、無理だろうな。だからこの場で話
しておく、お前は人類の恥だ。」

何もお前には求めまい」

「黙ってお前の望むままに自然に朽ち果てるがいい…」

「ああ… 暗い独房だな」

ポラリスの足掻きも空しく、そのまま数人の男達に引きずられる
ように牢獄に押し込められた。

そしてポラリスの研究所も封鎖の方向に向かおうとしていたが、
そこに異変が起こった

60話

―数日後

「ポラリスのいない間に済ませる。そつちの準備はいいか？」

「ああ…こいつを割るには原子力の力を用いないと駄目とはな…」

「最強の高度を誇るダイヤモンドの刃でも駄目なら、これしか残っていないだろ」

「人類最強の力との真つ向勝負だな」

「ああ…高気密に圧縮されたこの空間で行えば、力が外には漏れることはない。

これは一種の賭けかもしれないが、それだけの価値はあるだろう」

デネブとベガ、そしてアルタイルの三人は例の鉱物を眺めて話した。

そこには命すら顧みない志が存在した。

だからだろう、賭けとも思える実験を迷うことなく行おうとしていた。

二メートルの透明な立方体のケースの中にその鉱物は置かれていて、その隣にはビー玉位の丸い珠があった。

その珠は核爆弾だった。

三人は爆発の際に起こる閃光から目を守るようにサングラスをしていて、

アルタイルの手には爆発を起こすためのスイッチが握られていた。

「いいか…やるぞ?」

「ああ…」

そしてすつと、箱の中様子を見てから、一呼吸おいてスイッチを押した。

鉋物に向かつて核爆弾を圧縮された空間で爆発させたのだ。

この空間は核爆発にも十分耐えられるように設計されていたので、放射能漏れは心配なかった。

しかし完璧という言葉はどこにも存在しなかったので、三人も不安は隠し切れなかった。

すさまじい轟音が部屋中に閃光と共に鳴り響くと、箱の中は真っ白な煙に覆われて何も見えなくなっていた。

成功したのか、失敗したのかすぐには分からなかった。

「これは…」

いち早く気がついたのは、ベガだった。

煙がゆっくりと消えていくと、ケースの中の様子が他の二人にも

見えていった。

するとそこには、割れた鉱物の欠片だけが残っていた。

「中身は？」

全員がはっとした。

あるはずの中身がそこにはなかったのだ。

まさか、粉々に砕けてしまったのだろうか。そんなことまでも考えた。

しかし外に飛び出すことがなかった以上、そこには始めと同じ物の質量がなければおかしかった。

例え蒸発して気体になっただとしてもだ。

それが、最初の十分の一にしか満たない外の殻の石の残骸しかそこには残っていなかった。

「気体になったのか？」

「いや？ケース内の数値を見ても変化無しだ」

「だとしたら…この中はどこにいったというのだ？」

デネブ、ベガはうろたえた。そしてアルタイルは冷静に答えた。

「ケースを抜け出したとしか考えられないだろう。ケースを傷つけ

ることなくな…」

「そんな馬鹿な話があるか？」

その答えを知るのは、数分後だった。

研究所の外から激しい落雷の音が何回も何回も聞こえてきたのだ。

三人は慌てて外へ出た。

そんな時にタイミングが合ったかのようにポラリスが車で研究所の前まで来ていた。

例の死刑宣告を受け、独房に数日閉じ込められ意気消沈していた。

そして三人にどのように話そうか、あの鉱物をどのように扱ったらいいのか悩んでいる最中だった。

しかし雷の鳴り響く音ではっと我に返った。

車から飛び出すと、空はおかしな色に染まっていたのだ。

見たこともないように紫色の煙が立ち込めている感じだった。

「見る…空が！」

デネブが研究所の入り口で叫んだのを聞いて、ポラリスは三人に気がついた。

急いで彼らの元へと走ると、何があったのか訳を聞こうとした。

その間も間髪入れることなく、雷鳴と雷光は空一面を無尽蔵に駆け巡っていた。

「何があつた？」

ポラリスは三人に詰め寄った。

「ポ…ポラリス…」

「何だ？あの空は！今まで見たことがないぞ？」

昼間のはずなのに夜のように真っ暗になっていた。

そして風は大きく吹き荒れ立っていることもやつとだった。

そしてアルタイルはポラリスに今までの状況を隠すことなく説明した。

「ふざけるな！」

ポラリスはアルタイルを殴りつけた。

「あれには手をつけるなと散々話しただろうが！生半可な知識だけであれを割ろうなど…」

どんな代物か分かっているのか、貴様は！」

アルタイルは口から血を流していた。しかし表情は笑っていた。

「あなただって、知りたかつたはずだ。」

あれの中身が…それを今更隠してどうする？」

「何だと？」

「何のために科学者になったんだ？」

死に行くのを待っているだけの傍観者の方がよっぽどたちが悪いんじゃないか？」

「あ？」

数日前に政府の重役にも同じようなことを言われたばかりだったので、少し心が動いた。

「あんたはな、所詮、臆病者なんだよ。」

知ることを恐れ、先を見るのが怖い…それは何もしないという行為だろうか。

我々よりもたちの悪い存在だ！今の世界で忌むべき存在だ」

アルタイルは一步も引かなかった。それと同時にポラリスは押し負けてしまった。

自分は間違っているのだろうか。

そんなことすら頭の中を過ぎった。

「しかし…私は…」

「言い訳をするな！もういいんだ。これは始まりだと思えばいい」

アルタイルは空に向かって指を差した。すると紫煙のなかに混ざ

って空に門が開くのが見えた。

「あれは……」

全員の目が点になっていた。

空にぽっかりと空間が出来上がっていたのだから。

「これで世界が終わろうとも本望だ……」

アルタイルはそう呟いた。

「くそ……そうは、させるか！」

ポラリスはそう言うと、空の裂け目に近づくかのように目の前の山を登っていった。

それを見た三人は追いかけた。

61話

山頂は驚くほどの強風で、例の裂け目に向かって吸い込む力が作用していた。

空に近づけば近づくほど、吸い込まれる力は増しているようだった。

ポラリスは吸い込まれないように岩にしがみつきながら門を眺めた。

「俺の…持ちこたえる力を使おう。今、初めて…」

そしてポラリスは意識を集中した。

かっと目を見開き、裂け目に意識を集中させたのだ。

するとどうだろう、その空間がびきびきつと言つ音を立てて一瞬固まった。

「何!」

アルタイルたちもその場にたどり着いてその様子を見ていた。

空間が歪んでいるのを目の当たりにして驚いていた。

ポラリスがまるで裂け目を塞ぐかのように力を振り絞っているようだった。

しかし生身の人間が見るだけで、そんなことができるのだろうか？

「あいつ…人間か？」

ベガたちがアルタイルが何か知ってるのだと思い、答えを求めてきた。

するとアルタイルは話した。

「あいつはな…自ら実験体に志願して、遺伝子操作をされた人間なんだよ」

「遺伝子操作だ？それを受けた人間が存在するのか？」

「ああ…だから人とは違った能力を持つ異能者だ…しかも彼には八つの能力が備わっているらしい」

「そんな馬鹿な…」

「半端ではないな…しかし今までそんな話聞かなかったし、そんな素振りも見せなかったぞ？」

「偽善者の考えることだ。

力を使わなかったのだから…当然だ。

彼は自らを実験体にして科学の未来を見たかっただけだったのかもしれない…」

「だからか…科学を妙に拒絶する行動も…」

「ああ…今の状況にしがみついているだけなのかも…」

ポラリスは気を緩めることなく、裂け目が開くのを必死に防いでいた。

見えない攻防は数十分と続いた。

しかし…力の差は明らかだった。広がり続ける空間の裂け目は止めることが出来なかった。

パンと乾いた音と共にちっぽけな人の能力は打ち碎かれたのだ。

「く…くそ…」

そして氣力を失ったポラリスはその門の中へと吸い込まれていったのだ。

「っ…」

残された三人はそれをただ黙ってみていることしか出来なかった。

何もできずに門が完全に開ききるのを見ているだけだった。

その門は数時間後には姿を消していた。そして、元の景色に辺りを変えていたのだ。

そんな出来事はここだけではなかった。

世界各国で同時に発見されていたのだ。

そのほとんどが人の住んでいない土地であったのが幸いしたのだろ
う、被害は何もなかった。

その後の調査で分かったことは全部で七つの門が開かれたということ
だった。

しかも同時に姿を消した。

その一連の出来事は全て異常気象の一言で片付けられたが、
アルタイルたちだけが、自分達の実験が原因だったことを知って
いた。

三人はそれから研究所にしばらくの間籠もっていた。

あの事件以来、自らの体に異変が起きていたことを知ったからで
ある。

「おい…どうなっている？」

「間違いなく…細胞の状態がこの時点で止まっているとしか思えない
…」

「しかも傷をつけると…その時の状態に戻っている…」

あれほどの惨事が起こった後だったので、

体に異変がないか自らの細胞を接種しようとして傷を付けてみた
のがきつかけだった。

ナイフで軽く傷をつけたのにそれが一瞬で治ってしまったのだ。

おかしいと思いつながら何度も行ったが、結果は同じだった。

そこで、しょうがないので自らの手を顕微鏡で眺めながら傷を付けてみた。

すると、細胞が見る見るうちに修復されるのがみていて分かったのだ。

しかもそれだけではなかった。まるで全ての細胞が活動を止めているかのように動いていなかった。

「これは…どういうことだ！」

ベガが声を荒げたが、アルタイルはいつものように冷静な素振りを見せた。

「落ちつけ…恐らくあの鉋物の力のせいだ。

そこで導き出された答えが一つだけあるが、聞きたいか？」

「当たり前だろ！これが何か俺は知りたい」

答えを聞きたくてベガはアルタイルに今にも掴みかかるような姿勢になっていた。

「そうか…なら簡潔に話そう。あれはな、時に干渉を持つ鉋物だったんだ」

「時？」

「ああ…触れたものが急激に年老いたり、若返ったりという前例もあるしな。

つまり、我々の体は時が止まってしまったのだ。あの実験の時かな」

それはとても単純な答えだったが、奥が深かった。

「つまり…死ねない体になったのか？」

「そうだ。

そしてあの鉱物の殻が壊れたあの時に起こった現象…

これからは推測だが時空の空間に穴が空いたのだ」

「つまり…この星の過去か未来の世界に繋がってしまったというところか？」

「その通りだ…あれは時そのものに干渉を及ぼし世界に影響を与えるものだったんだ。

我々は星の原動力そのものに触れてしまったのかもしれない…」

「あんなちつぽけな鉱物が？」

「否定することはできない。

だが、世界の理に触れてしまい間違った方向に進んだのは事実だ」

アルタイルは自らの行為を間違いと認めていた。

「だが…お前のその考えでは、修復の余地はあるのだろうか？」

「そうだ…この世界はやり直しがきくのだ。
力が足りない今では無理だが、我々は永遠の寿命を手に入れた。
それならこの研究も時間に関係なく進めることができるのだ」

災い転じて福となるとはこのことだった。

アルタイルはこの状況を喜んでいた。

「どうだ？怖くなつたか？」

二人はアルタイルの行動に戸惑いながらも信念を曲げることはな
かった。

「ふざけるな。科学の道を共に究めようと進んだ者同士だ。
最後まで付き合っに決まっているだろう」

「そうだ…我々人類の未来は我らの手に収められたのだ」

こうして彼らの目指すべき道が見つかったのだ。

62話

それから三年後、世界の勢力は完全に変わっていた。

アルタイル、ベガ、デネブの三人は世界の権力者となっていたのだ。

不死身の体を手にした彼らに怖いものなどなかった。

重役をことごとく抹殺し、支援者をどんどん集めていき、世界のほとんどを掌握した形になった。

それでも彼らに賛同しない者も存在はした。

だから勢力争いでの小競り合いは日常茶飯事の形になっていた。

それともう一つ…世界はあの事件以来少しずつ様子がおかしくなっていた。

あの鉱物が砕けてから、遺伝科学から生み出された生物には必ずと言っていいほどの出来損ないができた。

凶暴で、凶悪…制御しきれない化け物だ。

「どついうことだ…」

科学者はその原因が分からなかった。

今までほぼ完璧に近いクローンの人類を作り上げてきたのに、そ

れを覆されたのだ。

それは悪循環へと繋がっていった。

出来損ないの人間は研究の回数を多くするたびに増えていた。

生身の人間に彼らを抑圧することはできなかった。

だから、遺伝子を操作し完璧な人間を再び作ろうとした。

しかしそれでも不完全な生き物が出来上がる…

もはや止めようがなかった。

永遠の繰り返しだ…

その状況に気がついたときには遅かった。

人類は別の意味で排除されようとしていたのだ。

「この状況をどうしたら打破できるのだ？」

三人に迫ってくる民衆の非難の嵐。

的確な答えは出せなかった。だから、三人は悩んでいた。

「この世界は…終わりを迎えるしかないのか？」

「そうだ。どう考えても絶望しか残っていない」

「くっ…」

焦りは隠せなかった。

正直ここまで状況が悪化するなど思っても見なかったからだ。

自らは不死身…その考えが判断を鈍らせたのだろう。

「あの鉱物が全ての原因だとしても、これからどうすればいいのだ？」

「我々はこれだけの力を持っている…それを生かさなくて何になる」

ベガもデネブも世界の事を考えていた。

「ポラリスが生きていればな…どうなったのだろうか…」

デネブがそんなことを口にし、遠くを眺めていた。

そんな二人の様子を見ながら、アルタイルは少し考えると、

「心配するな。策はある…」

希望にも似た言葉を口にした。

「え？」

アルタイルのあまりにも自然すぎる態度に、思わず聞き返した。

そしてアルタイルは改めて今後の三人の生き方を具体的に指し示

した。

「我々もあの門の向こう側に行くのだよ」

突拍子もないとはこのことで、すぐにはぴんとこなかったが、ベガは怒りを露にした。

「何だと！あの不気味な空間の亀裂に入れというのか？」

ベガは無謀とも思えるアルタイルの意見に真っ向から反対した。

「向こうに何かがあるのかお前は知っていると言えるのか？」

冗談ではない！一か八かの賭けなら俺はお断りだ。

確証もないことに命を賭けられるほど無謀じゃないからな…」

デネブは二人のやり取りを見ていてどうしていいのか分からず、ただおろおろとしていた。

「くく…我々は既に人ではない…そのことを知っているだろう？
それなのに命が惜しいだと？お前はボケているのか？」

アルタイルはベガに喧嘩を売っていた。

売り言葉に買い言葉とはこのことで、二人の間には冷静な話し合いは存在しなかった。

「何だと！」

ベガはアルタイルの胸倉を掴んでぐいっと引き寄せた。

二人の体格差は明らかで、ひよろつとしたアルタイルが自身の倍ある体格の持ち主のベガに肉弾戦で勝てるはずはなかった。

しかし怯むことなく話を続けていた。

「いいか…不老不死の肉体を手に入れた我々がしなくてはならないことはどんなことだと思う？」

その質問の意味が他の二人には分からず答えられなかった。

「それは、民のために身を犠牲にしても星の未来を願うことだ！これは使命なんだよ！死ねない体はそうすることで意味があるというものだ。」

今更守りに入ってどうする？

破滅しか残っていない未来を黙ってみていて何になるんだ？いい加減目を覚ませ！」

ぎりぎり締め付けられながらもアルタイルは自らの主張を貫き通した。

そしてそれはベガの心も動かした。

「ちっ…」

力を込めていた手が緩み、アルタイルから手を離れた。

「分かったよ…そこまで感情的になるお前は初めてだな。それに…何も考えなしって訳ではないのだろう？」

63話

「無論だ…あの空間の亀裂…門なるものは、三年の間に何度か開いた報告を受けた。」

そして俺は調査させていたのだ」

「それで？あれはどこに通じている？」

「そう焦るな…」

アルタイルは不適な笑みを浮かべながら出し惜しみするようにじらしていた。

そしてゆっくりと話した。

「過去だよ…あれはこの世界の過去に繋がっているのだ…」

しかしそれが何年前かは分からない。

あの門が出来上がった時に時空空間の乱れが大きく出来ていたのが後々に分かった。

それが原因かもしれないが…それでもこの世界をやり直すきっかけにはなると思わないか？」

「過去に戻って全てをやり直す？」

「人類の再建をするってことか？」

「それも一つだ…」

不老不死の体と、今までに培われたこの頭脳が存在すればあらゆる事が可能ではないか？

こんな世界になる前に対策を打てたはずなのだから…」

二人はアルタイルの言葉に飲み込まれていた。

それはとても興味のある話で、もしもそのことが可能なら試してみたいことであつたからだ。

「それは…本当に可能なのか？その…向こうの世界が過去であるということが最大条件だが…」

「過去であることは間違いない。しかしそれが何年前なのかは特定できない。」

時間軸というものが固定された状態ではないから、数年前かもしれないし、

数千年前かもしれないのだ…

それともう一つ、あの門を潜ることができるのは一度だけだ。

そして…もしも自分の存在する時間軸に移動してしまったら、自らに多大な影響を与えてしまう可能性もある。

同じ時間軸に同じ人間の存在、ということ自体何が起こるか分からないからな…」

「それは…死を意味するかもしれないということだな」

「ああ…不老不死の我々でも時の上に存在する法則からは逃れられない」

「ちょっと待て…今の話だとあれは過去へ通じる門なのだろう？

それなら紀元前まで戻ってしまうことだつてあるわけだよな」

「そうだな。一気に数千年前まで戻ってしまったら、それこそ数千

年耐えなければいけない。

人類が生活を確立し、文化や技術を手に入れるまでな……」

「く…そこは賭けか…ポラリスは一体どの過去に向かったのか気になるところだが…」

「確かに…」

デネブとベガは顔を見合わせて話した。

「後は…俺が独自に研究したことを話しておこう」

「何だ？まだあるのか？」

「これが最も必要なことだ。例の鉱物についてだ。あれは我々人類にとって宝のようなものだ」

「宝だと？あんな奇妙な力を見せた不気味な物がか？」

「そうだ…あれはこの世界の時間というものに大きく係わるものだ。恐らくこの世界の時を作り出している存在と言っても過言ではないだろう。」

「ここからは憶測だが、もしもあれを元の形で利用することができれば、時の支配者となれるのだ。」

未来、過去を操り自らの思うように時代を動かす…」

「すごいじゃないか！それができれば真の支配者だ。」

時を思つがままに動かせるとは…」

「だが、あの鉱物を使いこなせることが前提だろう？」

お前はどこまで知っているのだ？」

ベガたちはアルタイルの用意周到な性格を知っていたので、そう聞いた。

「その話をする前にこの計画の一番重要なことを話しておく。先ほどの話の流れからも分かるかもしれないが、この世界に存在する門はあの鉱物が原料になっている。

そしてその恩恵を受けて我々に不可思議な力が宿ったのもその力だ。

つまり砕け散った鉱物の力は世界にいろんな現象を及ぼしている。それを戻すことがまず先決だ。そうすることで、あの鉱物の真の能力を発揮できるのだ…」

「その方法は？」

「門の同時期完全開放が最低限の条件だ。

門はこちらの世界に主導権がある。

こちらの世界の周期に合わせて七つの門が順番に開くわけだが、何年かに一度だけ同時に開かれるのが法則性から導き出された…しかし問題が一つ。

あの鉱物から今の世界と互換性が失われてしまったのだ…

それが意味するのは向こうの世界からなくては元に戻す方法がないということだ」

「どうということだ？」

「一度でもあの鉱物の力が解放されると、同じ環境では使えないということだ。

つまり、あの瞬間からこれからの未来では使えないのだ。

過去だけが可能な条件となる…それを踏まえた上で、あの門を潜るかという覚悟を再び聞こうとも思うが…どうだ？」

そこまで考えた上での申し出なら断る理由はないと二人は思った。

「そこまで用意されたら…賛同するしかにだろっ？なあ？」

「ああ…その通りだな。アルタイル…お前には驚かされる。

その知識の豊富さと先を読む能力にな…だから我々はお前の示す方向に黙ってついてよ」

「そう言ってもらえると助かる。

過去に戻っても一人ではあの鉱物を解き明かすことはできないのだからな。

それに三人でそれぞれの得意分野を生かすことが出来れば、すぐにも過去の世界を掌握することも容易いだろう。

後は…人類の未来を救う手はずを整えるだけだ」

アルタイルは自らの使命感に燃えているのだろうか？

自分に酔っている？

そうとも思ったが、今まで生きてきた中で自分の道を指し示すことができたのはこの瞬間だと思ったに違いない。

それから三人はあの鉱物を時の雫と名付けその形を元に戻すためにこの世界を旅立った。

そう…過去の世界に。

それは今から千年前の世界…

64話

「ここは…」

あの門を潜り抜けた三人の目の前に広がっていたのは真っ白な吹雪の世界だった。

どれほどの間気を失っていたのだろうか？

三人の体に掛かった負荷は相当のものだったのだ。

寒さを感じて起きるまで幾らか時間が掛かったのが、自らの体に積もった雪で証明された。

「何年前だ？」

「それはまだ分からない…とりあえず落ち着ける場所を確保しよう。話はその後だ…」

それから彼らは山から降りて麓の村を発見した。

そこに存在した人間の衣装やら取り扱っている硬貨、そして食べ物を見て三人は理解した。

それは裕福なものではなかった。皆が貧しくそして慌ただしく船出の準備をしていた。

船は竜骨を利用した大きな帆が一枚の簡素なものだった。

そしてオールが船のあちこちから飛び出していた。

まるで歴史の教科書を見ているようだった。

「紀元後千年といったところか。バイキングの存在があるのも考慮して、ここは北欧ということか？」

ベガが冷静に分析していた。

「そのようだ。食べている物もライ麦パンや野生の果物…小イワシか。」

北欧神話も根付いている今の状況なら納得だな」

三人全員が同じ答えに到達した。

「これからどうする？」

「まずは不可思議な力でも見せて人を信用させればいいだろう？
そうすれば我々も北欧神話の仲間入りをするかもしれないぞ？」

デネブがふざけた感じでそう話した。

「北欧神話は無理でも人の心を掴むきっかけにはなるだろうな。
そしてこの世界から数百年もすれば我々の存在も大きなものとなるだろう。」

その芽を今のうちに育てておくとしよう」

「俺たちに金はないからな…まあ、そうするしかないか」

「死にもしない体なのだから、気にするな」

「確かな…」

三人は無事に過去にたどり着けたことで気が緩んでいたのかもしれない。

ふざけあつてしばらく談笑をしていた。

「門の完全開放とやらはこちらの世界でいつ行われるか分かってるのか？」

「ああ…」

「きつかり千年後だ。二千年それが我々の記念すべき日だ」

「千年後か…死なない体だから長いように感じるが、これからいろんな研究ができるのであれば退屈はしないだろう」

「だからこそ、時の雫を元に戻す方法をしっかりと解明しないとな」
それぞれが新たな世界での生き方を考えていた。

「その前にこの世界があ門のせいで影響を受けていないか調べる必要がある。」

ポラリスのこともあるしな…

彼はひょっとしたら我々よりも前の世界に来た可能性だってあるし、この先現れるかもしれない。

それを考えて我々も行動しなくてはならない。

もしもこの世界で不安があるとすれば彼の存在ぐらいのものだ」

「そうだな…彼の頭脳と能力は計り知れない。
油断は禁物だ。そうと決まったら動くとするか…」

「ああ…」

それから三人は自ら持つ不死の力を利用し人々に奇跡を見せた。

それは仕組まれた奇跡ではあったが、それでも人々は信じた。

そして彼らを神の使いと崇めたのだ。

彼らは不死の力だけではなく、それぞれが不可思議な力を手に入っていた。

デネブは時を進め…ベガは時を戻し、アルタイルが時を止めれた。

そのことに気が付いたのは門を潜った後だった。

アルタイルは話した。

「あれは時の門だ…潜り抜けた時に体だけではなく、
時に纏わる能力を我々は手に入れたのかもしれないな」

だからこそ、門をしっかりと監視しなければならないとも付け加えた。

そして数年の間に三人は神徒協会を設立した。

65話

海は驚きを隠せなかった。

「なら…あの門は未来のこの世界だということのか？」

それは海だけではない。みゆも同様だった。

「ここは…過去の世界…」

灯はただ黙っていた。

「その通りだ…灯と一緒にいる…みゆだったかな？」

お前は我々の門を潜った後に研究所で生まれた作られし人間だな。政府の連中もなんだかんだ言いながら完全な遺伝子操作をした人間を完成させたようだな」

デネブの言葉にみゆは何も返さなかった。

「ベースは我々が作ったようなものだが、ここまでの出来とはすばらしいな。」

どのような能力を持っているのか見てみたい」

「あっちの世界はどうなっているんだ？我々のいなくなった後の世界は悲惨だろう？」

ある程度予想してベガは話した。

みゆは悲しそうな表情をして少し俯いた。

「ああ…あれは…人の世界とは呼ばないな。
作られた人間、壊疽した人間、そんなもので溢れかえって本当の人間がほとんど影を潜めてしまった」

「ふ…そうか。やはりあの時の決断は間違いではなかった…
遅かれ早かれ時の雫が砕けてしまっってはあの世界に未来はない」

アルタイルは自らの下した判断を自画自賛しているかのように言った。

「ここで無駄な争いをする必要はない。

今の話を聞いて我々の意思に従うことは当然だと思わないか？

さあ、人の間違った未来をやり直そうじゃないか」

「そつだ…門が元の形の時の雫に戻れば、全てをやり直せるのだ…」

三人は甘い言葉を投げかけてきた。

これは…どうすればいいんだ？

間違った未来がこの先に存在するのならば、それは正さなくてはならないんじゃないか？

しかし…それは本当の正解なのか？

俺にとっても…みゆにとっても…

俺が思い悩んでいる姿を見るなり、親父は真っ直ぐ前を見ながら話しかけた。

「海…顔を上げる。そんな言葉を信じるな？」

「え？」

「やれやれ…話が上手すぎじゃないですか？」

何故…間違った方向に未来があるのなら御自身の手でやろうとしないのですか？

道具を使い…人を使い…自らは表に出ようとしない。そんな人たちの言葉に黙って従えと？」

「灯…お前…あの男と考えが似すぎている」

アルタイルはその灯の姿を見てよく似た男のことを思い出した。

「ポラリスさんでしたか…彼の気持ちもよく分かります。

あなたたちのような自己満足の上でしか世界を築けない人を部下に持ったのですから」

「貴様！」

ベガが今にも飛び出しそうになったが、アルタイルが手を出して止めた。

「ポラリスさんは、その後どうなったのですか？」

まあ、今までの話を聞いていれば大体の筋は見えましたが…」

「なら話すまでもないだろう？」

俺には何のことだかさっぱり分からなかった。

「ええ…八鬼の創始者である唐津草十郎は、ポラリスさんですね。そして彼の特異な遺伝子を受け継ぐ者…それが八鬼のメンバーです。」

彼の遺伝子を正確に受け継ぐ者はいなかったが、断片的に受け継いでいたからこそ、それぞれ変わった能力を持つことになった、そうですね」

「ほぼ正解だ。しかしポラリスの能力は元々我々も協力して作り上げたのだ。」

「だから我々の子孫でもある」

「屁理屈ですね…しかし彼はあなた達と同じ不老不死の能力は持たなかった。」

「だから普通の人間のように死んだのですね」

「寿命か…無駄な鎖だ。」

「そんなのは我々には関係ないのだからな。」

「しかし…我々とあまり変わらない時代に先に舞い降りていたことには少々驚いたが、」

「目の上のたんこぶが消えてせいせいしたよ。」

「後は彼の子孫を潰すだけだからな…」

「今までは門の事もあっておおっぴらに開戦はしなかったが、今は違う。」

「意見が相違するというのはなら皆殺しにでも何でもするさ」

「親父はふっと一息ついてからアルタイルを見た。」

「その目には哀れみすら感じられた。」

「あなたたちは…時の異なる鉱物を元の姿に戻したとしても他人のために使わないでしょう。」

自らの欲のために…理想の世界を勝手に作り上げる…それが本当の目的では？」

少なくともひっかかる部分はあったようだ。

「だからどうしたと？このままでは未来は変えられない。それなら我々に委ねるしかないだろう？」

「そんな未来にしたのは今の人間のせいでもある。我々のせいではない…」

「滅びる未来を待つてどうするのだ？」

「何もしないことは罪だ」

灯の発言を受けて三人はまくし立てるように話した。

「それなら、時の異なるものを頼らなくても別にできるはずですよ。未来は変えられる。その結末を知っているのなら尚更だ…あなたが導けば良いだけの話だ。」

それができないのは何か理由が？」

灯の最大の疑問がそこにはあった。そしてその答えを三人は迷わず答えた。

「大有りだよ…」

「我々が自身が大幅に違った未来を築き上げれば、その時点で我々

は存在を失う。

つまりこの世界からの死を意味するのだ」

「歴史を変えろということとはそういうことなのだ。

だから我々はこの千年、極力歴史を操作することはしなかった。権力者になることをせず、ただただ裏でひっそりと活動を続けていた。

存在するはずの人間が存在しなくなる…それを避けたかったからな」

自分達の言い分を話していたが、それは自らのためではないことも良く分かった。

こいつらは…自分のことしか考えていない。

俺は無性に腹が立ってきた。

「それはお前らの理屈だろ？」

思わず三人に向かって言葉を投げかけた。するとアルタイルはふふと笑っていた。

「そのことで、我々を非難するのは構わない。

しかしだ…我々が歴史を変えろということは、あの門の、向こう側の生命を全て滅ぼす行為に等しいのだ…

君らには全く関係のない人間たちの住む世界だ。

しかしそれを無視することは無差別殺人を黙認する行為だがそれでも良いと？」

「う…」

俺は何も言えない。

「だが、時の雫さえ元に戻りそれを使えば、この星に存在する全ての生命、

そしてこの先の時間軸に存在した者も救うことができるのだ。あの門の向こう側の者を救えるのだ」

「我々の仲間も…」

「いいか、裁くのは我々ではないのだ。星の意志がそこに存在するのだ。それが時の雫だ。

それを誰かが受け継ぎ、生かさなくてはいけないのだ」

「それで失敗しているはずでは？」

「一度はな。だが、その教訓も十分に生かしている。失敗を生かして成長をする。それが人間だ」

そこまで話すと灯は不敵な笑みをこぼしていた。

「くくく…自らを買いかぶりすぎではないのですか？私は賛同しかねますね」

「何だと？」

「あなた方は嘘を付きすぎた。そんな人間の何を信じると？その者に従えと？」

隠すことの大切さを優先し曝け出すことの勇氣を持たなかった…

これが私が最も許さざるべきことだ！」

今までにないぐらいの勢いで話した言葉の重さはその場を支配した。

静けさだけが残り、三人の口を塞いでしまった。

それからアルタイルはすっきりとした顔をして、

「いいだろう。これはお前の揺るがない意志と受け止めよう。それならば、こちらもそれなりの対応をすましようか」

初めて殺気を放った。

66話

私たちは策もないまま追い詰められていた。

逃げた先から数分後には回りこまれていた。

それは最初の部屋と同じような構造で、石の壁に囲まれていた。

評議会の連中は、なりふり構わず私たちのことを探したのだろう。

通路の至る所に最短距離を目指して破壊した後があった。

「どっからこんな力が出てくるんだ？」

そんな疑問をよそに敵は無数の武器を振り回し、弾や弓矢を浴びせかけてきた。

翔馬も飛び道具で応戦するが、相手は不死身だ。

多少体に受けたとしても怯むことをしなかった。

私が燃やそうが、凍らせようが速度が速くて追いつかない。

玲紀は、回復専門なので、戦闘には参加できなかった。

そして目玉の紅蓮はというと、肉弾戦で応酬していた。それが一番信じられない。

どうすれば、武器を持った相手三人に囲まれても傷一つ負わない

で、しかも笑いながら相手を吹き飛ばせるんだ？

私だって追い詰められているって言うのに。

彼らの戦法は司令塔の人物が操って成り立つものだ。

一見無造作に動いている彼らの動きには繋がりがあった。

紅蓮に三人、私に二人、翔馬に二人、司令塔の奴は玲紀が何も出
来ないことを知っているので、
警戒しながら身構えていた。

厄介だ…

私に付いた相手は槍使いと弓を扱う者だ。

共に接近戦が無理で高速移動までしている。

私の得意の打撃が通じなければ、空間を固定して利用する能力も
空回りしている。

しかも多少のダメージなど関係ないのだ。

だから一人が負傷しても残りの一人がフォローに回ればいい。

私は空回りする自らの能力にいらいらが募るばかりだった。

そんな中で彼らはあるうことがパートナーチェンジまでもしてい
た。

いつの間にか私の相手が、斧使いと短剣使いに変わっていた。

斧使いの大振りの一撃をかわして反撃を試みようとする、短剣使いが間髪入れずに私の頸動脈を確実に狙っていた。

「くっ…」

避けるので精一杯だ。

紅蓮ですら相手の攻撃をかわして反撃をしてはいるものの決め手に欠けていた。

このままでは時間の問題だ。

奴らは体力の底が見えない。一方こちらは限界があるのだ。

消耗戦で持ち込むことが狙いなのだと分かったが、どうすることもできなかつた。

せめて…こちらが八人なら対抗もできたのだろう。不死の軍団相手には数が少なすぎる。

「頭目…このままでは…」

私は戦いながら話しかけた。

「ああ…ジリ貧だな…どうする？」

「どうもこうも…司令塔の動きを封じればいいのでしょうが、頭目に攻撃されてから多重結界を自らに張っているからそれも容

易じゃありませんよ」

振り回させる武器を紙一重でかわす。

ちっ…

完璧にかわしたと思った刃の先が髪の毛をかすった。

「っ…」

こいつら…戦いながら相手を分析してどんどん強くなる。

いや…我々の癖を読まれているのか？

だとしたらまずい。

このまま無駄に時間を過ごせば体力を消耗する前に実力で殺されるのは明白だ。

「翔馬！玲紀！」

私は力の劣る二人の安否を気遣い声をかけた。

「くう…」

元々接近戦が得意ではない翔馬は、早くも苦戦をしていた。

かろうじてかわしている攻撃が次々に体をかすめていたのだ。

そして遂に…

「ぐあ！」

肉を斬られことになる。

長剣と弓矢を持つ二人に挟まれ対応に困っていた。

八鬼は一つの分野にしか能力が長けていない。二人の分野の達人に囲まれればそれに勝つのは難しい。

翔馬は経験も浅い。

少しの時間で集中力が切れたのだろう。ころころ変わる相手の攻撃を受けるのも限界だったのだ。

右手、左足を数センチ切られた。

血が流れ動きを更に鈍くさせる。ここで止まれば死を意味する。

一方玲紀は、司令塔の男に四肢の動きを封じられていた。

この男の能力は攻撃の分野ではなく、操ったり結界を張ったりと守りに近かった。

それでも効力は抜群だ。

玲紀は動けなかったし、攻撃側の人間もミス一つ犯していない。

「時間の問題か…」

嫌な汗が頬を伝わった。

「おい！絶対に諦めるなよ？」

紅蓮はそんなありきたりの言葉をみんなにかけた。しかしそれはどこか意味があったのだと思った。

そして戦いが始まってから数分、劣勢に立たされていた私たちに一筋の光が見えたのだ。

壁を破壊する音と共に何者かが部屋の中に侵入した。

同時に目を晦ますための煙幕まで焚きつけた。

「うお…」

味方も敵も関係なかった。それぞれが身動きが取れなくなってしまった。

それを見計らって飛び込んできた侵入者は真っ先に司令塔の男を拳でねじ伏せていた。

その瞬間、評議会全員の動きが止まったのだ。

67話

「今だ！お前ら、こっちに固まれ！」

紅蓮の声がどこからか聞こえた。それを頼りに私は急いで声の元へ走った。

他の者も同様だった。

紅蓮はすぐに陣形を指し示し、攻撃態勢を整えた。

煙はみるみるうちに晴れていった。

そして司令塔の男も意識を取り戻し、再び攻撃を指示しようとしたが、

その矢先に彼に向かって無数のクナイが襲い掛かりその身を壁に叩きつけた。

「ぐぐ…」

張り付けのような状態の男は、自分の身に何が起こったか分からなかった。

それから体は氷結した。

「あ…ぐぐ…き…貴様ら…」

気付いた時には遅かった。体は見る見るうちに氷の彫刻のようになくなってしまった。

「まだまだ！残った奴らを一蹴する。翔馬、援護射撃だ。俺は奴らを切り刻む、冬香は全部を凍結させる！」

そこまで話すとそれぞれが自らの役割を果たそうと動いた。

出遅れたのは彼らだ。

私たちの行動に気付き、司令塔の指示を失い、自らの意思で動くのに数秒掛かっていた。

その間に我々の攻撃態勢は完璧に整っていた。これで負けるはずはない！

紅蓮は風を刃のようにして目の前に立ち塞がる敵を切り刻んだ。

一秒間の数分の一の世界で、隙を見せることは自殺行為に等しい。

今までのような隙のない完璧な布陣で組んでいたからこそ、

紅蓮を三人でようやく抑えていたようなものだ。

今はその枷が存在しない。

紅蓮は開放感を与えられた魚のように優雅に戦場を泳いでいた。

飛び散る体のパーツ。

腕に、足に、頭に…

翔馬はそれを援護するかのように雨のような飛び道具の嵐を放つ

た。

再生能力を間に合わせないように、私はその一つ一つを凍結させた。

高速再生を持つ彼らでも凍結させられると、体が元に戻るまでには時間が掛かる。

そこを見計らい、更に紅蓮は指示を出した。

「蓮…天井を落とせ！」

蓮がそこにいるのか？

なるほど…先ほどの救いの手は先にここに潜入していた蓮の存在ということか。

私はふつと一笑していた。

それから蓮は指示通りに動き、飛び上がると拳で天井を打ち砕いた。

こいつ…この三ヶ月で、体術に磨きをかけたのか？以前と破壊力が段違いだ。

降り注ぐ瓦礫は氷結した評議会の体を押しつぶした。

どすん、どすんと一つだけでも数トンありそうな石が地面にヒビを入れて落ち続けていた。

「よし、冬香。瓦礫の山を更に氷結させる」

「氷結ですか？」

「ああ…急げ！馬鹿！」

馬鹿だと？馬鹿はあんただろうが！

そんな心の突込みを入れつつも言われた通りにしていた。

「そして玲紀。お前はここに封印の結界を張れ」

「え？私。簡単なものしか出来ませんよ？」

「いい…基礎を作ってくれば俺が何とかしてやる」

「頭目…基礎忘れたんですか？」

「能力を八つも持つてると忘れることも多いんだ…」

「馬鹿ですね」

私の代わりに玲紀が突っ込みを入れてくれた。

そして言われるがままに結界の準備を整えると紅蓮がそれを引き
継いで、

氷結した瓦礫の山に瞬時に多重結界を張った。

氷の塊になった瓦礫の山は封印の術で、さらに色を変化させてい
た。

それは、空気が歪んでいるのと、光の屈折が関係しているのかも
しれない。

「これでよしと！」

紅蓮は額の汗を拭いて私たちにつこりと微笑んだ。

「何をしたんですか？」

「なーに。不死身っているなら、体ばらばらにして、氷結にして、
瓦礫ごと封じてしまえば身動き取れないだろ？」

奴らの再生能力を持ってしても、くつつくのは不可能に等しいさ。
ははは…ざまーみる」

からからと笑っていたが、恐ろしいことを口に出している。

「それにしても、蓮はいつの間にな？」

私は目の前に普通に立っている蓮を見て、紅蓮に聞いた。

「俺たちの足取りが分かるように壁に分かるように印を付けといた」

それを聞いた時に私はあることに気が付いた。

「まさか…我々だけに分かる暗号のようなものですか？」

それとも特殊なインキで何かしないと見えないとか？」

そうであって欲しいと思って聞いたが、全く別の答えが返ってき
た。

「いや、分かりやすく矢印をペンキで書いたけど？それが何か？」

その答えが出た瞬間、私は紅蓮を殴り飛ばしていた。

加減などしなかったので紅蓮は思い切り壁に叩きつけられた。

八鬼の頭目がまさか宙を舞うとは他の連中も夢にも思わないだろう。

その行動を見て驚きを隠せなかった。

殴られた本人はすぐに起き上がると、私の元まですごい勢いで走ってきた。

まるでダメージを感じさせない。

「どづいっことだ！お前！」

噛み付きそうな紅蓮に対して、私はそっぽを向いてイラついた表情を見せた。

「本気のお前の拳を受けたら頭から吹き飛んでなくなるだろうが！加減つてもものをしろよ！俺だからこの程度で済んだものだ…！」

ぶつぶつ文句を言っていたが、私は言い返した。

「あのね…あんたのその行動で、敵にすぐばれたって分からないんですか？」

それを聞いても紅蓮の脳にはぴんとこなかった。

「え？そうなの？」

他の者に聞いてみるが、聞いた相手が悪かった。

翔馬に玲紀ときたら、当然まともな返答はできない。

「頭目のせいじゃないですよ！きっと冬香の勘違いですよ！」

「そうですね。冬香したら気が短いから。難癖つけようって魂胆ですよ」

「うるさい！」

私の拳は速かった。二人の頭を殴りつけていた。

「きゃあ！」

「ぐあー！」

二人は悶絶して頭を抑えていた。

「お前らの馬鹿に付き合うのは飽きたんだよ。

全く…これでは命がいくつあっても足りない。

なあ、蓮、あんたはどう思うの？」

私はぎろりと蓮を睨んだ。

「そう睨むなよ…俺だって頭目の矢印のお陰で居場所が分かったの

は事実なんだから。

お前も落ち着けよ……」

「お前？」

私は殺意を込めた視線を蓮に浴びせた。私の事をお前呼ばわりできるのは、頭目ただ一人だ。

「いや……その……済みません……」

蓮も流石に謝るしかなかった。

「止め、止め……あのな……冬香。お前少し短気だぞ。これからの時代はグローバルにだな……」

ゴン！

紅蓮の話している途中だったが私は拳を顔面に叩き込んだ。

「聞き飽きました！」

そしてそのまま倒れている三人を置いて、私はそこから出て行った。

これからは、八鬼には教養が必要だな。

籠もりきりっていうのは、都会であれ、田舎であれ駄目なんだな。

そう思いながら暗い通路を歩いていた。

「さて…お前らの揺ぎ無い気持ちは受け止めたが、開戦と行く前に疑問点を何箇所か解決しておかないか？」

「疑問点だと？」

「ああ…お前の息子が気になることだよ」

「どづいつことだ？」

親父は目線を俺に移した。急に振られて何のことだか分からなかったが、俺には聞きたいことがあった。

だぶんそのことだろう…

「朱里のことだ…」

「朱里？あの…朱里ちゃんがここににいるのか？」

親父も朱里のことを知っているそれは当然だ。朱里の父親は親父の守護人だったからだ。

よく俺と朱里を遊びに連れて行ってくれた。

「柊リオとの戦いで…その…俺が敗れて、ここに連れてこられたんだ」

その言葉を聞いて親父は、はっとした。

「まさか…触媒に？」

「ほう…やはり知っていたか。我々の秘術を」

親父の表情は今までとは違い焦りすら感じられた。

一体何があったというのだ？

「それは、何だ！」

俺もその触媒という言葉の意味すら分からず、ただ聞くしかなかった。

「この三賢人の秘術には、完全復元をする術があるのだ」

「復元？元通りに戻すってことか？」

「ああ…それは、人でも物でも可能なのだ。

しかしそれには触媒…つまり生け贄のような存在が必要なのだ。

中でも彼らの遺伝子を近い存在で引き継ぐもの…

つまり守護人であったり、正式な護門徒であったりの存在が欠かせない。

だから秘術なのだ…少ない存在の人間を触媒に取り戻したいものを手に入れる。

簡単に出来るものではない…」

「ちょっと待てよ。彼らは時を操れるのなら、時の雫とやらも時そのものを戻せばいいんじゃないか？

何故復元する必要がある？」

「海…君は愚かだな。時の雫は我々に力を与えた根源のものだ。それを戻すのに我々の力が及ぶはずもないし、無限の時間を行き来しているものを戻すことは時を戻すだけでは無理なんだよ」

「そうだ…だから、そもそも元凶である全ての門の完全開放。そこで唯一乱れている時間軸が一定になり落ち着くのだ…だからその瞬間に完全復元の秘術が生きる。」

完全復元…それは時を戻す行為ではなく、一つの事物の原子を元から呼び戻すのだ…

これこそ正に究極の技なのだ」

相変わらずの悟った様子の三人に俺は頭にきていた。

こいつらは長く生きすぎたせいか、感情が麻痺しているのだろうか？

人を人と思っていない。

あくまで自分の道の通過点に過ぎない道具だと思っている。

だとしたら…俺は…俺は…許せるはずがない。

「ふざけるな！人の命を簡単に奪って、それで自らの欲望を復元だと！

俺はそんなの認めるか。朱里を出せよ！

朱里はそんなことされるために生きてきたんじゃない！」

俺らしくないのかもしれない。

声を荒げ、感情をむき出しにして、抑え切れない殺気を三人に放った。

「ほう…流石、灯の息子なだけはある。びりびりと大気が震えている…」

「だが、それも一時の感情だ。人の無駄な感情に過ぎない…起こって見せても数分後にはそれが虚偽のものだと感じるのだ」

「ああ…それが力だ。君らには我々を殺す術がない」

「灯…どうやって我々を殺すのだ？我々は不老不死の体を手に入れているのだぞ？」

それぞれが言いたいことを言っている。

「朱里は奥の部屋につながれている。助けたければ、好きにしろ…だが、我々を殺していければの話だ」

くすくすと笑って俺らを眺めていた。

こいつらは勝利を確信していたのだろう。

それはそうだが、こいつらは今まで千年の間、誰にも殺されることなかったのだから。

「ぼ…僕は…どうなる…」

忘れられていたようにリオが地面に這い蹲りながら細かい声を出

した。

そしてアルタイルの足を掴んでいた。

「お前らに…生み出され…利用され…」

初めて好きになった唯一の人間の朱里までも…奪われるのか？」

こいつ…朱里の事…

「ほう…死に底ないがまだ動いていたか」

「いい加減に諦める。お前は所詮は我々の研究の一環に過ぎなかったのだ」

「研究…だと？」

「ああ…我々の不老不死の能力の完全なるコピーを生み出そうとした末路だ。」

不老と不死というものを同時に共有させることは無理だった…
評議会には不死の力を与えることが可能だった。

だからこんどは不老も与えて完全な生命を作ろうとしたのだ。
だからリオ、お前が作られた。

しかし…灯の息子に半殺しにされている時点で、それは失敗だったのだ。

結果の出せなかったものは処分する。それまでのことだ…」

アルタイルは非情な言葉をリオに浴びせた。

それは真っ向からリオという存在を否定するかのようだった。

リオはそれを聞いて何を感じたのだろうか。

俺には到底理解できなかったが、生きる意味を否定され物のように扱われたことは耐え難い屈辱だと思った。

「お前は…このまま朽ち果てるのだ。しかし無益な死ではない。今後の研究に繋がる死だと思うのだ」

「全ては我々の手の中に…」

次々と飛び出す傲慢な発言に俺は我慢がならなかった。

彼らの全てが許せない。そう思ったからだろうか、それともリオに同情したからだろうか？

そんなの分からなかったが、体が勝手に動いていたのだ。

「ふざけんな！」

懐に入れていたナイフを抜くと同時に、アルタイルに真っ向から向かっていった。

しかし、その場にアルタイルの姿はなかった。

その場にいた全員の視線の先から彼の姿は消えていたのだ。

「血の気の多いことだ…」

背後から声がした。

「何!」

俺は焦って後ろに振り返った。未来を見る力ですら何も感じなかった。

だとすれば、時を止められたのだろう。

「う…」

俺は自らの手を見て更に驚いた。

握っていたはずのナイフがそこにはなかったのだ。

時を止めて、俺から奪ったとしか考えられなかった。

アルタイルは俺のナイフを見せて微笑んでいた。

「なるほど…たいした能力だ。これでは我々にも分が悪い。しかし…あなた方に対抗できる策もあるんですよ?」

親父はそう言って、一步前に進み出た。

俺では役不足だと言わんばかりに。

「海…お前の怒りはもつともだ。しかしそれは胸の内に留めて置き。怒りは力にもなるが、戦いに一番重要な判断を鈍らせる」

俺の前に立つと、そのまま三人を目の前に慚然とした態度で話しかけた。

「あなた方の能力は大体把握している。しかしそれだけでは役不足。それで、これを用意させてもらった…」

親父は懐から見たこともないような石の短剣のようなものを取り出した。

みゆはそれを見るなり肌で何かを感じ取った。

「それは…」

三賢人も同様の反応を見せていた。

「時の雫はこの星の時系列のどこかで砕けてしまえば、その時点で過去だろうが未来だろうが同様に砕けてしまう。」

そして…そんな時の雫の大きな欠片が偶然にも存在したんだ。この世界にもね…

それが、これです。これは、あなた達を殺すのには相応しい武器だと思うが」

するとベガが真っ先に進み出て親父の前に立った。

「だからどうしたというのだ？我々の能力を持ってすれば、そんなもの怖くもなるともない。」

武器云々の前にお前を単純に殺すだけなのだからな」

親父の武器を見ても何も驚かなかつた。

だから親父は笑つたのかもしれない。

「そうですね…あなた達的能力を持つてすれば、これは意味のないものかもしれない。

しかし…あなた達的能力だつて弱点はあるんですよ？」

「何だと？」

ベガがそれを聞かされて黙っているはずもまく無防備のまま勇みよく歩み出た。

「面白いことを言うな…不死身で時に干渉を持てる能力にどうやって対抗するっていうんだ？あ？」

しかしそれが親父の思う壺だつたのだ。

「あなた方は、まず視線で空間を特定し、それに見合つた時の干渉をする。

八鬼の能力者と同じ原理です。それならば…」

そこまで話すと親父は瞬時に動いていた。

相手が話しに夢中になっているのを見計らつて、全身の筋肉を一点に集中させたのだ。

今正に虚をついた。

そして、いきなり目の前にいたベガの目を切りつけた。

ズバッ…

石で出来ていた武器は予想以上に良く切れた。

ベガは眼球を両目とも深々と切りつけられ、悶絶した。

「目を潰せばいい…そして」

そのまま痛みに耐えていたベガのから空きの心臓目掛けて躊躇も
することなく、

その武器を流れるような動作で一気に突き立てた。

「これで終わりだ」

一時の静けさの後に、

「ぐあああああああ」

ベガの絶叫の声がその場に響き渡った。

そして苦しきのあまりに、地面をのた打ち回っていた。

こんな衝撃は久しぶりだったのだろう。

ベガは隙をつかれたので理解するのに時間が掛かった。

しかも今までに味わったことのない苦痛だった。

「ぐお…」ほ…」

吐血の量も多く、胸を苦しくかきむしっていた。

目も見えない状態だったので、自分の状態がどんなものかも分からなかった。

「何故だ…再生が…できない…俺の体が…」

自らの体を見て驚いていた。

他の二人もその様子には驚かざるを得なかった。

「どづいっことだ！」

説明をしろと言わんばかりに、デネブが親父の方を睨みつけた。

すると親父は出し惜しみするわけでもなく、自らの持っている血塗られた武器を差し出した。

「先ほども話しましたが？これは時の雫の一部ですよ」

「それは知っている！どうして我々の不死の能力が効かないのだ？」

「あなた方の体に入り込んでいる時の雫の欠片と同調しているからですよ。」

大きな時の雫の欠片は小さな欠片を吸収するようです。

元の姿に戻ろうという力がそこに働いているのかもれません。そしてそれはあなた方の体に入り込んでいる時の雫を取り込むということです。

だからあなた方の体の特異な能力も無効化する。そこまで言えば分かると思いますが？」

「つまり、我々の天敵のような存在ということか…確かにベガの様子を見ればその通りだな」

アルタイルは仲間が瀕死の重傷を負っているにも係わらず、冷静に見つめていた。

「アルタイル…頼む…俺の…体を…修復してくれ…」

ベガはのた打ち回りながら、懇願していた。

先ほどまでのリオと同じような姿だ。

「無理だな。我々の能力を無効化されたら死を待つだけだ。諦めろ」

「そんな…馬鹿なこと…認めると…言うのか…は…は…」

声は細くなり、息をするのも辛くなっていた。死は目の前だ。

俺は怖くなっていた。今までの行動を親父は当たり前のように自然にやってのけたからだ。

ベガの体は消えかかっていた。今までの能力のつけが一気に現れたのだろうか？

そしてそのまま衣類だけを残して、その場から姿を完全に消して
しまった。

70話

「デネブ、距離を取れ！奴を中心とする三メートルは攻撃範囲内だ。忘れたのか？」

アルタイルは、ベガが消えたのを見て呆然としていたデネブに声をかけた。

「あ…」

少し遅れてデネブが反応した。

しかしそれよりも先に親父は動いていたのだ。

さっきと同じように虚をつく気なのだ。

素早くデネブの背後に回りこみ、例の武器を振り下ろそうとしていた。

「馬鹿が！」

アルタイルはそれを見ていた。

だからデネブの背中を蹴り飛ばしてその攻撃を避けさせた。

「う…」

デネブは前のめりになりながら地面に両手をついた。

そしてその後、親父の攻撃が空を切るようになった。

「みゆ！」

親父はそれを見るなりみゆに助けを求めた。

おそらく時間の勝負だと判断したのだろう。

こいつらに時間を与えては殺すことができないと……だから、みゆに追撃の指示を出したのだ。

みゆはその言葉で飛び出した。

地面に手をついているデネブに向かって小太刀を握り締めて襲い掛かった。

「くそ……」

デネブは起き上がろうとしたが、その瞬間にみゆの姿を間近で直視することになる。

今だ！

そう思ったに違いない。

デネブはみゆを自らの空間に捕らえたと思った。そしてその瞬間に時を戻す能力を発揮した。

凝視して数秒で、数年分の効果があるこの能力はみゆを赤ん坊までにいかなない程度に戻すことになる。

だが、みゆはその視線の先から少し外れていた。

視界に入っていたのはみゆの背後に見えた長テーブルだった。

それはものの数秒で姿を木材に変えてしまった。

「う…」

高速移動するみゆにデネブは付いていけなかった。しかしそれよりも先にアルタイルが動く。

時を止めたのだ。

彼は数秒だけ時間を止められた。

すぐにデネブに襲い掛かっているみゆの無防備な背中に向かって刃を突き立てた。

そして時間は戻った。

「ぐ…」

その場の状況が一変して驚いたのは、親父たちだった。

みゆがいきなり倒れたからだ。

「みゆ！」

俺は思わず叫んでいた。

みゆは悶絶して態勢を大きく崩し、その場に膝を付いていた。

俺はそれを見るなり誰よりも早く駆けつけた。

「ぐは…はあ…はあ…」

訳が分からない内に自分が傷ついていると思ったことだろう。

「流石、第三の人類だ…」

それでも絶命に至らないとは…デネブ、お前も落ち着いて状況を組み立てろ。

所詮は我々の動揺を誘つての攻撃だ。落ち着けば防げる…

このままではベガの二の舞だぞ。お前もそこまで愚かではないだろっ?」

アルタイルはデネブに的確に指示を出した。

それを聞くなり、デネブは頭を切り替えるかのように落ち着きを取り戻した。

俺はその瞬間で三人の性格を把握した。

絶命したベガは傲慢で自己能力を過信しすぎている。

そしてデネブは臆病者だ。人の意見に左右されやすく、優柔不断。

最後のアルタイルはそんな二人の性格を知っていて自由に動かし
ている。

俺は一番の脅威がアルタイルであることを悟った。

奴の能力も一番厄介なものだしな。

時間は数秒止められるらしいが、範囲はどの程度なのだろうか？

この星そのものの時を止められるのだろうか？それとも特定の空間だけか？

頭の中でいろんなことが回っていた。しかしその前にみゆの状態だ。

すぐに体を抱き起こして確認する。

幸い急所は外れているし出血の量もそんなに多くない。

というよりも刺された箇所がみるみる治癒しているのが分かる。

「私は…だ…大丈夫だ。それよりも…奴から目を離すな」

みゆは俺を気遣ってかそんなことを口にした。

だが、そんな心配をよそに親父は動いていたのだ。

虚を突かなくては倒せない相手だと知っていたからだろう。

少し焦りも見えながら、デネブに襲い掛かっていた。

持っている希望の武器を頼りに距離を数歩で縮めた。

デネブは冷静だった。

親父の動きを読み取り、最初の攻撃を見切ったのだ。

「く…」

動きが一瞬止まり、親父の表情が凍りつく。

こんな至近距離で奴の能力を使われたら、それこそ終わりだ。

用は一点に集中する視界に入りさえしなければいいのだが、今その危機に直面したのだ。

親父は急いでその場を離れようとしたが、時は既に遅かった。

デネブが隠し持っていたナイフが逆に親父の右腕を切り裂いていたのだ。

「何！」

そんな攻撃に親父は戸惑った。

てつきり時の能力を使うものだと思いついていたので、そこから逃れる術を考えていたからだ。

その判断の遅れが右腕を切られる結果へと繋がっていた。

後退を余儀なくされ、親父はそのまま大人しく下がった。

敵は追撃などせずじつじつと構えていた

71話

「目が覚めたよ…灯。だがお前もベガと同じだ。自らの力を過信しすぎている…我々の能力は狭い範囲の物体にしか有効ではない。」

だとすれば、これは戦闘向きではないのだよ。まあ、アルタイルのような例外もあるがな。

だから私はそれを使わなかった。お前は使うと思ったのだろうか？自分の判断に狂いがないと思ったのだから…くくく…」

こいつ…以外にも頭の切れる奴だ。

俺はデネブを甘く見ていた。

それは親父も同じだった。こいつには勝てるどころか慢心していたのだろう。

だから何も言い返すことも出来なかった。

「右腕の腱を切っている。もうお前の右腕は使い物にはならない。

一撃だけだが、実に効果のある一撃だよ。お前の最も得意とする攻撃の要を封じることが出来たのだからな。

左腕の攻撃では読み取るのも容易い…」

親父は垂れ下がる右腕を見ていた。そこからは血が滴り落ちていた。

力を入れようにも入らない。そんな様子だった。

「確かに…私はそう思い込んでいた。だから、彼女が私の相棒にいるんですよ？」

そこまで話すとみゆが俺を振り切るように立ち上がっていた。

「止める！みゆ！」

俺は叫んでみゆの右腕を掴んだ。その言葉を聞いてみゆの動きも僅かに止まった。

「親父も…もうこいつに戦わせないでくれよ！」

俺にはこれ以上みゆが傷つきながら戦う姿を見るのが耐えられなかった。

だから親父に向かってきつく話した。

だが、それを聞き入れようとしなかったのはみゆだった。

「海…どいてろ。これはな、私の意思なんだよ。」

灯と…あの日一緒にこの道を歩むと決めた時からのな…」

「どづいつことだ？」

「私は…感情を持つこともままならない人形だったんだ…それが今は違う。」

私をこんな風にした元凶の者達がいると言うことに生まれて初めての怒りを感じているのだからな。

目的を失った私がこうやって人間と同じように感情を抱けるようになってる…

ひょっとしたら人間に近づいているのかもしれないという希望さえあるんだ」

「お前…」

「はは…しかしこんな異常な体の持ち主が人になれるとも思わないが、私はその可能性に賭けたんだ。

だからこれは私の戦いでもあるんだ。あいつらを倒さない限り私にだって未来はないんだ…」

人形のままで死んでいくだけなんだ」

それは強い言葉だった。

みゆが初めて自分のために戦おうとしているのだ。

俺には彼女を止めることなど出来ない。

掴んでいた手が緩んでしまった。

「こいつらは…ここで倒す！」

傷が塞ぎきっていない状態でみゆはデネブに向かっていった。

通じるはずのない武器を握り締めて…

俺も何かしなくては！そう思いもしたが、体がまるで動かなかつた。

アルタイルは幸い動いていない。だが、デネブの力も相当なものだ。

もしも止まった状態で直視されたら、おそらく赤ん坊まで戻されてしまうだろう。

しかしみゆは躊躇しなかった。自らの体を覆い被せるかのようにデネブの目の前に現れた。

デネブとみゆの目が合う。その間一秒にも満たない間だった。

まずい！このままではみゆが！

そう思った時に親父は既にデネブの背後に回りこんでいた。

みゆを囮に使ったのだ。

目の前に現れた敵に集中してくれればその分だけ隙が生まれる。

そして能力の発動前にデネブを絶命させれば終わりだ。

会話をしなくてもそれがお互いに通じていたのだ。

親父の左手には例の武器が握られて、そのまま首筋を真っ直ぐ狙っていた。

決まりだ。誰もがそう思ったが、実は違った。

刃先が体に触れるか触れないかの刹那に、デネブの体は向きを変えていたのだ。

親父の動きを完全に読みきっていたのだ。

体を半回転させながら攻撃を避けつつ、そのまま親父の左腕を切りつけ、更にはみゆの腹部に蹴りまで放っていた。

同時に二つの攻撃を奴はやってのけた。

親父の左腕は鮮血を上げて垂れ下がった。

そのまま武器も地面に落としてしまった。

武器は親父の足に当たり地面を滑るようにしてその場から移動した。

そしてみゆはと言うと、大したダメージではないが、先ほどの蹴りで大きく後ろに吹き飛ばされた。

「冷静になれば、お前らの考えも手に取るように分かる。

私の能力を考えれば視界を塞げばいいだけなのだからな。

それに怖いのは灯…お前のこの武器だけだ。お前に意識を集中させていればそれでいい。

不死身のこの体ならその小娘の攻撃を多少避け切れなくても構わないのだからな…」

肉を切らせて骨を絶つ覚悟というものが。

生身の俺らにはできない芸当だ。

「くく…両腕が使えなければ、もはや武器の意味はない。
後はその忌まわしい武器を取り上げるだけだ」

そしてデネブは親父が落とした武器を探した。だが、その武器がどこにも見当たらなかった。

「馬鹿な？」

その場にいた誰もがそう思っていた。

ただ一人を除いて…

それからデネブが気がついたときには、遅かった。

体の中に鋭利なものが食い込む感触が背中にしたのだ。

「う…あ…」

そーと背中を見ると、そこには親父の落とした武器がそこにあっ
た。

背中に突き刺さって…

「あれは…」

俺は慌てて立花の方を見た。

すると、立花の手首から先が消えていた。

「空間の…転移か…」

デネブは立花を睨んだ。

その事実がようやく分かったのだ。

親父の落とした武器を立花は拾い上げて、リオを倒した時のように体の部位の空間転移の能力を使ったのだ。

「灯…貴様…そこまで計算していたな？」

武器をわざと立花の方に蹴って…自らまで罠に使い…」

デネブはベガ同様に絶命を免れないだろう。声が…体が徐々に弱くなっていく。

目の焦点が合っていないようにも見えた。

がくんと膝をついて両手まで地面にべったりと付けた。

「両腕とあなたの命の交換なら安いものでしょう？」

立花が気の利く子で助かりました。しかしそれはあなた方の招いたことでもある。

立花のことを蔑ろにし、物のように扱っていたのだから…」

見下すようにデネブの前に立っていた。

「くそ…」

デネブはそのままベガ同様に体を消滅させ、衣類だけがそこに残っていた。

72話

「くく…はは…」

遠くから笑い声が聞こえた。

最後の生き残りアルタイルだった。

彼には焦りといった様子は微塵もない。あるのは爽快感を感じながら高笑いをしていた。

「仲間が死んで何がおかしいんですか？」

「いや…ここまで計画通りだとおかしくてな」

「計画通り？」

「お前がその武器を探すことも実は私の計画の一部に入っていたのだ。」

なぜなら…それがなくては時の雫を元に戻すことができない。

だからお前を利用したのだ。お前が我々を狙うように私は仕組んだのだ。

二人には内緒でな。あの二人は私がいなければ何もできないのだ…いずれ足手まといになることは分かりきっている。

それならば、唯一我々を殺すことのできる武器で二人を片付けてもらおうと考えた」

「つまり…私は、運び屋と殺し屋ということで利用された？」

「ああ…あの二人と真正面からやりあえば少なくとも無傷ではすまない。

それに同士討ちも考えたのだが、それも上手くはいかないだろうか？だからお前を選んだんだ。そしてお前は二人との戦いで十分弱った。

後は私がその後始末…自らお前を殺すまでだ」

そこまで話すとアルタイルの姿が親父の後ろへと移動していた。

時を止めたのだ。

しかも手には立花が持っていたはずのあの武器が…

「この武器も私が預かれば、もう私を殺すこともできない…」

尾上みゆ。お前とてこの武器で攻撃されれば絶命は避けられないぞ？

お前の細胞は我々と同じく時の雫が流れ込んでいるようだからな

…」

ここまでくると何が何だか分からなくなっていた。

「みゆ…お前の話を聞いて門の向こう側の世界の様子は大体分かった。

あの世界は時の雫の欠片が大気中に多く含まれていたのだ。

それが人体に与える影響も多い。オリジナルの人間も少なからずその効果が出ただろう…」

そしてお前のような作られし人間にもな」

「確かに…私のような完璧な人間が出来上がる確率は低かった。

その代わりに出来損ないが次々と生まれめちやくちやの世界にな

っていた…」

みゆは向こうの世界のことを思い出していた。

「そんな門の向こうの世界の汚染された生物がこの世界にも多大な影響を与えたのだ。

生態系を乱し、時には狂った人間までも作り出した。我々も人体の実験は幾度となく繰り返した。

だが、それは向こうの世界の生態系に対抗する手段の一つでもあったのだ。

時の雫を元に戻す前に意味不明な生物にめちゃくちやにされては元の子もないからな」

「あなたには聞いていなかった。この先どうやって時の雫を戻すんです？」

「そう言えば話していなかったな。いいだろう。教えてやるう」

アルタイルは全てが揃ってご機嫌なのか妙に口が軽くなっていた。

「時の雫を元に戻すのに大事なことが三つある。

一つは全ての門の完全開放。二つ目はこの武器…

この世界にある一番大きな時の雫の欠片が磁力を放つように全ての欠片を集めるからな。

そして最後に触媒となる人間だ」

「人間？ 鉱物を戻すのに人間が必要と？」

「あれは未来と過去を繋ぐ門。

それぞれのその場所、その時に関与した者がきつかけとして必要

となる。

元々鉱物と呼ぶよりも生命体に近いからな。だから生物の能力も必要なのだ。

それぞれの世界に住む二人の人間が鉱物と混ざり合い、そしてあらゆる因果を修復し元の姿に戻るのだ。

この世界に流れ込んだ壊疽者から選んでもいいのだがな……」

アルタイルはみゆの方をちらりと見た。

朱里が触媒になることは知っていたが、もう一人の触媒になる門の向こうの世界の生物ということは……

「その触媒となる人間が朱里と……みゆということか！」

俺は叫んだ。

「そうだ……互いに強い生命力を持っている。

二人は女性でしかも時の雫の恩恵を受けた人間だ。これ以上ない適材者だ」

「何故だ！なぜ、朱里でなくてはならない。それに何故あいつが時の雫の恩恵を受けていると？」

「おっと……少し簡潔に話しすぎたな。まずは朱里のことから話そう。彼女は守護人と言う我々の側の人間なのだぞ？遠からず我々の遺伝子を受け継いでいるのは当然だ……」

そして次の答えだが……時の雫という生命体には母体が必要なのだよ。

時の雫を取り込んでいるのなら抗体が出来ている。取り込んでも拒否反応が起きない。

二人は混ざり合って一つの生命となり、新たな時の雫を生み出すのだ…星の偉大な母親となる」

そんなスケールの大きなことなのか。

俺は逆に言葉を失ってしまった。

しかしそんなこと認めることができるはずもない。みゆもすぐに否定した。

「ふざけるな！私が大人しく従うとでも？殺したければそれで殺すがいい。私はお前を殺してやる」

「そうかい…だが、無理だ。三ヶ月前の出来事を私は知っている。三条織斗だったかな？彼から学んだのだよ…第三の人類にも弱点がある…」

俺は咄嗟に叫んだ！

「みゆ！奴の目を見るな！」

しかし遅かった。みゆの体がびくっびくっと言葉が発せられなくなっていた。

「軽い呪術の契約だ…これぐらいの技、私にだって出来る…」

にやりと笑ってこっちを見た。俺は目を避けるようにして合わせなかった。

73話

「心配するな…この技はそう頻繁に使えるものでもないし、私はそこまでこの能力に長けていないのだよ…」

ただし、彼女に掛けた暗示は三条織斗と同じものだ。つまり…」

「お前が死ななければ解けないのだな」

俺は代弁してやった。

「どこまで卑怯な…」

親父はアルタイルに背後に立たれたままため息をついた。

「貴様…」

俺が飛び出そうとすると、

「朱里…入って来い！」

奥のドアが開いてドレスに身を包んでいた朱里が入ってきた。

しかしその目には生気が感じられない。

人形のように言われるがままにかつかつとヒールの音を鳴らしてアルタイルに近づいていた。

「どうだい？彼女もご覧の様子だ。そして、後は…」

朱里に目が奪われた瞬間を狙っていたのだろうか？

どさつと誰かが倒れる音がした。

「親父！」

親父が地面にうつ伏せになって倒れていた。

背後には血が滴る短剣を握っているアルタイルの姿があった。

「海…済まない…」

息はあったが重傷には違いなかった。立ち上がることもできず、傷口の血が地面に広がっていた。

「これで終わりだ。残るは君達二人と、その死にぞこないだ…だが君達に脅威は全く感じない」

アルタイルは鍵となる武器を手にして俺たちに近づいた。

立花は脅威を感じていたのだろう。小刻みに震えていた。

俺だつて怖かった。しかしそこから逃げるわけには行かないんだ。

朱里とみゆを捕らわれ、親父が殺され、そして世界が終わる…

そんな状況を何もせず眺めていることなどできるはずはない。

「リオ…君のしぶとさには感心する。

出来損ないとはいえ、最後の場所に残っているのだからな。デネ

ブ、ベガとは大違いだ…」

くすくすと笑っていた。

リオは何も話せなかった。というよりも体が限界だった。

こんなの…

こんなの許せるのか？

人を人とも思わず、自らが作った人間ですら物と思う。

そんな者が創造主になろうとしている。

星の未来を担おうとしている…

確かに俺たちの存在は、大事の前の小事かもしれない…

だけど…俺たちは…

俺たちは…

俺たちは…

それでも…

「俺たちは、生きているんだあ！」

大声を出した俺にアルタイルは冷たい視線を向けた。

「はは…だからどうした？」

「お前と刺し違えても殺してやるよ」

「お前が？愚かな…どうやってたら私に勝てる？三条織斗と私は違う。彼は自らを戦いの中心に置かなかつたが、私はそんなことをしない。」

殺すといったら、確実に殺す…」

アルタイルはそれが可能なのも分かる。しかしこの場所は俺が守らなければ、誰が守るんだ？

「うるさい…」

立花も殺される…親父もまだ息がある。それなら助けられる可能性だってあるんだ。

「俺が貴様を殺す！」

動け！

何も考えるな！

俺の体はアルタイルに向かって一直線に動き出した。

迷いなどない。

未来を見ることもしない。

これは…

俺の最後の戦いだ。それなら自らの本能に従っただけ…俺の血に…能力に…

迷いなくふつきれることの出来た俺には、恐怖心はなかった。

アルタイルは嬉しそうに俺を眺めていた。

そんな余裕が命取りだと分からないようだ。

俺の手にはリオと戦った時のナイフがある。それを奴の右手に向かって振るった。

しかし寸での所で空しく空を切った。

「お前はこの武器を奪い取ろうとしているのだろうか？そんなの分かりきっている…」

これが唯一私を殺す物だからな」

こいつ…

俺は見かけだけの男かと思っていたが、とんでもない、俺の攻撃を完璧に見切りながら話しかけてきた。

それでも俺は攻撃の手を緩めない。

相手が下がれば前進して距離を詰める。

右に移動すれば、右に。

左に移動すれば左にと。

何度かわされたのかは分からなかったが、アルタイルが重心を崩すことはこれっぽっちもなかった。

そして互いに足が止まる。

俺の息は上がっていた。

「そんなものだろう…」

灯とは一対一ではやりあいたくないが、お前は私の能力を使わなくとも簡単に殺せるぞ。

意気込んだ割には拍子抜けだな…それなら」

アルタイルは時を止めていた。

俺の体は動かない。

そしてその間に悠々と離れていた立花の側まで移動し、無防備な腹部に向かってナイフで刺した。

「え？」

立花が気がついたのは、時を戻されてからだ。

腹部からの出血…そしてそのまま地面に倒れた。

「立花！」

俺は叫んだ。

74話

「この子は…残り十分持つかな？」

一気に止めは刺さなかった。お前にはもっと絶望を感じて欲しいからね」

立花を眺めて笑った。リオの時と同じように…

俺は移動していたアルタイルに向かって走っていった。

そして同じことを繰り返そうとしていたが、その前にアルタイルに拳でカウンター気味に顔面を殴られた。

その衝撃はやさ男の出せるものではない。

以前悠斗やりあった時の衝撃に似ていた。

「私はね…自らの体の能力も高められるのだよ？」

遺伝子操作というものはそうだ。お前も過去にいろんな変わった者と戦っただろう？

それは私やポラリスの遺伝子を引き継いでいたからだ…
所詮コピーに勝ったぐらいで私に勝てると思うな…」

俺は鼻と口から出血をしていた。

鼻が折れたか？

歯も欠けちゃった…

「だから？それで諦めると言うのか？俺はな、二度と諦めたりしない」

「やれやれ…しつこいことこの上なしだ。」

お前にだけはこの星の最後の時を見せてやるうと情けをかけたのだが…

完全に命を絶ってやら無いと気が済まないらしいな」

「そんなものは誰も見ない。お前はここ終わるのだからな」

どこにこんな自信があるのかは分からなかった。しかしこれだけは言えた。

俺の能力の全てが、今開放されつつあるのだと。

「なら…望み通りに」

そこまで話すとアルタイルは再び時を止めた。

止まった世界でアルタイルは歩きながら俺に近づく。

そして目の前まで来ると、ため息を一つついてから

「親子共々、強情な奴らだったな。しかしこれで終わりだ…」

俺の首筋に向けてナイフを構えた。

ぐっとナイフに力を入れようとしていたが、その前に俺はにやりと笑って言ってやった。

「お前がな…」

そしてナイフで奴の右腕を突いてやった。

「ぐあああああ」

流石のアルタイルもこのことには驚くしかなかった。

このまま怯まずに攻撃すればひよつとしたら俺に致命傷を与えることも可能なのにそれをせず後退した。

予想外の行動には弱いらしい…

「貴様…私の能力を…」

「見えていたよ。全部…あんたが今まで時を止めた中動いている様をな…しかし動けなかった。

目では追えるが体が反応しなかった。だけど…俺自身の能力が開放したらしい。

もう、お前の能力は効かない」

「何だと…」

アルタイルには理解しがたい事実だったらしい。

追った傷のことよりもそのことがショックらしく瞳孔を大きく開いて咆哮にも似た大声を出した。

「そんな馬鹿な！そんな馬鹿な！私に勝る能力が存在するはずがない…」

千年もの間。自らを超える生物など存在せず、自己をどんどん高めていったその生物は初めて恐怖を感じていた。

俺という生物に。

「あなたの…負けですよ…」

親父が地面に倒れたまま俺たちに声をかけた。

「海は…そもそも…私の子どもではない…」

「え？」

「十三年前…あの門が開いた時にこの世界に現れた第三の人類だ…能力は…尾上みゆ同様に高速再生…それともう一つは…時のあらゆる干渉…」

「まさか…」

「私もこれは今まで知らなかった…」

しかし…海の今までの戦い方を…見たり聞いたりして、今はつきりしました…」

つまり…こいつ自体があなたの天敵なんですよ…」

「リオが…再生できなかったのも…」

「そうです…時を殺す能力を持っているから…」

あなた方の不老や不死は体の細胞に時が干渉しているからだ。止めたり、戻したりと…しかしその干渉を…繋がりを海が切った

のだ。
それが…ラストCHILDレン、希望の子どもと言われていた…お前の能力だ」

俺は今までの自分のことを思い出した。

未来が見える…これは、時の能力の一部だった。

そして京に傷つけられた時、リオに半殺しにあった時…すぐに再生していた。

思い当たることばかりだ…

「俺が…あの…みゆの話していた、希望の子どもなのか？」

俺はそうなのだろうと思っていながら、あえて聞いてみた。

「お前が私の前に現れた時を考えれば、それとも一致する…みゆから聞いた話と寸分違わず同じだから…」

「く…」

俺自身も訳が分からなくなっていた。

親父とは血が繋がっていないことを話され、自分がみゆと兄弟のような存在だということを知ったのだから。

「それなら…私のこの武器で、こいつを殺すことも可能だということだ…私にもまだ勝機はある」

今まで握っていたナイフの代わりとばかりに今まで隠しておいたあの武器を懐から出した。

そう、先ほどまで親父が握っていたあの時の雫の欠片だ。

そして俺の方に視線を戻し身構えた。

右腕は思うように動かないらしく、左手に持っていた。

まるで親父の時と同じだな…

「これからは能力抜きに純粋な闘争だ。その上でお前に勝つ」

闘争本能をむき出しにし、俺は全ての力をここに出し切ろうと集中した。

75話

研ぎ澄まされる感覚は親父に近づいたのだろうか？

相手の気配が俺の事を取り込もうとしているのが見える。これが…殺気だ。

あの武器に刺されたら俺とて回復は無理だろう。

「行くぞ！」

そんな不安など今考えるな。自らの能力を信じる！

俺は奴より上だ！

ナイフと鉋物がぶつかり合う。

音は金属音ともまた違った。そして火花が暗闇の中で飛び散った。

一撃、二撃、三撃。

その一つ一つが体の芯まで響いてくる。利き手ではないのに何と
いう力だ。

ここで押し負ければ死ぬ。

そのことを分かっていたから、自然と力も入っていた。

アルタイルの動きは水そのものだった。

俺の攻撃をするりとかわし、瞬時に反撃に応じる。全く隙がなかった。

幸い利き手ではない右腕が使えない分、力が少し弱まっていた。

だから俺は押し負けることなく応戦していた。

上下左右の空間を使い、相手を揺さぶったが効果はなかった。

こいつ…本当に強い。

そして時間は刻々と過ぎていく。

「大きな口をたたくだけの事はある…実力差が完全に埋まったのだからな…」

しかしそれだけでは私には勝てない!」

アルタイルは滑り込むように俺の目の前に現れた。

「うー!」

下から振り上げるように切りつける動作を俺はどうにか見切りかわす。

しかし今度は足を蹴られ、地面に倒された。

そして背中を地面についた瞬間に悪寒を感じた。

俺はすぐに転がってその場から必死に逃れた。

アルタイルはそれも読んでいた。

起き上がろうとした俺の心臓目掛けて突いてきたのだ。

「くう」

手を出してどうにか相手の左手を止めた。

ほっとしたのは、つかの間で今度は腹部に強烈な前蹴りを入れられていた。

「ぐは」

また地面に倒されてしまった。

しかも内臓が破裂したようだ。強烈な痛みが全身を襲った。

回復できることには出来るが、時間が掛かる…

そんな時間を相手が許すはずもなく、俺の前にすでに立っていた。

痛みで体が思うように動かない…

「体術の差が出たな…お前はナイフを振るうことしかできない。しかし私はナイフの他に己の肉体という武器を持っている…」

「くそ…」

見上げるようにアルタイルの顔を見た。

「くだらないおしゃべりはもうしない。これが本当の最後だ」

空を切るように素早く、頭目掛けて刃が間近に迫ってくる。

このままでは…

そう思った時に何かが目の前の視界に入った。

「え？」

アルタイルは咄嗟のことでそれに向かって刃を突き立ててしまった。

「ぐうううっ…」

俺らの前に割って入ったのは柀リオだった。

「リオ！」

俺とアルタイルは同時に声を上げていた。

彼は俺の盾になるようにして、アルタイルからの攻撃を防いでくれていた。

今しかない！

そんな千載一遇の機会を俺も見逃すはずがない。

リオの体の陰からアルタイルに向かってナイフを下から突き出し

た。

ずん…

アルタイルの胸にナイフは刺さった。

これは狙ってやったと言う訳ではなく、偶然だった。

闇雲に手を出した結果だ。

「ぐあああああああ」

二度目の叫び声。

心臓を貫いたかは分からなかった。しかし人体の重要な臓器のある箇所ではあるはずだ。

そして俺に傷つけられたということは、修復不可能なのだ。

どくどくと胸からは血があふれ出し、服を真っ赤に染めていった。

足取りもふらつき、俺に追撃をする余力など残っていないようだった。

激痛は体を支配し、心も支配する。

「リオ！」

俺は目の前に倒れているリオに声をかけた。

本来なら俺のことを殺そうとした奴で忌むべき存在かもしれない。しかしこいつはこいつで可哀想な奴だ。

俺はリオを抱きかかえたが、もう生きる力は残っていなかった。

何故なら…事の発端を俺が作ってしまったのだから。

回復できない体で、更にあの武器で追い討ちをかけられてはひとたまりもない。

「ぼ…僕は…生きている意味を…見出せなかった…だけど…初めて…朱里を見たときに初めて…それを見出したんだ…」

やはり朱里の事を…

「頼む…朱里を…救ってやってくれ…そして…僕の果たせなかった…こ…と…を…」

そのまま最後まで話すこともできずにベガ同様に消滅してしまった。

衣類だけがそのまま無残に残っていた。

「私は…私は…死ぬのか？」

アルタイルは口からも大量の血液を吐き出していた。

76話

武器はもう握っておらず、何かを捜し求めるように彷徨っていた。

「そんなことは…絶対にない。ないんだ！」

狂気が彼を支配していた。そして暴拳に出た。

「朱里！みゆ！そいつを殺せ！そしてお前らも自害しろ！」

それが俺の一番困ることだと知っていたからだろう。

反吐が出る。

計画が崩壊した瞬間に俺の全てを奪うなど。

しかし体が動かないのも事実だ。

怒りだけは頭にあっても体が言うことをききやしない。

二人は言いなりだった。

すぐに武器を手にとると、声を発することもなく俺に向かって走り出していた。

「ちくしょう…ここまできて」

俺はふらふらと立っていた。

みゆは小太刀を…朱里は錬玉の剣を握っていた。

距離はどんどん縮まる。

俺の傷はまだ癒えない…

どうしたものか…

こいつらの武器では俺は死なない…

しかし気を失っている間にあの武器で攻撃されたら確実に死ぬな…

どうする？

ああ…考えるのも…馬鹿くさいな…

「ま…お前らだったらいいのかな？」

俺はそんなことを口にして二人の攻撃を無謀にも真っ向から受けようとしていた。

剣の軌道がゆっくりと見える。

思考はそこで途切れようとしていた。

そんな矢先に親父の声がした。

「諦めるな…」

ズバ！

何かを切り倒す音と共に二人の動きは目の前でぴたりと止まった。

「あ…」

何故だ？

俺はそう思っただけで親父の方を見た。

すると親父は最後の力を振り絞って立ち上がり、アルタイルにある武器で止めを刺していたのだ。

首を吹き飛ばし完全なる死を確立させたのだ。

だから二人の術が解けた。

糸の切れたマリオネットのように二人はそのまま倒れた。

俺も膝をついてしまった。

「はあ…はあ…はあ…」

助かったと言う安堵の気持ちと、二人が元に戻って良かったという気持ちに胸を撫で下ろした。

「あなたに育てられた私が…止めを刺せて良かったです。海…後は頼んだぞ」

アルタイルの死体に向かって話しかけると、親父もそのままその場に倒れて動かなくなってしまった。

「親父！」

俺はふらふらのまま親父に駆け寄った。

そして二度と目を開けないことを悟った。

「く…う…くそ…」

救えなかった。親父も…

あんなに優しかった親父。

俺が実の子どもではないのに、育ててくれた…本当の子どものように…

温かい記憶だけが俺の心には残っている。

そして涙がただただ溢れるばかりだった。

俺の生きてきた意味を教えてください…

もしも俺が向こうの世界でずっと暮らしていたら、束縛を受けた人形のようになっていたかもしれない。

尾上みゆのように…

そのまましばらく俺はそこに座っていた。

すると壁が破壊される音と共に、八鬼の連中がぞろぞろと入ってきた。

「海！」

冬香は真っ先に俺の姿を見て叫んだ。

そしてその場の状況を見て、全てを把握したのだろう。

「終わったのか……」

「どうやらそのようだ」

紅蓮が真っ先に俺の元へ近づくと、親父の顔を見た。

「我が友よ……すまなかった。間に合わなくて。

しかし……君は幸せを掴んだんだね。こんな安らかな顔を見せるなんて……」

嬉しそうにそんなことを俺に話した。

「君は、彼の本当の息子ではなかったかもしれない。

しかし彼は……君という存在を知ってからとても穏やかになっていったんだ。

殺伐とした世界を唯一変えられる存在だったからね。

それだけ君のことを愛していた……だから君を守りたかったんだ。

彼はね……何度も話していたよ。君がいたから変わったのだと。生きる意味を持てたと……

それは強い絆で結ばれているんだ」

77話

そう、今から十三年前だ…

俺は護門徒に就任し八年の時が経っていた。

そして漠然とした毎日を送っていたんだ…

楽しさも、人生の素晴らしさも、存在意義も見出せないまま、ただただ、無意味に生きていたような気がした。

こんな無感動な俺が国を守れるのだろうか？

そんな不安もあった。

ここ十年で門が開くことはなかった。

しかし馬鹿な輩は数人いた。

どこからか門の情報を仕入れて、ここ八坂市の人間を生け贄に大量虐殺しようとしていたり、空に向かって爆弾を大量に投げ入れようとしたりと。

その一つ一つを俺は排除していった。

排除は絶命ということだ。俺は何人殺しても罪にはならなかった。だから容赦なく殺した。

そう、相手が例え命乞いしたとしてもだ。

そんな毎日に嫌気が差さないといつたら嘘になる。
しかしそんな俺を支えてくれた人間の存在も大きかったのだ。

「灯さん…どうですか？」

そう言ってお茶を差し出してくれたのは、守護人である千草冬扇
だった。

彼は護門徒の裏方の仕事を任されている守護人という役を担うも
のだった。

堅苦しい付き合い方をせずに、いつも自然に俺に話しかけてくれ
た。

始めは俺も戸惑った。

今まで、普通に話したことのある身近な人物は三賢人しかいなか
ったのだから。

だが、時を重ねることに彼は俺に欠かせない一人の人間になって
いたような気がする。

「ああ…頂きます。しかし…俺の方が年下なんだから敬語はどうか
と…」

「いや…護門徒を守るのが我々の役目です。年は関係ありませんよ。
私と灯さんの年だってそんなに離れていませんしね…
そつだ。今日は娘を紹介したいんですよ」

「あれね…子どもがいたんですか？」

「そうです。実は四歳になる娘が…」

そう言つと、部屋の奥から可愛い女の子がちらちらと顔を見せていた。

「朱里…こつちにおいで。この方に挨拶をするんだよ」

その言葉を聞くと、その女の子は恥ずかしそうにしながら俺の前に出てきた。

「こ…こんばんは…」

「ああ…こんばんは」

「朱里、この人はね。お父さんにとって大事な人なんだよ。だからこれからもこの人とは長い付き合いになるからきちんとするんだよ」

小さい女の子は父親が何を言っているのかほとんど理解できなかつたが、

ただ素直にうんと頷くだけだった。

それを見て、冬扇は朱里の頭をやさしく撫でてやった。

俺はそんな冬扇親子の様子を見て、どこか懐かしい感じになった。

自分も昔は…こんな風に親から愛情をもらっていたのだろう。そ

れをどこかで覚えていた。

そのまま俺は千草家を後にした。

「はぁー…」

外はすっかり雪模様だった。

真つ暗な景色の中で外灯に照らされた雪がちらちらと舞っていた。

今年は雪が多く、例年の倍は降っていた。

俺は煙草をポケットから取り出して立ち止まった。

このまま降れば、明日はかなり積もるな。

そんなことを考えながら煙草に火をつけて、白い息のような煙を吐き出した。

そのまま、ざくざくと雪を踏む音を鳴らしながら、自宅へと向かって歩いていると、

大蛇山に向かって大きな光が流れ込むのが見えた。

「あれは…」

目の錯覚だろうか？見間違えとも思ったが、そうではないことはすぐに分かった。

山が真夜中に光り輝くことなど有り得ないのだから。

俺は、ただごとではないことを察した。

まさか…門が開いたのだろうか？

そんな不安も感じながら大蛇山へと走っていた。

もしも門が開いたらどうするかは事前に聞いていた。

三賢人が用意していた輪廻の剣なる武器がそれを止めてくれるらしい。

どうもこの武器は、千草家に伝わる錬玉の剣やこの八坂市に伝説となっている

草薙の剣と同じものでできているらしい。

どついう構造である門が開くのを止めるのは分からなかったが、門に向かって斬りつければ分かるとだけ聞いていた。

ようやく大蛇山の山頂まで登ると、そこには有り得ない光景が…

空が割れている…

これが門という奴か。

任務について初めての光景に純粹に驚くしかなかった。

話には聞いていたが、ここまでとは…

それならば、すぐに行動に移らなくてはまずいな。

そしてすかさず、例の武器を腰から取り出して身構えた。

これで本当にあの門を閉じることができるとか分からないが……やるしかないんだよな。

紫煙のような空からは、まばゆいほどの光が漏れていた。まるで世界の終わりを告げているかのようだ。

早く何とかしなくては、この世界に危険が及ぶのは明白だ。

するとそこから黒い影が飛び出して、あちこちに飛んでいった。

「何だよ…あれ…」

目に見えない恐怖に襲われながら、俺は効果があるのかないのかわからないまま剣を遠くの門に向かって振り下ろした。

すると、そこから少し遅れて、剣から光の衝撃波が門に向かって放たれた。

「え？」

衝撃の反動が自らの体に返ってきた。

俺の体は踏みとどまることも出来ずにそのまま吹き飛んだ。

「うおー！」

半月の形をした光の衝撃波は一直線に走ると門に直撃した。

バキイイイイイイイイイ

耳の奥に響く音と共に門からは光の雨が降り注ぐ。

ぶつかり合った衝撃の結果がこれか。

目を開けていられない…

しかし門はそれを境に閉じていくのが分かった。

空に開いた門はゆっくりと元に戻り、その姿を消していった。

そしてそのまま空も元通りになっていった。

それを見たことで、俺もほっと胸を撫で下ろした。

久しぶりに嫌な汗をかいたな…人を殺す時もこんなことなかったのに。

空は今までのように雪をちらちらと降らしていた。しかしただ一点違うところがあった。

光の玉が空からゆっくりと降りていたのだ。

「あれは…」

俺はそれを目で追った。

そしてその光の玉はゆらゆらと林の奥へと姿を消した。

俺は何故かその光を目指して走り出していた。

この世界にとって脅威となる存在かもしれないと判断したのだろ

うか？

自然と足は動いていた。

雑木林の中を掻き分けて、ほんの数分で光の玉の降り立った場所へとたどり着いた。

そしてそれを見たときに俺は言葉を失った。

まさか…こんなことってあるのか？

光の玉の主は小さな子どもだった。

赤ん坊というわけではなく、三歳か四歳の子どもだった。

その子は男の子でぼろぼろの衣類を身に纏い冷たい地面に座っていた。

そしてずっと泣いていた。

何かを求め…何かを探して…

どうして、ここに…こんな子どもが？

そんな疑問もあったが、震えて泣いている子どもを俺はほっておけなかった。

すぐに駆け寄って、自らのコートをかけてあげた。

そして、

「もう大丈夫だよ」

そんな言葉をかけて抱きしめてあげた。

すると、男の子はぴたりと泣くのを止めたのだ。

この子は…愛情がほしかったのだろうか？

だが、この子を抱きしめているとどこか懐かしい感覚を思い出す…どこで感じたのだろうか？

ずっと昔のような気がする…そうだ。自分が抱きしめられていた頃を思い出すんだ。

俺はその子をじっと見た

可愛らしい目をしていて、俺の手をそっと握ってきた。

どくん…

心が動く…あの事故から怒り以外の感情にまるで反応しなかったはずの心が…

これは何だ？

温もり？

え？

こんな自分が…あつたのか？

その子は何も話さなかった。しかしそれ以上に目や行動で訴えてきているのが分かった。

俺の事を…

こんな自分のことを…

頼っているんだ。

こんな小さな体で…

胸が締め付けられる思いでいっぱいだった。

それならば…俺のすることは一つだ。

この八年間、俺には何もなかった…そんな俺にできた唯一の生きる意味かも知れないんだ。

「分かったよ」

俺はその子に微笑んで話しかけた。

「お前のことは…俺が育てるよ。俺の…命を懸けてでもな」

何も持たなかった俺にできた希望がそこにあつたのかもしれない。

だからそんなことを迷わず口にした。

するとその子も俺の言葉に答えるように、あうあうと笑っていた。

79話

その子は言葉が話せなかった。というよりも日本語が話せなかったのだらう。

意味不明な言葉を口にしていたのだ。

だから俺は日本語を教えた。

「いいか…俺は灯だ。月夜灯。あ・か・し」

自らのことを教えようと思い、指差しながらゆっくりと話した。

すると、

「あ・か・し…」

すぐに返してくれた。

「そつだ！よく言えたな」

俺は嬉しかった。

小さなことかもしれないが、そんな些細なことに感動するようになっていたのだ。

これは自分が変わった証拠でもあるんだ。

本来ならこんな得体の知れない子どもを見つけたなら、

神徒協会に報告をしなければならぬのだが、内密にしておいた。彼らに知れたら命の危険性だってあるからだ。

だから俺はこの子をきちんと育てようと決意した。そして俺とは違った道を歩ませよう。

いずれは自由に好きな道を進めるような子になってほしい。そんなことまで勝手に考えていた。

俺は神徒協会の一員だ。そのことに後ろめたさはないし誇りにも思っている。

だけど、これだけは俺から奪わないでほしかった。

「とお…さん…」

そんな時に不意にその子は俺に向かってそんな言葉を話した。

教えてなどいない。

しかしその子はそう話したのだ。

あれから数年が経っていた。

俺はその子を海と名付けていた。そしてきちんと住民票も手に入

れていた。

俺は俺で独自の協力者を作るようにしていたのだ。

それはこの国の警察関係者だったり、政治家だったりだ。

神徒協会も影での影響は凄かったが、俺はそのままではこの国のためにはならないと思い、
いろんな人間に接するようにした。

それは海を守るためでもあったのだ。

だから古くから日本に存在する組織、八鬼にも足を運んだ。

「貴様！護門徒だな？」

のっけから大層な言葉だ。しかしそんなことにいちいち腹を立て
いてはきりが無い。

「はい…そうです。私、月夜灯はこの頭目である、唐津紅蓮氏に
会いたくて来ました」

「いい度胸だ。神徒協会と我々が敵対関係にあることを知りながら、
ここに来るとはな。」

まさか、ここを潰しにでもきたのか？」

八鬼の本部であるこの山奥の家屋の入り口にも届かない場所で八鬼のメンバーの一人に足止めをされていた。

すると、奥から一人の男が姿を現した。

そいつはどう見ても戦闘向きという人物ではなかったが、物腰がどこかこいつと違う。

だから俺は目が離せなかった。

「ここで話すのもなんだから、あがりなよ」

「しかし…こいつは、神徒協会の犬のような奴ですよ？」

「だから？俺が興味があるから、いいよと言ってるんだ。何か？」

圧力は相当なものだ…その言葉だけで、門番のような男はすぐに道を開けてしまった。

「さあ…どうぞ」

俺はそのままその男の後をついていった。

目の前の家屋はお世辞にも綺麗だとはいえなかったが、何も言わずに中へと入った。

「適当に座ってくれ…えつと…君は…コーヒー派かな？それとも紅茶派？」

「え？…なら…紅茶派で…」

「そうかい。奇遇だな。俺もだ。すぐに入れるよ」

普通だったらこの展開なら日本茶が出てきそうだったが、紅蓮は湯のみに紅茶を入れて持ってきた。

「どうも…」

俺は、それを受け取るとすぐに口に入れた。

するとそれを見た紅蓮の目が光った。

「ふふふ…掛かったね。君が飲んだその紅茶には…」

何だ？まさか毒が入っているのか？

俺は一瞬動きを止めてしまった。

「隠し味にブランデーを入れてある」

そんなふざけたことを口にした。

俺は俺でそのまま普通にその紅茶を飲んだ。

「どつりで…香りがいいと…」

紅蓮はその発言に納得がいかなかったみたいで、子どものように駄々をこねた。

「おいおい…リアクションが薄いだろー」

もつとき、え？まさか！とか、俺を騙したのか！とか、あるだろう？

何だよーその反応は」

いやいや…そんな反応しないから。

「そんな、せこいことをここの組織の頭目にするはずないでしょ？
殺すなら真正面からすると思うんでね…」

俺は冷めた目で紅蓮を見た。

すると紅蓮もふつと一笑すると、

「いいね…君。以前の護門徒とは違うみたいだ」

「え？」

「前に就任していた奴は冗談の一つも通じない堅物な奴でね。
しかも傲慢というおまけ付きだったから本当にそりが合わなかった」

「前任の奴を知っているんですか？」

「まあね。こんな仕事してれば、自然と会う機会つてのもある…
しかしその敬語止めてくれないか？

気持ちが悪い…見たところ同じぐらいの年だし、お互いニツクネ
ームで呼び合おう！

そうだなー…君の名は月夜灯だったな。なら、あかりんだ！
そして俺の事は、グレグレでいいぞ！」

「いえ…遠慮します」

「丁重にお断りした。」

それから俺は紅蓮と他愛もない話をして、少しずつ打ち解けていった。

紅蓮は表裏のない人間で素直に物を言う。だから俺も嫌いではなかった。

護門徒という役職を取っ払って、俺は彼と友として付き合うようになった。いった。

一緒に酒を飲み交わしたり、鍛錬もした。

勿論、息子の存在の話も包み隠さずした。

彼以外の人間にはこの話をしなかったので、海は普通の子でいられた。

そんな彼は神徒協会とは全く歩み寄ろうという訳ではなかった。

彼なりに国の事を考えて、神徒協会の存在も認めていたのだ。

だから俺はいずれ八鬼も神徒協会と分かり合える日がくると信じていた。

自分がその架け橋になれるのなら…

しかしそんな夢も叶わないまま、時は過ぎていった。

80話

三年前

私は…どうしても自分の育ての親である三賢人に会いたくなくなった。海と過ごす日々を得てから、親の気持ちというものが分かったからかもしれない。

無性に会いたくなくなったのだ。

それは四十を間近に迎えたこの年で、恥ずかしい行為かもしれない…

しかし、この先ひよっとしたら会えないかもしれないと思ったらそれを行動に移さざるを得なかった。

海はもう中学生になっていたから、一人でも大丈夫だろう。

私はそのまま仕事と偽って記憶だけを頼りに北欧に向かい…そして現実を知ったのだ。

私は…愛されていた訳ではなかった。

所詮は手駒に過ぎずにただ動かされているだけの人間だったのだ。

その瞬間、目の前が真っ暗になった。

だから決心した。

自分が何とかしなくては…自分を育ててくれたからこそ、彼らを止めなくては…と。

海を守るということにも繋がるが、これだけは自分のためだと思っていた。

自分という存在は、ひよっとしたらあの時に死んでいたかもしれない。

しかしそれを彼らは救ったのだ。

そして彼らの思惑通りに育てられた。

その経過がどうあれ、私は生かされたことだけは事実だ。

だから…彼らの過ちを…正すことは私でなければならないんだ。

それから自らの生活を捨てることを決意した。

「済まない…勝手なことかもしれないが、私はしばらく姿を消す」
紅蓮は驚いた様子を見せることなく、黙って話を聞いていた。

「生涯唯一の友になるであろうお前にこのことだけは話しておきたかったのだ…」

しかしこれは私の問題だ。だから詳しいことは話せない…それでもお前には頼みたいのだ。

私が抜けた後のこの国の安全を…」

正直紅蓮の顔を見ることができなかった。

こんな勝手な話はなかったからだ。本来なら神徒協会の問題なので八鬼には関係ないことだ。

しかし紅蓮はそんな無茶な願いを受け入れてくれた。

「この国を…想う気持ちは俺も同じだ。だからお前は心配しないでいい。

神徒協会の人間のことも任せておけ。俺らがお前のことは誤魔化しておいてやる」

「ありがたい」

「それでお前は、これからどうするんだい？」

「とりあえず、数年は放浪の旅になる。

外国を飛び回ることになるが、必ず帰ってくる。唯一の心配は息子の子の海のことだが…」

「考えすぎだ。あいつは、もう一人で歩ける。

向こうの世界の人間かもしれないが、お前の息子には変わらないんだ。もっと自信を持てよ」

紅蓮は俺の事を励ましてくれた。そのことは嬉しかったが、どこかいつもと違う感じで恥ずかしくもなった。

「何だ…その…お前に真面目なこと言われると…変な感じだな」

「何だと！俺はいつでも真面目だ」

「はいはい…」

そして俺は海と紅蓮の前から姿を消した。

この世界の未来を変えるために。

紅蓮は俺に親父のことを真剣に話してくれた。

どれだけ俺のことを愛していたのか。そして世界を変えるために自らを犠牲にしていたのか。

その言葉の一つ一つは心の中に流れ込んできていた。

だから泣き続けている…

「残った者を導くことが我々の使命でもある。これからはそのことに生きよう…」

紅蓮は手を差し伸べて、俺の生きる道を指し示してくれた。

「ああ…」

俺も涙を拭って立ち上がった。

「玲紀…そこのお嬢さんを治してやってくれよ」

紅蓮は立花のことを治療するように指示していた。そして冬香は朱里やみゆの元へ駆けつけていた。

「そつだ…開放する門を閉じなくては…」

俺は思い出したように話した。

今、門は正に開放状態になっている。

城の中にいたから分からなかったが、外は既にとんでもない状況になっているかもしれない。

体がぼろぼろでも構わない、俺は城外を見渡せる中庭まで、体を引きずるように歩いた。

外には巨大な門がごうごうと風を吹き付けて口を開いていた。

「これは…」

俺は状況を理解するのに時間が掛かった。

千年に一度訪れるという、全ての門の開放は予想以上の天変地異を引き起こしていた。

空が紫色になっている。

しかも夜なのに明るい…

「時の雫が砕けた時と同じ状況になっているのか…」

俺はアルタイルの話聞いていたので、すぐに察した。

そして俺は時の雫の欠片である、あの武器を持っていた。

81話

「全門開放を止めるのにはどうしたらいいんだ？」

俺は思案していた。しかしその策など思い浮かぶはずもない。

一人で悶々としていると背後から声が掛かった。

「こっとなったらあっちの世界で止めるしかない」

みゆだった。八鬼の連中と朱里も一緒にその場に来ていた。

気がついたのか。

「門の主導権は向こうの世界側だ…だからこそ向こうに行って、時の雫の暴走を止めるんだ」

「どうやって？これは強制的に引き起こされた現象ではないんだぞ？以前のように生け贄を用いて作ったものじゃない…魔法陣の中心にある剣を抜くのは訳が違う…自然の現象だ！」

口論を繰り返していると、俺の持つ武器が光りだした。

「これは…」

「同調しているんだ…」

確かに引き付けられている感覚はある。

「この武器があれば、時の雫の効力を吸収することが出来るかもしれない…これは賭けだ。」

こっちの世界よりもあっちの世界が門のできた元凶なだけに干渉する力が違う…

あちら側の世界で門の力を吸収させて元に戻すしかない…だから…」

そこまで話すと、みゆは俺から武器を取り上げた。

「私が行く…」

「ちよっ」

「時間がない。こっするしかない」

みゆはそのまま門を睨みつけ、旅立つ決意を勝手に固めていた。

「ふざけるな！」

俺はぐいつと腕を引っ張った。

「お前だけ行かせるかよ…」

「しかし…」

「俺だってお前と同じラストチルドレンなんだ…」

それなら向こう側の世界も救いたいのは一緒なんだよ」

「どづいうことだ？お前がラストチルドレンとは…」

そのことはみゆも朱里も知らなかった。

「今話している時間はない！いいから俺も連れて行け、俺が希望の子どもなら異論はないだろうが！」

二重で驚きだという表情をみゆは見せた。

当然だ…しかし時間がない。すぐにあちらの世界に行かなくては…
すると朱里が寂しそうな表情でこっちを見ていた。

「海…あなた…あっちの世界に行くの？」

その目は昔を思い出す。

そうだ…泣き虫だった頃の幼い朱里が俺が先に行って泣いてしまった時だ。

「ああ…これしかないんだ」

俺にはそう答えるしかなかった。

朱里はぐつと堪えていた。多分…泣くことをだろう。

くそっ…胸が締め付けられる。

俺もどうにか平静を装って話した。

「大丈夫だ…あっちで何とかして、また帰ってくる…」

そんなことあるのかどうかは分からないのに…

「約束だ」

俺は満面の笑みを浮かべて朱里の頭を撫でてやった。

朱里は俺の目を真っ直ぐに見ていた。

俺も朱里のことを見た。

「好きだよ…朱里…」

そして朱里の唇にそっとキスをした。

柔らかな感触と共に浮かんだ、締め付けられる想いを必死に俺は抑えた。

俺は…

絶対に帰ってくる。

「行くぞ？」

「ああ…」

それから俺はそのまま振り返ることもなく、みゆと共に暴風の渦の中に飛び込み、

門の中へと吸い込まれていった。

そしてそれを見守る全員は俺たちに希望を託したのだ。

82話

一三年後

世界は穏やかなものだった。

いつもと変わらない日常。

そして今まで全世界で騒がれていた異常気象もなければ、異常者もいなかった。

あの日からこの世界も少しずつ変わっていたのだ。

門は全門開放を成し遂げることはなかった。そして海たちが姿を消してからすぐに門は閉まった。

というよりか存在自体を消してしまった。

それからあの門を始め全世界に存在した門は時間と共に順に消えていったのだ。

私たちには何のことだか分からなかった。

しかし門の主導権があちら側の世界にあるというのなら海たちが何かをしたのだらうと納得するより他はない。

十七歳だった私も今年成人式を迎えることになっていた。

あれから神徒協会は破局を迎えることになった。

信者の中には崇める神がいなくなったと死ぬ者までいた。

しかし上層部が秘密を隠していた分だけ、大事にもならなかった。各自で信仰を続けたり、諦めたり様々だった。

そして八鬼はと言うと、変わらず国の警護をした。

警察機関では無理な事件の解決や、神徒協会の残した異能力者に目を光らせていたのだ。

それでも門がなくなった今は、以前と違い忙しくもなかった。

穏やかにそれぞれが仕事をしながら任務を遂行していた。

冬香は笑って話していた。

「そろそろ結婚相手でも見つけようかな？」

おそらく無理だろう。

しかしそんな冬香にも良いことが…

立花と一緒に住むようになったのだ。お互い話し合い、立花は実の両親の眠る墓に墓参りをした。

そこで誓ったのだ。

「これから…姉さんとお父さん、お母さんの意思を継ぎます」

と。

そのことには冬香も驚いたらしい。

後で知ったのだが、立花は家族で映っている唯一の写真を常に大事に持っていたそうだ。

だから心では仲たがいをしたくはなかったらしい。

若さゆえに反抗したくなった。そういったところだろう。

それからの二人は立花の豪邸に住むことになった。

しかし互いに共存できるかが不安だ。

男の好みもどちらかというに似ている気がするし、どっちが料理をするんだ？

そんなことは置いておいて、次は私の番かな？

あれから守護人という役職もなくなり、私の生きる道は大きく変わってしまった。

両親もやりたいことをやりなさいと言ってくれた。

その時思った。

この先、世界の未来に役立つことをすることをしなくては…

それにはどういうことをしたらいい？

ずっと考えたが頭の悪い私には科学的なことは無理だと判断した。

だから、ボランティア活動をしながら人に教えることをしようと思っただの。

私は剣術だけは飛びぬけて得意だったので、大学も剣道の推薦で行くことができた。

だからそれを大いに利用し、これから未来に繋がる子どもたちにも何かを残そうと考えた。

季節は夏だった。

「ねえ、朱里ちゃん。午後授業ないでしょ。俺とさ…遊びに行こうよ。」

「いや、俺と行くよ。こいつよりもまともな遊びできるって…別荘とかどう？」

「お前汚ねえなー金にも言わせてるだけじゃねーか！」

同級生の男子達は毎日のように入れ替わり立ち代りしつこく私に付きまとっていた。

そんな男子に人気の私だから女の子の友達はほとんどできなかった。

「あ…御免…私にはやることがあるから…」

その言葉で断ることが多かった。

高校生活以降はどうも人と付き合うのが苦手になってしまった。

いや…心がそこにならないのだ。

何をやっていても楽しくない。

何かが抜けている…

思い耽ることも多々あったが、そんなことではいけないと自分を何度も奮い立たせていた。

私の通う大学は実家からそう遠くない。

地元の大学を選んだのだ。

毎日歩いて通学をしていた。

大学には同級生も数名いたが、地方の人間が大多数だった。

入学して丸一年。

この生活に馴染めていないのかな？

そんなことで自己嫌悪に陥ってしまった。

「今年も暑くなるのかな？」

大学から自宅に通じる河川敷を歩きながらふと呟いた。

今日は雲ひとつない青空で、気温も高く泳ぎにくいのに最高の天候だった。

そう言えば…

海と京、真希と私が初めて四人で出掛けた時もこんな日だったかな？

あの時の記憶が忘れられなかった。

四人でふざけながら海に行った日。

悠斗に邪魔されたっけか？でも私の作ったお弁当おいしって食べてくれたっけ…

そうだ…真希は海のこと好きだったんだよな…

何であの時あんな態度とったんだろ？

全く…あの頃の私は素直じゃなかったんだな。嫉妬して、そっけない振りして…

それでも私…幸せだったな。

空を見上げながら、何故か涙が出ていた。

「あ……」

予期せずそれは自然と流れていた。

海と別れるときも泣かなかったのに。

どうして…今頃…

あいつ…どうしているのかな？

涙を拭って、歩き出そうとした時に風が吹きぬけた。

「あ……」

気持ちのいい風だ…暑さの中に心地よさを感じる…

どこか心が軽くなった感じだった。

立ち止まり目を瞑りながら両手を広げてその風を体いっぱい感じていた。

「ふふ……」

思わず笑ってしまった。

そして風が通り抜けるのを待ち、再び目を開いた。

すると…

「え？」

そこには…

「どうして？」

私の目に映ったものは…

「海…」

それ以上は何も言えなかった。

三年前に私の前から忽然と姿を消し、何度も何度も叫んだ彼が姿を現していたのだ。

これは幻なのだろうか？

私自身がここが夢なのかと思ってしまう位現実離れしていた。

ふわふわと浮きだっていて地面に足がついていないようだ。

何か…

何か話さなくては…

私の心臓はばくばくと鼓動を速め、頭の中はぐるぐると回っていた。

すると海はにっこりと笑って、

「ただいま…」

その一言だけを私に話しかけた。

私は涙を拭いたはずなのに、そこからまたとめどなくあふれ出してしまった。

そして素直な気持ち言葉に出た。

「お…おかえり」

海は私を力強く抱きしめてくれた。

彼も涙を流して私の再会を喜んでくれたのだ。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1912f/>

時の支配者

2010年10月12日02時28分発行